全学共通科目言語B連続企画

世界を知ろう！

2022年度 講演会筆録

（ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・朝鮮語）

立教大学　全学共通カリキュラム運営センター

全学共通科目言語B連続企画

世界を知ろう!

2022年度 講演会筆録

全学共通科目言語 B 連続企画

世界を知ろう！ 2022 年度 講演会筆録

目　次

◎ドイツ語・朝鮮語合同講演会

複言語の習得、そしてその先へ
～未来の可能性を広げよう～ 4

日　時：2023 年 1 月 16 日（月）17 時 10 分～ 18 時 50 分
講　師：小笠原 藤子氏（慶應義塾大学ほか　ドイツ語非常勤講師・朝鮮語翻訳家）
司　会：坂本 真一

◎フランス語講演会

フランス語でつながる、フランス語で広がる 26

日　時：2022 年 10 月 3 日（月）17 時 15 分～ 18 時 30 分
講　師：鈴木 美登里氏（株式会社白水社編集部）
司　会：関 未玲

◎スペイン語講演会

スペインは今 45

日　時：2022 年 7 月 1 日（金）17 時 30 分～ 19 時 00 分
講　師：土肥野 秀尚氏（バスク大学大学院近世史博士課程 1 年次）
司　会：松本 旬子

◎中国語講演会

私の留学時代 65

日　時：2022 年 12 月 10 日（土）14 時 00 分～ 15 時 30 分
発表者：南雲 大悟（外国語教育研究センター教育講師）
　　石橋 栄美氏（独立行政法人 エネルギー・金属鉱物資源機構）
　　政岡 和佳氏（横浜市鶴見図書館）
　　若月 来夢氏（中国人民大学国際文化交流学院修士課程 2 年次）
司　会：森平 崇文

全学共通科目言語 B 連続企画

世界を知ろう！～ドイツ語・朝鮮語合同講演会～

複言語の習得、そしてその先へ
～未来の可能性を広げよう～

日時：2023 年 1 月 16 日（月）17 時 10 分～ 18 時 50 分
場所：池袋キャンパス 14 号館 D501 教室

講師：**小笠原 藤子**氏（慶應義塾大学ほか　ドイツ語非常勤講師・朝鮮語翻訳家）
略歴：上智大学大学院文学研究科（ドイツ文学専攻）修士課程修了。
主な著書（ドイツ語）：『SUPERGUT! 改訂版』（共著 三修社 2021）、『場面で学ぶドイツ語 基本単語』（共著 三修社 2013）
主な翻訳書（朝鮮語）：チョン・スンファン著『自分にかけたい言葉～ありがとう～』（講談社 2020）、ヘムヘム著『今日笑えればいいね』（ワニブックス 2020）、キム・ウンジュ著『＋ 1 cm LIFE』（文響社 2021）、イ・ギョンヘ著『ある日、僕が死にました』（KADOKAWA 2022）、キム・ウンジュ著『私という植物を育てることに決めた』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）

司会：坂本　真一（ドイツ語教育研究室主任／外国語教育研究センター准教授）

坂本（司会）　今年はドイツ語と朝鮮語合同で「世界を知ろう！」の講演会を開催することになりました。本日司会を務めさせていただきますドイツ語教育研究室主任の坂本と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の講演会は「複言語の習得、そしてその先へ～未来の可能性を広げよう～」というタイトルで、小笠原先生にお越しいただきました。小笠原先生は現在、慶應義塾大学、國學院大学、日本大学、それから桜美林大学でドイツ語の非常勤講師をされながら、韓国語の翻訳家としてもご活躍されています。小笠原先生は、上智大学大学院の文学研究科で修士号を取得され、その後はドイツ語を専門としてご活躍されています。研究でもドイツ語教育で論文や発表が多数あり、講演でもご紹介していただけると思いますが、2020 年ごろからは韓国語の翻訳出版もされています。

もともとはドイツ語を専門とされていて、趣味の延長からか韓国語の翻訳につなげてこられたとお聞きしました。どうしたら、このような面白い経歴となったのか、バックグラウンドも含めてお話をお聞きしたいと思っています。では、どうぞよろしくお願いいたします。

言語の学びから仕事につなげた経験

小笠原　こんにちは。ご紹介にあずかりました小笠原と申します。たいした話はできませんけれど、いろいろな言語を学びつつ、それらを仕事につなげてきたということで、少しでも皆さんのモチベーションアップにつながれば嬉しいという気持ちで、今日はやって参りました。

早速ですが、タイトルにある複言語という表現を聞いたことがありますでしょうか。複言語と多言

語は違うので、そこだけ押さえておきたいと思います。多言語というのは、社会でいろいろな言語が独立して存在しているような状態です。一方複言語は、いろいろな言語が文化を含めて融合している状態を指します。例えば、話す、コミュニケーションを取るという場合に、この部分は英語でできるけれど、ここはドイツ語のほうがいい、あるいはスペイン語になってしまうなど、どんな言語を駆使してでも相手とやりとりができることが今、ヨーロッパでは求められています。シェンゲン協定というのがあり、ヨーロッパは 1995 年に国境が開かれてビザなしで自由に行き来ができるようになりました。それに合わせて、母語のほかに EU の中で 2 言語ができるようにしょうという考え方が生まれました。何の言語を使ってでもいいから、やりとりができればいいという観点に立っています。

小笠原 藤子氏

学習面から多言語の習得というと、英語だけを、ドイツ語だけを独立して学ぶことです。もちろん同一人物ですから、言語が互いに影響し合うことはあります。複言語の習得というのは言語を平行して学ぶことになります。フランス語の文法や単語が実はドイツ語の中にも入ってきているとか、そういう相乗効果で言語能力を高めていくということです。その辺りは、複言語主義、複文化主義、あるいは多言語主義などいろいろな捉え方、考え方がありますので、皆さんでもぜひ調べてみてください。それでは本題に入っていきたいと思います。

複言語主義に基づいて学んでいくと何かいいことがあるのではないか、というのが今回の大きなテーマです。まず第一部は「言語の関わり」です。これは自己紹介のようなものになるでしょう。ドイツ語講師になり、それから韓国語翻訳に至る中で、言語習得意義についてお話をしながら皆さんにも考えていただければと思っています。そして第二部は「複言語習得について、その秘訣は？」ということで、ちょっとおこがましいですが、いろいろな言語を学ぶにあたって、どういうことをすればより効率的・効果的に学べるかを私の経験から少し共有させていただければと思っています。

第一部：言語との関わり　ドイツ語講師から韓国語翻訳に至るまで

では、第一部の内容に入りたいと思います。突然ですが、皆さんはリンゴが好きですか？ それともミカンが好きですか？ それともメロン？ どれも興味はあるけれど、食べなくてもいいかな、という食わず嫌いが一番いけないですね。食べてみないとおいしいかどうかもわからないのですから。では、実際にリンゴもメロンもミカンも食べてみた。でも、どうも私の口には合わない。まずい。おいしくない。それならば、食べてからやめてもいいのです。それは皆さんの選択ですから。でも、食べないとまずいかどうかわかりません。今の例は全てフルーツでしたが、言語に置き換えてみてください。同じことが言えるのではないでしょうか。

次に、こっちのリンゴより、あっちのリンゴにしようかな、ということもあります。どういう意味かというと、リンゴにもいろいろあるわけで、例えば、ドイツ語一つとってみても、オーストリアで使うドイツ語、ドイツで使うドイツ語、スイスで使うドイツ語と違います。自分は音楽に興味があっ

てオーストリアに留学したい。だからオーストリアで自然に使われるドイツ語を知りたいという人がいるかもしれません。それはそれで構わないのです。ドイツ語だからといって、何も標準ドイツ語を学ばなければいけないのではありません。スキーが好きで山のドイツ語を知りたいなら、それもいいですね。自分の選択です。ですから、変更することもありえます。標準ドイツ語を始めたけれど、そこから少し早めにオーストリアドイツ語に切り替えていくというように。

それから今度は、リンゴも食べて、メロンも食べて、ミカンも食べる人がいるとします。でも、リンゴを一つ食べ終わるまでミカンを食べてはいけないかというと、そんなことはないですね。リンゴをちょっとかじってみて、それもかじり続けるけれど、ミカンもいいな、メロンもいいなというふうに、どれが自分に合っているか食べ比べもいいです。そして発展させてみます。リンゴもメロンもいいけれど、リンゴとチーズを合わせてみるのはどうかな、と今度はフルーツの中から抜け出してみることもできます。フルーツが言語だとしたら、言語からもう少し発展させて、これとコラボしたらどうなるかな、などいろいろな可能性をどんどん広げていくこともおもしろいのです。

最初に戻りますが、やはり、まずは食べてみないとわかりません。やめるのは全く問題ないのですが、学生の方は大学生である今の時期しかたくさん食べられないのですよ。時間がそれなりに取れて、いろいろな言語をつまみ食いできるいいチャンスですから、これを逃さないでください。

図１を見てください。バツが付いていたりしますが、これらは私がこれまでに関わってきた言語です。私はパリで生まれたので、フランス語に興味はありましたが、挫折ばかりでした。実はこの年末年始にパリに行ってきました。この歳になって、またフランス語を始めてみようかなという気持ちになれました。カタコトでサバイバルな日々でしたから。

日本語は母語です。ドイツ語はずっと大学でやっていましたし、その前に中学・高校で学ぶチャンスがありましたので、わりと早いうちから触れていました。韓国語については 12 年目になります。アジア言語をやってみたいという思いから始めました。そしてロシア語。実は社会人になってから半年、大学のクラスに通いました。一応文法をやりましたが、ちょっと難しかったですね。あとで出てくるかもしれませんが、ロシア語は理由があって始めました。ドイツ語より文法が難しいということだったので、ドイツ語ができるのだから、ロシア語にも挑戦してみようと思ったのですが、必要に迫られてやったところもあり、ものにはなりませんでしたね。

実は、昔イラクにも２年ほど住んでいました。アラビア語は身近だったのですが、結局、勉強することもなければ、勉強したいとも思いませんでした。なぜでしょう？ 別に人種差別でもなんでもないのですが、普段イラク人と接している中で

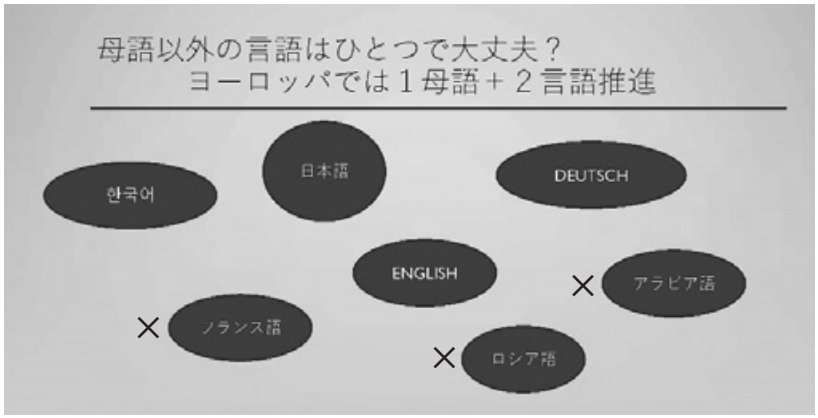


図１

は、英語でやりとりできましたし、将来的にこの国でこの人たちともっと会話をしたい、という気にはなぜかならなかったのです。

ですから、言語を選ぶ時は好きでないとうまくならない、モチベーションにつながらないといえます。よく学生さんに「中国語をやるか、ドイツ語をやるか迷っています」と言われます。なぜかと聞くと「中国語のほうが社会に出てから役に立つと聞きました」と。でも「いつかきっと役に立つだろう」というようなモチベーションでは絶対に長続きしません。例えば「いつか絶対サッカーを現地で見るんだ」とか、「ソーセージの食べ歩きをしたい」とか、「キムチチゲを本場で食べたい」とか。少しでも具体的に好きなことがあれば、やる気になるわけです。ですから私は必ず、自分が好きな言語、行ってみたいところの言語を履修しなさいと言っています。私のアラビア語はそういう意味で、まったく学習しませんでしたが、残念に思う気持ちもないわけです。

イギリスとアメリカにも少し住んでいました。ちなみに立教英国学院に通っていたので、立教とはそこでつながりがありました。英語は身近ではあったものの、日本人学校だったのでネイティブのように話せるようになったかというと、そんなことは全然ありませんでした。むしろイラクで使うことの方が多かったです。

言語と仕事

次に「言語と仕事」ということで簡単に事例を紹介したいと思います。

ドイツ語に関しては、大学４年生で突然、就職も考えずに留学を決めました。何も考えていませんでした。大学５年生、大学院のときに通訳や翻訳に携わるようになりましたが、実務翻訳は全然ダメでした。トライアルで「あなたは通訳はいいですけど、実務翻訳はだめですね」と断られたのです。立教大学の近くの会社でした。どうも細かいところまできちんと翻訳するのが向いていなかったようで、一緒に連れていった友達は採用され、私は残念ながら不採用でした。

その後、スポーツのミズノ（株）に就職しました。なぜかというと、通訳をしている時に、ドイツ語を使えるのはウィーン・フィルなどの音楽関係、スキーなどのスポーツ関係、この２分野だったからです。イベントも好きでしたからミズノ（株）に就職しました。その後、主人が転勤族だったので、いろいろな場所に住んでいるうちに北海道大学にたどり着き、そこでドイツ語講師としてのキャリアが始まります。

さらに名古屋に移りカルチャーセンターなどで教えたり、英語のお仕事もしていました。ドイツ語の実務翻訳にももう１回トライしましたが、やはりものすごい赤が入り、あきらめました。その時「やっぱりできないんだ、私」と気づいたわけです。トライ・アゲインということでやってみましたが、ダメでした。そういう向き不向きもありますね。

そして、子供も大きくなり、夫も単身赴任ができるようになってから、継続的にドイツ語の講師をするようになりました。ドイツ語の講師の傍らでは、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）に基づくオーストリア政府公認ドイツ語能力検定試験の試験官になり、今でもずっと続けています。ドイツ語に関しては、『場面で学ぶドイツ語基本単語』（三修社 2013）や『コミュニケーションツールとしての ドイツ語をいっしょに学ぼう !』（三修社 2021）などを執筆しました。

英語に関しては、家庭教師をやったこともありました。子育て時代は外に働きに行けなかったので、キルトの雑誌翻訳をやってみたり。名古屋に住んでいた時はアテンド業務までやりました。英語はアテンドくらいはできるだろうと思っていましたが、そんなに面白くはなかったですね。キルトの単語はアメリカで学んだので、キルト展示のパネル制作の翻訳はできるだろうと思い、そういう仕事を自分で探してみました。今、英語を何に生かしているかというと、ドイツ語の授業で留学生に英語で文法を説明したりしています。最近ではそういう能力もすごく求められるようになってきていて、「英語も役に立つ時が来たじゃない！」と思っています。このように、いつどこで学んだ言語がまた使えるようになるか、役に立つかわからないものです。今ドイツ語を学び、そしてやめてしまっても、何年かあとに役に立つ可能性は十分にあります。それは韓国語でも、何語でも同じです。

韓国語の場合は、旅行、買い物、食事、観光がしたいこともあり、2011 年に始めました。きっかけについては、時間があれば、あとでお話できればと思います。独学ですが、まず最初に文法書を３回通して読みました。英語もドイツ語も学んでいたので、文法にはどのようなものが出てくるかがだいたいわかっていました。受動態があって、仮定法があって、と。だから「ふーん、こんな感じね」と想像がつきました。私は研究や教育の方面では語彙を専門にやっていますから、語彙をとても大事に考えています。ですから、ある程度単語を覚えて、自分で使えると感じられるまでは韓国には行かないと決めていたのです。1 年間の期間を自分に設けて勉強してから行ってみようと。自分が未知の国に行ってどれだけわかるか、わからないかということを知りたかったのです。勉強を続けていく中で韓国人との交流なども増えていき…、学習し始めてから８年、ある日いきなり翻訳へ挑戦することに思い至りました。

私が翻訳活動に入ったきっかけは、そもそも本が好きだった私に「この本いいんじゃない」とプレゼントされた本の内容が、自分の中にスラスラ入ってきて、これなら訳せるかもしれないと思ったからです。内容もいいし、学生が読んでも直接的でパワーがあっていいと思いました。なんとなく「この本は、私にしか訳せない」と思い込んだのですね。それで、出版社に持って行く前に全部訳してしまいました。韓国エッセーブームの前だったのでちょっと早かったようで、持ち込んでも断られましたが。「なんで私が韓国語？」と思いながらも、友達が応援してくれたので諦めずにいられました。韓国に行けば夜な夜な読書研究会を開いてくれて、私のわからないところを全部解説してくれました。そういうのも面白く、「みんなで一緒に出版しよう！」という感じの勢いで翻訳したのが最初の一冊です。

そんな一冊めの『自分にかけたい言葉 ～ありがとう～』（講談社 2020）は実際、10 社以上に断られました。韓国では 30 万部のベストセラーでしたが。もともとは『나에게 고맙다（ナエゲコマプタ）』というタイトルで、直訳すれば「私にありがとう」です。これも散々考え、100 くらいはタイトル案を出し、講談社さんから OK をもらいました。実務翻訳とはまったく翻訳の質というか中身が違うからか、私には合っていたようです。

『今日笑えればいいね - 心向くまま自分らしく生きることにした』（ワニブックス 2020）ですが、これは偶然が重なり翻訳することになり、うちで柴犬まで飼うことになった本です。出版社に売り込んでいたのでだんだんとつながりができてきて、ある出版社に、この本の抄訳をお願いされてたのですが結局その出版社ではボツになってしまいました。でも、私が気に入ったので、ほかの出版

社に持ち込んでいいですかと話をし、数ある出版社の中からワニブックスさんに持ち込んだところ、「うち、この本の版権買いました」と言われたのです。そのような偶然が重なって、翻訳のお仕事に結びつきました。そのうち翻訳の依頼が来るようになりました。『私が望むことを私もわからないとき - 見失った自分を探し出す人生の文章』（ワニブックス 2021）は１冊目と同じ著者なので、私のところに依頼がきました。これは 100 以上の引用文があります。ドイツ文学ではゲーテやリルケ、ヘッセなどがあり、韓国人の詩人もパク・ノヘやペク・ソクなど大御所の人たちですね。ほかにもヘミングウェイ、ボードレールなど、ありとあらゆる有名な人の引用文を 290 以上も集めた本です。そこに著者の感想が書いてあるのですが、その２～３行の引用文を韓国語から訳すことに非常に抵抗がありました。なぜかというと、引用文は元々はドイツ語だったり、英語だったからです。「原文にたどらずしてこれを訳していいものか」と、一応文学を専攻した者として思ってしまったのです。２～３行ですが、ものすごく大変な作業になりました。部分的にピックアップされていると逆に翻訳は難しいと学びましたね。むしろ前後に流れがあったほうが訳しやすいのです。いろいろ大変でしたが、ドイツ語も英語も役に立った１冊ではありました。この言語をやっていなかったら、自分で直接確かめることもできませんでした。もちろん、それ以外の言語は翻訳機に頼ったりもしましたけど。

それからも翻訳依頼を受けるようになりました。次は３冊同時進行で、ちょっと体を壊してしまいました。『ある日、僕が死にました』（KADOKAWA 2022）は、私が訳した初の YA 小説になります。『私という植物を育てることに決めた』（ディスカヴァー・トゥエンティワン 2022）は『＋ 1 cm（プラス１センチ）』シリーズの著者キム・ウンジュさんの最新作で、やはり同じ著者なので翻訳の話が来たようです。大学を通して、あるいは、SNS のダイレクトメッセージで翻訳の依頼を受けました。この『+1cm』シリーズは、合計４冊あり、10 ヵ国以上で翻訳されていて、そのうちの２冊を翻訳させていただきました。キャッチーでユーモアのある言葉と素敵なイラストで読者を魅了し、あと少し見方を変えれば、世界ががらりと変わってくることを教えてくれています。

また最近では、オンラインショップもやっています。ショップ名は『Atelier Pyeol（アトリエ　ピョル）』で、ひょんなことからお友達と一緒に始めたものです。韓国のアーティストが作ったお香立てなどを販売しています。韓国のアーティストを探し出して契約書を韓国語で作成し、実際に買い付けに行き、日本向けに販売しています。実は韓国とは限っていなくてドイツや、フランス語ももう少しできるようになったらフランスの陶器作家にも声をかけたいと思っています。作家さんを集めた展示会のようなショップを目指しています。ホームページを見ていただけるとわかるのですが、よく展示会にあるように、アーティストの経歴を紹介し顔が見えるようにしています。ここでも、「こういうことをしたいな」と思い立ったときに、特に言語で阻まれることがありません。何かしたいと思ったときに複数の言語ができれば、簡単に一歩を踏み出せます。『SHIBAxSHIBA』は、『今日笑えればい

いね - 心向くまま自分らしく生きることにした』（ワニブックス 2020）の本の認知度をあげるためにもなんとかキャラクターを広めたいという意味合いで始めた、著者でありイラストレーターでもあるヘムヘムさんのオリジナルグッズを販売する公認サイトです。こちらも私の始めたオンラインショップです。作家さんたちとのつながりもできてきて、翻訳はさらに私の世界を広げてくれているという実感があります。

就職活動の失敗例・成功例

今度は就職活動についてお話しましょう。まずは失敗例をご紹介します。先ほどの話に少しつながりますが、大学時代にドイツ語を使ってアルバイトをしていたので、ドイツ語が使えるならどこでもいいと思っていました。「年に一度、SE としてプログラム説明のためにフランクフルトに出張させてあげるよ」と言われた会社に内定をもらいましたが、内定式に行って理系の人たちと話をしながら「とてもやっていけない」と断念してしまいました。会社が採用してくれたのは本当にありがたいことだったのですが、「ドイツ語が使えるから」だけではなく、自分に何ができるか、何がやりたいかが大事だと気づかされました。もし私がそこに入って実務翻訳ばかりやらされていたとしたら、その会社も悲劇だったと思います。

成功例としては、学生時代の通訳経験から、ドイツ語の有用な分野は、音楽とスポーツと知り、まず社会に出てみたいとの思いもあってミズノ（株）に入り、オリンピック関係の仕事をしたことでしょうか。例えばスキーのワールドカップやオリンピックの時にも、ドイツ語だけでなくて英語も使いました。その時にロシア選手が多かったので「ロシア語ももっとできるようになって」と冗談交じりに言われ、ちょっとやってみようかな、と思ったのが、先のロシア語を勉強したきっかけです。仕事のためだったので、やはりなかなかモチベーションにつながらなかったようです。

複数の言語を習得するメリット

複数の言語を習得するメリットは、異なる文化を比較できて、自分の気付きで視野が広がることです。もちろん 1 つの言語でもできなくはありませんが、やはり比較ができるというところが大きいと思います。

最近フランス語の文法を学んでいると、例えば、女性名詞や男性名詞などで、これはドイツ語と一緒だな、これは全然違うな、などの気付きがあります。それだけでも楽しいですね。どうしてそうなのかと考えを巡らせるだけでも面白いですし、その比較をすることで、文法に関しても頭に入りやすいと思います。

それから、人生の選択肢がケース・バイ・ケースで広がります。例えば、皆さんの将来のことを

いろいろ考えてください。私のように結婚相手が転勤族なので、同じ企業に勤め続けにくい状況に置かれることも、辞めたくなる状況もあるでしょう。そういうときに何ができるのかを考えたときに、皆さんが複数の言語を使えるとしたら、何かとコラボして新しいものを生み出せるかもしれません。私の知り合いの話ですが、本当に職がなくなってしまってハローワークに行ったそうです。相談窓口では「歳もとっているし、紹介できる就職口はありません。あなたは何ができるか全部書き出してください」と言われ、ドイツ語と英語と何々と…、と書き出したところ、「あなた、自分で会社を作ればいいじゃないですか」との助言を受けて、立派に翻訳・通訳会社を立ち上げたそうです。やはり、どこかの企業に勤めたらそれで安心というわけではなく、いつでも自分がさらなるステップを踏んで新しい何かをできるようにするためには、複数の言語ができれば、きっと役立ってくれるでしょう。プラスαになることはあっても、それで足を引っ張られることはないと思います。

第二部：「複言語習得について、その秘訣は？」
複言語習得は一石何鳥になるか

さて、第二部に入りましょう。複数の言語を習得するということは一石何鳥になるか、ということです。言語には５技能あると言われています。聞く、話す、書く、読む、それからやりとりする能力。この５技能ですが、皆さん、そのレベルは１つの言語でもバラバラではないですか？ ちょっと想像してみてください。例えば英語なら、読みはすごく得意だけれど、話すのはちょっと……とか、文法はできるけれど聞くのは難しいとか、いろいろあると思います。複数の言語を学ぶ場合、それはもっとあるのです。例えば、読むのは英語が得意だけれど、書くのはドイツ語のほうができるとか、話すのは韓国語のほうができるけど、スペイン語だったら聞くほうができるとか。ですから、複数の言語でコードスイッチングはまさにそういう状況の変化で起こるのだろうと私は思っています。

例えば、先ほどもお話ししましたが、私はアメリカでキルトを学んだのでキルトに関する用語は英語から入っています。ドイツ人とキルトの話をするときは、ドイツ語を使いながらも、要所で英語が入ってくるのですが、そういった背景が理由としてあります。結局、目的によって言語を習得するのが一番早いですし、習得していくことが多いので、自分がいかに関わったかによって、どんな言語能力が身についているかが変わってきます。その言語で関わった分野に関してはその言語で話せる、または表現できるということになると思います。その目的自体が常に変化して、その変化に合わせて目指すレベルも変化するのは自然なことですよね。例えば、旅行に行きたいとだけ思っていたのに、旅行に行ったらもっと会話をしたいと思い、会話ができるようになったら今度は議論までできるようになりたいと発展していくのです。そうすると、仕事なのか、それとも趣味でいいのかなど、いろいろな選択肢が増えていきます。留学してみたい→いや住んでみたい→仕事を探す？と考えるようになったり、留学してみた→いや、自分には合わなかった→日本最高！日本で就職。それでもいいのです。

Atelier Pyoel の
サイト

何をやってみても、結局それはすべて自分の糧になっているわけですから。過去に食べたもの、見たもの、読んだものがすべて今の自分を作っているわけで、そのインプットが多ければ多いほど、後でその引き出しは増えていき、引き出せるということです。一石何鳥にもなるでしょう。

それでも、言語を習得するためには少しの頑張りが必要ですね。動機は必ずしも立派なものでなく、些細なことでもいいのですが。「ドイツソーセージやキムチチゲを本場で食べたい！」というのは、勉強をずっと続けていくには少し弱くないですか？ テスト勉強するたびに「ソーセージ、ソーセージ！」「キムチチゲ！」と言っていても、なかなかモチベーションをキープできません。どうすればいいかというと、自分で何か更なるモチベーションを探す必要性があります。これを探せるかどうかによって随分変わってくるのではないでしょうか。何でもいいのです。私の場合でしたら「１年後に必ず自分の韓国語能力を必ずチェックする」という目標でした。１年後始めてソウルを訪れた時は、全然読めませんでした。なんとなく話せて「意外と話せるな」と感じましたが、読めませんでした。ハングルに打ちのめされた感がありました。次に来る時までには、なんとしてでもハングルをもう少し読めるようにしよう、と。こんなふうに、自分でモチベーションを探す必要があるのです。そして、できれば一時は集中して学ぶことです。方法は自由ですが、ある程度の量をこなすことは重要です。学生さんでしたら、テストや資格試験をうまく使うといいですね。目の前に試験日が迫って来るわけですから、そこに向けてやってみてください。ただ、それが一夜漬けだとあまりにももったいない。わかっていても……という人もいるでしょうけれど、一生懸命勉強するのに、そういった機会を利用するのは有用でしょう。私も韓国語の資格試験を最初のうちは受けていました。そのうちやめてしまいましたが、試験は集中して勉強するいい機会になるでしょう。

いつか役に立つ時もあるかもしれない、とも言いましたが、役に立つからではなく、楽しいから勉強するのが一番だと思います。常に意識していれば、それはもはや勉強とは思えなくなります。私はいつも「勉強するのが好きね」と家族に言われますが、勉強しているつもりは全くありません。楽しいことをしているだけです。

学習は気付きの宝庫ですから、そこに敏感になれればもっとずっと楽しめます。文法や教科書の内容が面白くないと思っているときでも、自分で楽しく工夫してみてください。例えば、ドイツ語の話になりますが、ドイツ語には名詞の性が男性、女性、中性の３つがあり、名詞ごとに決まっています。

SHIBA × SHIBA の
サイト

名詞と性の組み合わせがどうしても覚えられないという学生がいる場合には「色分けで覚えたら？」とアドバイスすることもあります。「Kartoffel（じゃがいも）は女性名詞ですが、以前ある男子学生がどうしても女性に思えないと言いました。そこで、彼はじゃがいもの絵を書いて、そこにリボンと口紅を描いて絵にして（ジェンダーに引っかかるかもしれませんけれど……）自分で楽しく覚えられるように工夫したと聞きました。また、発音に関して、ドイツ語のＲの音は喉で鳴らしますけれど、巻き舌でもいいですね。以前、高校で受け持っていたクラスで、「巻き舌ができないんです」という人に、クラスメートの子が「サッポロラーメンの『ッポロ』の部分を巻き舌で何度も言えばいいよ」と提案していました。そうするとみんなが楽しそうに、「サッポロラーメン、サッポロラーメン」と巻き舌で発音し「できた！ できた！」と喜んでいました。友達とやりとりする中で楽しく工夫して勉強する方法が発見できることもありますね。

楽しく学ぶというのは、あくまでも自分のために言語を身に付けるということです。要はテストのためではない勉強です。よく「テスト前だから勉強をする」と言いますが、私はいつも「自分のための語彙を広げてください」「アウトプットしてください」と言っています。もし、この単語は一生に一度しか使わないと思うなら、それを覚えるために労力を使うのはもったいないですよね。その時間に自分の好きな単語をほかに５個覚えられるなら、そこでテストの点を１点、２点くらい落としてもいいのではないでしょうか。例えば、最初に英語を学ぶ中学１年次の時にリスという単語が出てきました。「Squirrel（skwi-ruhl）」です。発音も難しく、スペルも難しいです。一生懸命覚えましたが一生使うことがなさそうでした。私は「Squirrel」はいつ使うことがあるのだろうと、一生懸命そのチャンスを狙っていました。そうしたらある時、ロサンゼルスでゴルフをしていたらリスが来たじゃないですか。私のホットドックのソーセージを食べに来たのです。そこで、ここぞとばかり一緒に回っていたアメリカ人に「Squirrel, Squirrel」と話しかけました。あの時の頑張りがやっとここで無理矢理でも役に立った、と思えた瞬間でした。ですから、世間一般の人が「これが大事だ」と言っても自分にとって大事でなければ、そこはうまく取捨選択してください。自分が実際に話したり書いたりする中で使いたい単語と、見たり聞いたりして意味が理解できればいい単語とをうまく分けて覚えることです。皆さん忙しいので、効率よく勉強することが、いろいろな言語を勉強するうえで大事だと思います。そして、少しの努力を惜しまずに一定期間続けることも大事です。例えば、夜寝る前の５

分、今日は韓国語、明日はドイツ語、明後日は英語を勉強するとか、１日に２単語ずつやろうとかですね。私はいつも寝る前の時間を使っています。この 12 年間、韓国語をやって、韓国語に触れなかった日は２日だけです。その２日はいつかというと、１日は東日本大震災の当日です。もう１日は手術の翌日です。手術の当日はまだ朝に勉勉できましたが、その翌日はさすがにできませんでした。今は毎日のように友達からカカオトークという LINE のようなメッセージアプリでやりとりしたり、本を読んだり、その程度ですが。最初のころは、１日７単語は覚えようとか、５単語は覚えようとしていました。年齢的に皆さんよりも上ですからすぐ忘れてしまうんです。またやり直し、やり直し、みたいな感じでした。それでも「ちょっと５分」と思えば、負担なくでき、意外と積み重なるものです。

あとは「コミュニケーションできるチャンスをつくって逃さない」というのも秘訣です。自分の語学レベルの低さを恐れないことです。私は、どのみちネイティブにはなれないと思っています。だからといってサバイバルばかりでいいわけではありませんが、絶対にネイティブにはなれないのです。日本語だって難しいですよね。本当は私も翻訳に携わる以上は日本語こそもっと勉強しなければいけないと思っています。外国語を学ぶ際には、きちんとした文法や発音は大事です。でも、伝わらなかったら恥ずかしいとか、いろんな邪念があって話せないことが多いです。私がどういうご提案をさせていただくかというと、旅先やバイトで、道に迷う外国人に、お風呂の中で言語を使って見ることです。まずお風呂の中は誰もいません。そこで、今日あったことをドイツ語や韓国語にしてみてください。途中でわからなくなっても辞書は引けないので、こう言い換えてみたらどうかな、と考えてみます。そしてお風呂から出たあとに、あの単語なんだったかな？とチェックをすればいいのです。誰かが聞いているわけでないので、そこで存分に練習ができます。

次にアルバイト先です。皆さんのアルバイト先に外国人が来たときにちょっと声をかけてみましょう。「僕、ドイツ語やってるんですよ」「私、韓国語をやってるんです」などと言えば、話がとても盛り上がったりします。どんどん積極的にそのようなチャレンジをしてください。

旅先の例としては韓国語のエピソードをお話しましょう。学び始めから１年経って初めて韓国に行ったといいましたが、その時に私はタクシーの中をフルに活用しました。タクシーがとても安いので、よく乗ってました。タクシーの運転手さんに、「안녕하세요（アニョハセヨ）」とあいさつしながら乗車し、私がしたことに興味があるはずもありませんでしたが、「昨日はどこに行って、今日はここに行って、もう韓国って最高！」というようなことを言うと、向こうから話をいろいろと振ってくれます。全然わかりませんでしたけれど、また私が何かを話す。通じたかどうかだけを確かめたい一心でした。見方によっては、運転手さんにとっては迷惑行為だったかもしれませんが。それがだんだん通じるようになり、「あなたはここに住んでるのですか？」、「あなたは韓国人ですか？」と尋ねられると嬉しくなりますし、最初のころとは随分変わってきたと実感ができました。ホテルのフロントでも同じです。

ドイツ語の例をお話ししましょう。留学してすぐの頃に、スーパーのレジに並んでいたら、次が私の順番だったのに、いきなり隣のレジが空いて、私より後ろの人がそちらに並んでしまいました。「私の番なのに！」と思いました。ヨーロッパでは、自分を強く出していかないと少々見下されるようなところがあるので、「いやいや違う！」と主張しました。たいしたドイツ語ではなかったと思いますが、それを言ったら、後ろに立っていた方が「次はあなたよね」と認めてくれました。その時には確かフ

ライパンを買ったのですが、当時の状況をよく覚えています。自分で勇気を出したものの無我夢中で実際に何を言ったか正確には覚えていません。間違ったドイツ語だったかもしれませんが、そういった成功例はずっとずっと後まで胸に残るものです。

そのほかの秘訣は、知りたい単語や知っていたのに忘れてしまった単語を思いだせなかったらどうするかです。すぐに辞書を引く傾向にあるのですが、まずは記憶をたどる。フロイトいわく前意識があるはずですから、それを引っ張り出しましょう。それでもダメだったら、ほかの言語で言えるか試してみましょう。ことばというのは常に使っていないと忘れてしまうので、英語にしてもドイツ語にしても、普段から、それを呼び起こす作業をするといいと思います。その次にほかの言語で言えるかをチェックし、それでも言えなかったら辞書を引く。私の場合は、英語とドイツ語と韓国語で、全部わかるまで引くようにしています。そうすると、初めての単語もあれば、これはドイツ語で知っていたけれど韓国語では知らなかった、あるいはその逆があったりします。単語が似ていたり、全然違ったり、その都度発見があり、とても面白い作業です。

幸福の基準　自己決定を支える複言語

最後に「幸福の基準」についてお話したいと思います。

「健康」、「良好な人間関係」はドイツでもヨーロッパでも日本でも大事です。そして、何十年も前からドイツでは「自由意志による自己決定」というものが３大基準に入っています。日本では学歴や職業、所得など幸福の基準が上位にありましたが、近年の調査では、日本でも「自由意志による自己決定」が、学歴や職業、所得よりも多く幸福の基準として選ばれています。これは引用ですが、「自己決定によって進路を決定した者は、自らの判断で努力することで目的を達成する可能性が高くなり、また、成果に対しても責任と誇りを持ちやすくなるということから、達成感や自尊心により幸福感が高まることにつながっていると考えられます。日本は国全体で見ると『人生の選択の自由』が低く、そういう社会で自己決定度の高い人が、幸福度の高い傾向があることは注目に値します」[1]という調査結果が出ています。ですから、今や日本でも、いかに自分で何かを決めていけるか、そのために自分で何か自己決定できるかということが大事で、そこを支えていくのに複言語や複文化にふれた経験が関わってくると思います。もちろん、それ以外の要素もたくさんあるでしょう。皆さんの経験全てがそれにつながるわけですけれど、そういう引き出しはあればあるほどいいですね。自分で何かを決めていくときに、それをバックアップするもの、引き出しを多くすることが大事だと思います。その際に大切なのは、向き不向きは人に決めさせないことです。要は、先ほどから何度も話していますが、私は実務翻訳ではさんざん失敗しました。だから翻訳なんて絶対できないとずっと思い込んでいました。最初に韓国語の翻訳書を出す時も、最初は人にも言えなくらいで、自分でも半信半疑な部分がありました。でも、今私が訳しているような翻訳書は、トリセツのような類の翻訳ではありません。自分の感性を活かし、自分の言葉に置き換えて日本語にする作業で、私にでもできるのではないかと勇

1 「所得や学歴より「自己決定」が幸福度を上げる　２万人を調査」https://www.kobe-u.ac.jp/research_at_kobe/NEWS/news/2018_08_30_01.html（最終閲覧日 2023.1.16）

気を振り絞ってやってみた結果が、今の７冊です。この先あと２冊、自己啓発書の翻訳本を出版することが決まっていて、このように苦手だと思っていたことが成功に結びついているのは、まさに自分で判断し決断したからでしょう。

そして、もう一つ大事なことは自分で壁を作らないことです。よく言われることですが、「自分にはロシア語なんてとても無理」「ラテン語 !? いやいやいやいや。ラテン語のラの字もちょっと無理」と思わずに、最初のメロンの話と一緒で、とりあえず食べてみないとわかりません。決めるのはその後でいいので、特に学生の皆さんはいろいろなことをやってみてほしいと思います。それこそ私も、新たな言語を学ぶのは最後だろうと思って 12 年前に韓国語を始めたわけですけれど、今はまだいけるかなと思っています。どんどん考え方もポジティブになっています。オンラインショップも決してうまくいっているとは言えませんが、本業があって、いろいろなことを試してみるというのは、人生において楽しいことだと思います。

すぐに何か結果が出ることばかりではありません。若い皆さんでしたら、それこそ 20 年、30 年経った後に「あの時頑張っていたドイツ語が、韓国語が、英語が、今こそ使える」という時が来ることもあるでしょう。やっていなかったらゼロですね。そういう意味で、コツコツとずっと続けていくのもいいですし、一旦休んでからまた始めてもいいでしょう。とにかくいろいろな言語や文化を知ることによって、様々なことに気付き、自分の人生を今よりも更に豊かに発展させていけると思いますよ。

とりとめのない話でしたけれど、これで終わりにさせていただきます。

「ご清聴ありがとうございました。」「Vielen Dank für Ihre Aufmerksamkeit ！」「경청해 주셔서 감사합니다！」

質疑応答

坂本（司会） 小笠原先生、大変興味深いお話ありがとうございました。小笠原先生がバイタリティー溢れる方なのは存じ上げていましたが、先生が実際にどうやって韓国語を使って仕事を得てきたのかということに関しては、私自身これまで聞いたことがありませんでしたので、やはり「売り込む」というのはとても大事なのだと感じました。もしよろしかったら、そもそもどうやってドイツ語の先生になられたのかを付け加えてお話ししていただけないでしょうか？

小笠原 結婚して、働いていたミズノ (株) から離れ、アメリカに住んでいた時に、UCLA でドイツ文学の講義を聴講したりドイツ語に関わり続けました。日本に帰ってきて子育てして、２人の子供が幼稚園くらいの頃には北海道にいました。その時に、今の私に何ができるのだろうと考えて、ドイツ語なら教えられるレベルだと思い、始めました。ドイツ語ができなかったら得られなかった職でした。実際働いてみると、子育ての経験も多く生かすことができて驚きました。そのひとつが、忍耐を持って学生の反応を待てるということです。

坂本（司会） それでは、ここから質疑応答の時間になります。もしよろしければ、会場の皆様もぜひこの機会に何かご質問していただけたらと思います。いかがでしょうか？

質問者①　今日はどうもありがとうございました。私自身、語学に関心はありますが、それこそ最初に先生が言っていたように、動機が弱いせいでなかなか身に付かないですし、なかなか続かないというのが改めてわかりました。

質問なのですが、EU のシェンゲン協定に基づいて、住んでいる人は複言語・複文化主義に基づいた教育を受けているというお話ですが、今私が言ったように、誰にでもできることではないのではないかと思います。実際のところがどうなのか、滞在する中でご存知のことがあったら教えていただきたいです。島国の日本と違って、ヨーロッパ大陸ならではの考え方なのかなとも考えたりしたのですが、その点について、もしご存知のことがありましたらお願いします。

小笠原　ありがとうございます。シェンゲン協定においては、EU の中ということで 1 プラス 2 言語、いわゆる母語のほかに EU 内の 2 言語ができることを推奨しています。もちろん強制ではありません。ただ、もともと国同士が近いので、その中の留学制度なども充実し活発に行われています。複言語・複文化主義に基づき、どの言語であってもとにかくやりとりができるといった社会的な存在となる人材を育てていこうと打ち出しています。もちろん少数民族による言語も尊重し守っていこうという意図も含まれています。

日本であれば、例えばトヨタの工場があるような地域では、スペイン語を話す話者と共存しなければいけなくなっています。そこで、日本国内においても複数の言語の共存を考えるという試みが、最近なされています。コロナ禍でどれくらいそれが変化したのかわかりませんが、外国人労働者の場合は家族もいますので、その方々への配慮も含めて、共存を図っていくことが必要だと思います。

そして、言語習得の向き不向きに関して言うとすれば、ゾルタン・ドルニェイというイギリスの心理・言語学者は、どんな人でも、関心をもって学び続ければ、あるところまでは必ずたどり着くという話をしています。それが 3 カ月の人もいれば、 1 年かかる人もいるかもしれません。歩みは人それぞれだと思います。かけられる時間も違いますし、熱意も違います。でも、必ず一定レベルまでには誰でもたどり着けるということです。ドルニェイは言語学習時におけるモチベーションも研究していますけど、私自身この点がやはり一番大事なところだと思います。学生にも言うのですが、例えば、お城めぐりがしたいとか、メルヘンが好きな人なら、そこの語彙から始めてもいいのです。サッカーだったらサッカーでもいい。後からでも文法はついてきますので。授業ではたとえそのようなテーマを扱っていなくても興味のある分野なら、楽しく学べるはずです。少しの自分のこだわりを追求するという考えで取り組むとモチベーションが上がるのではないかと思います。

坂本（司会）　実際に英語以外の言語を選択するときには、「やってみたい」と思うに至った何かしらのモチベーションを誰しも持っていると思うんですね。私の場合、ドイツ語を選んだ背景には、実は音楽があります。高校生のころクラシック音楽が好きでしたし、実際に楽器も演奏します。小笠原先生の場合、何かドイツ語を選んだ理由、それから韓国語を改めて選んだ理由はありますか？

小笠原　あります。ドイツ語を選んだ背景には、市場でイチゴを売っているおばあさんに「イチゴをどうぞ」と言われましたのですが、くれるのか、買わせたかったのか当時は全然わからず「Nein,

danke（けっこうです）」としか言えませんでした。でも、「Bitte, bitte（どうぞ、どうぞ）」と言われたので、「Danke schön!（どうもありがとう）」と言ってイチゴを受け取りました。その時に、この人ともっと話したいと思ったのが最初のきっかけです。ドイツ語に関しては、イチゴに惹かれたわけです。

韓国語の場合は、少し違います。ドイツ語教育の現場に立ちながら、より良い授業を目指す中で、どうしたら学生がドイツ語を面白く、楽しく勉強できるようになるのかを研究していました。ところが、私がドイツ語を学んだのは何十年も前で、今と環境がまったく違います。ですから、今の環境で私が言語を学んだらどうなるだろうかと、自分をモニタリングしたかったのです。それで、まずは独学で始めたわけです。モチベーションは人よりも高いだろうと、ストイックに毎晩勉強し、資格試験を受け、学生と似たようなことをいろいろやってみました。学生は覚えが早いなとか、学生のうちに覚えておけばよかったなど、本当にうらやましいと思うこともありました。気付きもたくさんありました。例えば、ドイツ語と語彙の比較をしてみたのですが、韓国語で学ぶものとドイツ語で学ぶものと、どちらにも最初の基本語彙があり、「行く」「来る」などは一緒ですが、やはり文化を反映しています。韓国語は抽象的な表現が多く、ドイツ語のほうがより具体的に物事を述べるので、そういう単語が基本語彙に入っているという、面白い研究結果も出ました。

坂本（司会）　ありがとうございます。ほかのご質問はありませんか？

質問者②　本日は貴重な話をありがとうございます。私は今大学４年生で、就職活動が終わって自分の時間がゆっくり持てている状況なので、好きだった韓国語を学び始めています。徐々に翻訳の仕事にも新たに興味が出てきて、将来翻訳家も目指してみたいと考えています。そう考えながら勉強しているものの、翻訳家のゴールというか、一つの目標達成の手段として、翻訳家として働くために持つべき最低限のレベルが知りたいです。どのレベルまで言語を習得できれば翻訳のお仕事に挑戦できるのか、いま一つ自分の中でつかめていません。そこを翻訳のお仕事をされている小笠原先生が感じるものがあればお教えいただけないでしょうか。

小笠原　翻訳自体はどの語学レベルであっても始めていいと思います。ただし内容によっては歴史や文化背景をかなり知らなければいけないものもありますので、知識や調査力が必要とまりますね。でも翻訳には、それこそ絵本などのいろいろなジャンルがありますので、自分が読めると思うものから選択して、自分で訳していってみてください。私の経験から言うと、お友達をたくさんつくって、「これはどうしてこんなふうになるの」と何でもすぐに聞けるような環境が得られるといいですね。そうすると、自分がドラマで見たような文化とはまた違って、「だからこういう言動になるのね」と思わされることもあります。

もちろん自動翻訳機にかければ、日本語と韓国語は割と近いので、そのままでもいけることもあるくらいです。けれど、翻訳というのは、自分が読んで、さらに自分のフィルターをかけてアウトプットするところに面白みがあると感じています。もちろん日本語を磨くことも大事ですので、いろいろな本を読んでください。韓国語も大事ですが日本語の表現力を磨くことも大切ですね。

それから翻訳講座もよく開かれています。翻訳大賞などもありますね。そのような学校で一生懸命勉強して大賞をとった人が翻訳書を出していることを、実は私は出版してから知りました。ただ、翻訳学校に一から入るとお金も時間もものすごくかかります。あくまで私の考えですが、翻訳は学んでできる部分とそうではない部分が非常にたくさんあります。テクニカルなことで、ある部分についてはこのように訳せばいいというお決まりのやり方があっても、全体の中でみるとそれが合わないこともありますし、出版社によっても意訳の幅はずいぶん違います。これでいいだろうと思って翻訳したものを、出版社からここまで砕いて訳してほしいと言われることも多々あります。譲れない部分は最終的に尊重してもらえますが。実際、翻訳だけで食べていくのはちょっと難しい世界ですが、ご就職が決まったということなので、まずはそこを軸にして、その間に自分で翻訳できそうなものを見つけて訳してみたり、推敲してみたりしてください。必ずしも翻訳学校に通わなくても、自分の書いたものを友達に見てもらって理解されるか、感動してくれるかなど、翻訳の質を確かめる方法はいろいろあると思います。

質問者②　勉強になる話、ありがとうございます。

質問者③　非常に面白い話をありがとうございました。自分は受験期に世界史を学んでいる時に、ドイツの建築物が出てきて、例えば（ポツダムという都市にある）サンスーシ宮殿などがかっこいいと思い、ドイツ語の勉強を始めました。一応、旅行で使えるくらいが目標なのですが、目先の目標として検定試験を考えています。今は３級を取ったので、今後２級も受けたいと思っています。その際に、過去問などを解いていて、リスニングが、リーディングなどに比べて自主勉強の方法があまりわかっていないと感じています。例えば、CD BOOK を聞くという勉強でも、映画を見るという趣味でもいいのですが、何かリスニングの能力を伸ばすうえで、先生の中で役立ったことがあれば教えてください。

小笠原　はい。リスニングは一見受け身なようにみえて、実はすべての能力を投入しなければできないものです。一番難しいですね。聞きながら文法や語彙がわからなければいけません。その速さにも、その文脈にもついていかなければいけないので、本当に難しいです。

個人的な意見ですが、一番大事なのは、自分で、リスニングと同じ速度で発音できるかということですね。語彙も大事ですが。ゆっくり言われればわかるし、文法的にも問題なくわかることも、パッと言われたときに「え、なになになに？」となることがあります。それはなぜかというと、自分がその速さについていけてないからです。例えば「赤い」という意味の単語、ドイツ語では「rot（rót）」と言いますが、それを「ロート」とカタカナ表記でしか覚えていないとします。文字を見れば「赤」とわかりますが、聞いたときには「ホォ゛ートゥッ？ 何のこと？」と一致しないのです（※ドイツ語のＲの音は喉の奥の方の摩擦音なので、下線部が擦れたような音に聞こえる）。ですから、できるだけリスニングで流れてくる速さ以上に速く、自然な流れで発音に注意しながら話す練習をすると、自然と音を聞き分けられるようになります。リスニングで「全然難しくて聞こえない！」と言う学生が多い時に、私のクラスでは、ストップウォッチを使って、ものすごく速く原文を読む練習をしてもら

います。２、３回やったあとに、もう１回原文の音源を聞くと、こんなにゆっくり言ってたんだと実感できる学生がたくさんいます。問題集に付いているリスニング問題でもいいので、自分でできるだけ速く正しい発音で発音するといいのではないかと思います。坂本先生からも何かあればお願いします。

坂本（司会）　専門的には音声教育にもつながる話ですね。シャドーイングのスキルも少し身につけるといいのではないでしょうか。ある音を聞いて、その音を再現する能力が必要です。結局、自分で発音できない音は、聞きとれないし、そもそもインプットに至らないといわれています。口のトレーニングあるいは耳のトレーニングのどちらから攻めていくのかは人の好みだと思います。僕がドイツ語を学んでいた初期の頃に試したのは、教材付属の CD を、意味はわからないけれどラジオのようにずっと流し聞きするということでした。夏休みの期間１か月ほどやり続けたのですが、そうすると秋学期に授業に出てきた時に、いつの間にかすべてがゆっくり聞こえるようになっていたのです。それは、自分が音楽の経験があって耳がよかったからというのもあったと思います。ですが、必ずしもそういうやり方をとらなくても、発音の勉強をしっかりしてみることで、口がそれに慣れていくこともあります。今の小笠原先生のお話のように、ストップウォッチを使って何度か早く言ってみて、話速についていけるようになると、聞いたときにも同じようなリズム感やスピード感で音がキャッチできるようになるのは確かにある話だと思います。そういう意味で、口の動きから始めるのも一つのストラテジーかなと、お話を聞いていて思いました。いろいろな方法がありますからね。

何かほかにご質問はありますか。

質問者④　今日はありがとうございました。留学生です。言語を学ぶとき、中級レベルでは、母語で単語や文法を学びますか？それとも学んでいる言語で学びますか？

小笠原　ドイツに留学していたころは日本語を通して学ぶのが面倒で、ドイツ語だけで学び、独独辞典をよく使っていました。当時は日本語を介すると時間的にもったいないと思ったのです。でも、今は翻訳をしていることもあって、母語を間に挟んでいます。ただ、母語で意味を調べても、それがしっくりこないことが多くあります。そんな時、韓国語だったら NAVER（ネイバー：韓国で主流のインターネット検索サイト）で調べ、その中から似たような例を選び、さらに韓国人に合っているかチェックしてもらっています。

最初は日本語でも調べますが、やはりニュアンスがずいぶん違います。ドイツ語ももちろんそうです。やはり必ずしも１対１の関係ではないので。そこが面白いところでもありますけれど、「何とも表現できない」というのがドイツ語にも韓国語にもあります。もちろん他の言語にもあるでしょう。

同じ単語であっても、結局は背景の文化がわかっていないと、使う場所も使い方も違ったりします。ただせっかく留学されているので、日本語をもっと勉強したいのであれば、最終的には日本語で意味を確認するといいと思います。ケース・バイ・ケースですね。

質問者④　もう一つ質問です。私は今は寮に住んでいて、そこにドイツ人の方が何人かいます。自分

もドイツ語を習い始めてみたのですが、方言が多すぎて彼らの言っていることを理解するのが難しいです。先生はどのように方言の壁を乗り越えましたか？

小笠原　方言の壁、難しいですよね。私も全然わからないですよ。でも、こちらが標準語を使えば、相手は合わせてくれます。同じオーストリアのザルツブルクとウィーンでも違います。単語自体が違うこともあれば、発音自体が違ったりしますので、私はそこの壁は乗り越えられないです。

韓国語であればソウルと釜山（プサン）ではずいぶん違います。イントネーションが違ったりするので、それを楽しく聞いて、実際に真似たりしています。だからといって話せるかといったら、そんなことは全くありません。大邱（テグ）にもお友達が一人います。大邱は釜山とソウルの間ぐらいの南のほうにあり、かなり言語上の特徴があります。私に気を使ってできるだけ標準語で話してくれていますが、イントネーションは完全に方言ですね。

やはり、壁を乗り越えるにはどれだけ慣れるかでしょう。方言で全部話したいのであれば、相手に質問しながら覚えていくのもいいのではないでしょうか。なかなか難しく、根気がいりそうですが。日本語も難しいですよね。東北や沖縄などは全然わかりませんから。方言にも幅があると思います。

質問者④　はい。ありがとうございました。

坂本（司会）　教員でも、いわゆる CEFR の基準で C2 レベルに達していたとしても、方言まで聞き分けるのはやはり難しいですよね。おそらく、ヨーロッパの C2 レベルの方だったらある程度できる人もいるかもしれないですが、発音とかイントネーションのレベルまで再現できるかどうかといわれると、結構難しいですね。理解はできるかもしれないけど、自分も方言を使って言えるかどうかは、なかなか難しいと思います。

小笠原　そうですね。YouTube などでも留学生で大阪弁という人はたまにいますね。でも、話すのはなかなか難しいですよね。スイスのドイツ語などはすべて巻き舌になりますから、リスニングも苦労します。一度、スイス人の方の医療通訳をやったことがあります。医療関係だから間違えられないじゃないですか。呼吸器関係の話をしているのに「その発音はなんとかならないの !?」と感じることがありました。最終的には筆談の方法をとりました。「間違っちゃいけないから書いて！」と言って。

坂本（司会）　やはり、学ぶ立場の時には、ある程度は標準を目指すほうが、後々役立つことがある気がします。

小笠原　そうですね。

坂本（司会）　最初にご質問されていた内容ですが、今ドイツ語はどこで学んでいらっしゃるのですか？

質問者④　方言は寮でドイツ人の友人達に教えてもらっています。

寮の食堂でドイツ人５人くらいが、さまざまな方言で話すんですけど、ある人が教えてくれた言葉をほかの人が「違う、違う！」と言って騒ぎになったりするので、どうすればいいのかな、と。どの方言でドイツ語を学べばいいのかなと思いました。

小笠原　そうした場合にはやはり最初は標準語で覚えるのがよいですね。もう少し説明しないと通じないのでああだこうだと楽しく話していれば、自然に身についてくかもしれませんね。

坂本（司会）　ほかにご質問などはございませんか。

質問者⑤　今日はどうもありがとうございます。

母語一つと、二つ選ぶというお話ですが、私は 20 年前にドイツに行っていて、当時はまだそういう哲学というか考え方は広まってはなかったので、非常に興味深くうかがいました。二つ選ぶというのは、例えばフランス人がイタリア語とスペイン語を選んでも、なんとなく親和性があるので、すぐに三つになってしまいます。あとの二つを選ぶのは実用的な観点なのでしょうか。どのような観点で、あとの二つを推奨するという考え方なのでしょうか。

小笠原　基本的には、何を選ぶかはオープンでしょう。理念としては、ヨーロッパの中で移動が自由になっているわけですから、そこでお互いが持ち寄った言語で、例えば、ある人とは英語ではやりとりできないけれど、スペイン語だったらある程度できるというような状況を目指しているわけです。やはり実用性の面を押しているのだと思います。

質問者⑤　三つできるというけど、言語同士が近すぎると、それではあまり努力していないのではないかと思ってしまったので。

小笠原　そうですね、それで非難されることはないと思います。個人の自由ですから。例えば CEFR は A1 から C2 まで６段階に分かれています。そこで「私はスペイン語は A2 だけれども、ドイツ語は C1 だよ」というと「だいたいこのくらいなんだな」と、お互いに共通の参照枠で言語能力が測れるのです。そうすると、互いにちょうどいいレベル感をみつけ、やりとりができるところに合わせられるようになります。ですから、三つの言語ということで、フランス人がイタリア語とスペイン語のラテン系を学んだとしても全く問題はないと思います。

質問者⑤　なるほど、どうもありがとうございました。

一つだけ雑談というか話題を。ベルリンからスイスのザンクト・ガレンに学会で行ったのですが、そこで 30 秒ほど聞いても、何の話をしているのか全然わかりませんでした。ベルリンでのドイツ語は問題なかったのに、スイスのドイツ語が全くわかりませんでした。

小笠原　本当に難しいと思います。

質問者⑤　ええ。辛い思いをしたというのを思い出しました。

坂本（司会）　たぶんオーストリアはまだわかりやすいんですよね。スイスになると発音の問題とか、そもそも語彙の一部が違ったりしますので。

小笠原　スイス・ドイツ語はフランス語と同じ語も多い印象です。

坂本（司会）　ドイツの標準とはかなり違う変種ですからね。単語もリズムも違うので聞き取りにくいと思います。特に標準語で学んでいるからこそ、聞きにくいところがあるかもしれません。

小笠原　逆にスイスドイツ語を少しかじっておくと、フランス語とちょっと似ているのでいいかもしれませんよ。この間、私がフランスに行った時もフランス語っぽいドイツ語があるのですが、それを使うと通じることが多かったんです。ですから、あれこれかき集めて“なんちゃってフランス語”を試してみました。

坂本（司会）　韓国語でもそういった地域差は大きいのですか？

小笠原　単語ですか？ もちろん北とはずいぶん違いがあると言われていますね。語彙自体が違います。韓国語の検定試験には二つあり、韓国語能力試験の TOPIK は問題ないですが、ハングル検定は１級くらいになると北朝鮮で使われている表現もわからないといけないとの話も聞きます。ちょっと無理かなと感じます。

坂本（司会）あとお一人くらいご質問できそうですがいかがでしょう。どうぞお願いいたします。

質問者⑥　貴重なお話ありがとうございました。私は、英語を教えている者です。自分で言うのもあれですけれど、言語に対してオタク的な興味を持っています。授業の 1/3 くらいモノマネとか、いわゆる訛りなどで生徒を喜ばせたりしています。結構、生徒はそういうところに興味を示してくれます。

　中高生を対象とするとまずは文法をしっかり学ばせる必要もあるので、現場ではなかなか言葉の多様性などは、こちらが雑談として話してやらないと難しいと思っています。中高レベルで、早いうちから言語の多様性などに興味を持たせるために、何か提言をいただけますか。

小笠原　ありがとうございます。ある研究発表で耳にしたのですが、中高の生徒を対象に、１時間の授業の中で韓国語もフランス語も英語もドイツ語も一緒に学ばせるという複言語教育の試みを行い効果があったとのことです。例えば、数字の１から 10 までを一気に５言語くらい学ばせるのですが、

それでも十分に推測力を駆使しながら学べるそうです。そうすると、言語同士で「やはりラテン系は似ている」「こことここの変化は似ている」など、いろいろな気付きが生まれ、そういった気付きから「英語しか知らなかったけど、ドイツ語も近そうだからやってみようかな」などのモチベーションにつながったりするので、レクリエーション的に何かそういうものを導入してみるといいかもしれません。

私も実際、慶應義塾湘南藤沢校の高等部でも教えていますが、なかなかそこまで余裕はありません。ただ、プラスαの時間を使って、いろいろな言語を集めて、問題発見的に言語を同時に学ばせるようなことができれば、生徒達もきっと興味を持つのではないかなと思います。私自身はまだ実践したことはありませんが。

質問者⑥　どうもありがとうございます。興味を喚起させることが第一だと私も思っていましたので安心しました。

小笠原　あと、私が役立てていることとすれば、ドイツ語の発音が日本語になくても、韓国語には似ている発音があるよとか、そのようなことは韓国語履修者の人に伝えられます。教員側も複数の言語ができることが、ヨーロッパでは教員の資質にも求められてきています。もちろんその言語のレベルはいろいろで構いません。さわりだけ学んだことがあるとしても、「〇〇語はこうだからこうでしょ」のような話ができると思います。

そういえば、学生のほうから気付かされることもあります。この間驚いたのは、ドイツ語で「電話をかける」という表現についてです。「誰々に電話をかける」というと、日本語の感覚では間接目的語としてドイツ語では３格の目的語が必要と思い込みがちですが、「anrufen（アンルーフェン）」というドイツ語は直接目的語、つまり４格の目的語が必要になります。これをそのまま日本語で言ってみるならば「誰々『を』電話にかける」という意味合いで表現するようなイメージです。さて、その単語がでてきた時、中国人留学生が「あ、call と一緒ですね」と言ったのです。「電話をかける」は英語で「call」ですね。「I call you. と言うので、call と同じと考えればいいですね」と。日本語にするとややこしくなりますが、英語から来たらすんなり直接目的語をとるということがわかったりすることもあるのです。

坂本（司会）　教師も学生から教えられることがありますよね。ただ最近、直接目的語や間接目的語などの文法用語がなかなか中高で教えられなくなりつつあるのかなという気がしています。英語では直接目的語でも間接目的語でも形が変わらないのでいいのですが、ドイツ語の場合だと形が変わるので、実はその区別がとても大事なのです。文法用語とどこまでどう付き合っていくべきかというのも議論が分かれますが、ドイツ語を学んだことによって、目的語にも二種類あることに気付くことにつながれば、それで十分かなと思います。「説明はできないけれど…、なんだかわかる、なんだか使えている。」そういう状態になることがとても大事だと思います。あまりにも形式ばかりを重視した言語学習よりも、これから先の言語教育では、学習者が実際に少しでも使えるようになって、間違えていてもいいのでチャレンジできるようになることが大事ですね。学生のみなさんが、そういった経験を将来にどうつなげていけるのか、卒業後の人生をどう切り開いていくのか。そういった意味での新

しい言語教育を立教大学でも目指していけたらなと思い、今日は小笠原先生をお呼びした、という背景もありました。本当にとても貴重なお話を聞くことができました。ありがとうございました。

小笠原　ゲーテを読みたいという方には向かない話でしたね（笑）。

坂本（司会）　いえ、翻訳にもいろいろなジャンルがありますし、それで構いません（笑）。本日の講演会はこれで終了となります。片付けの間、もう少しいてくださるので、個別にご質問されたい方などいらっしゃいましたら、ぜひ、この機会に小笠原先生にご質問してください。本日は皆さまお集まりいただき大変ありがとうございました。

全学共通科目言語 B 連続企画

世界を知ろう！～フランス語講演会～

フランス語でつながる、フランス語で広がる

日時：2022 年 10 月 3 日（月）17 時 15 分～ 18 時 30 分
開催方法：Zoom によるオンラインと対面のミックス開催

講師：**鈴木 美登里**氏（株式会社白水社編集部）
略歴：京都大学文学部フランス語学フランス文学科卒業、同大学院文学研究科フランス語学フランス文学専修修士課程修了、ジュネーヴ大学大学院フランス文学科 DEA 取得。2003 年より現職（2016 ～ 2020 年月刊誌『ふらんす』編集長）。

司会：関 未玲（フランス語教育研究室主任／外国語教育研究センター准教授）

関（司会） 本日は秋学期がはじまって間もないなか、多くの皆さまにお集まりいただきまして、ありがとうございます。本企画は全カリフランス語の継続学習を目指す立教生、あるいは全然目指さないけれど興味を持っている、または今後もしかしたら興味を持つかもしれない立教生、もしかしたら講師の鈴木さんを目指してフランスの情報発信に今後ご尽力いただけるのではないかという立教生を主たる対象としております。

それでは本日の講師、鈴木美登里さんをご紹介いたします。鈴木さんは現在、老舗出版社の白水社にお勤めです。白水社は創業 107 年を誇り、フランス語とフランス語圏文化を扱う日本で唯一の総合月刊誌『ふらんす』を刊行されていますが、鈴木さんは 2016 ～ 2020 年まで『ふらんす』の編集長を務められました。『ふらんす』は創刊 97 年となっていますので、100 周年までカウントダウン間近となっております。鈴木さんは京都大学文学部フランス語学フランス文学科を卒業され、同大学院の文学研究科フランス語学フランス文学専修修士課程修了後に、ジュネーヴ大学大学院フランス文学科に留学され、DEA を取得されました。本日の講演テーマですが、フランス語習得の道、リアルタイムのフランス、語学習得とキャリア、出版社編集の仕事についてお話しいただきます。こちらの一方的な要望をすべて引き受けてくださった鈴木さんに感謝を申し上げるとともに、本日は立教生の皆さんだけに教えていただける情報も多数あると期待しております。それでは、鈴木さんどうぞよろしくお願いいたします。

フランコフォニー、フランス語の世界

鈴木 改めまして、白水社の鈴木美登里です。今日は講演というより、フランス語や、フランス語に関わるいろいろなことを皆さんとおしゃべりしたいなと思って来ました。堅苦しい話にはしないつもりですので、何かありましたらリアクションしつつ、どうか気楽にお聞きいただければと思います。

いきなりですが、フランス語話者は、世界に何人いるとされているでしょうか。

ちなみにフランスの人口は 7000 万人弱（6790 万人）で、日本の人口の半分くらいです。もちろんフランス語を話す土地は、フランス以外にもあるのですが、１億人、２億人、３億人、だいたいどれくらいだと思いますか。

鈴木 美登里氏

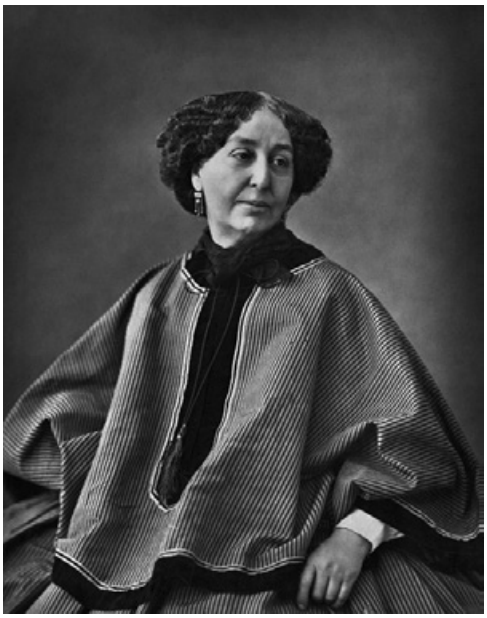
フランコフォニー国際機構（La Francophonie）が出している数字は２億 7400 万人です。フランス大使館などでもそのように答えると思いますが、３億人近い人が、フランス語を話します。ただし、母国語くらい話せる人に限定すると１億人ちょっとではないかといわれています。私のようにフランス語を学習して話す外国人も数に入れれば、優に３億人いきますので、数字を大きく言いたいときには、世界で３億の人たちが、何らかの形でフランス語を話せるといいます。ということは、フランス語を勉強したら、いきなり３億もの人とコミュニケーションを取れる可能性が得られるんですね。

「フランコフォン」（francophone）とは、「フランス語を話す人」という意味の形容詞です。「フランコ」（franco）は、「フランスの」という意味の接頭語で、「フォン」（phone）は「音」とか「声」という意味なので、それで「フランス語を話す人」という意味になります。

皆さん少しでもフランス語ができたら、「私はフランコフォンです」とぜひ言っていただきたいのですが、「フランコフォン」の名詞が「フランコフォニー」（la francophonie）です。「フランス語圏」と訳されることもありますが、例えば今ここにいる先生方も、フランス語圏にいることなくフランス語をお話しになっているわけで、広くフランス語を話す人の集合体とか共同体というような意味でこのフランコフォニーという言葉が使われます。今日はこの「フランコフォニー」という言葉を、「フランス語の世界」とざっくり訳したいと思います。フランス語でつながり、またフランス語で広がる世界のことを「フランコフォニー」と言うことを覚えて帰っていただければと思います。

写真①登山鉄道の駅はヨーロッパで最も標高が高い

ここで少し、これまでの私の経験についてお話ししたいのですが、皆さんと同じように大学でフランス語を学び始めてから、30 年が経ってしまいました。この 30 年を３つの時期に分けてお話ししたいと思います。まず「フランス語学習者時代」、つまり学生としてフランス語に接した約 10 年です。そのあと、白水社に入社して一般書編集部で一般書籍を作っていた時期が約 10 年あり、そのあと、同じ会社の同じフロア



写真②フランスの作家ジョルジュ・サンド（撮影ナダール）

写真③ドラクロワが描いたサンドとショパンの肖像

の、ほんの数メートルの移動だったんですが、語学書編集部に所属して10年が経ちます。そのように、フランス語とともに歩んできたこの30年を3つの時期に分けて、実際にどんなことをしてきたのかをお話しできればと思います。

フランス語学習者時代

まず「フランス語学習者時代」ですが、この写真（写真①）は、どこかわかりますか？のどかな風景ですが、どこの国だと思いますか？

ヨーロッパの、しかもフランス語圏ではないのですが、これはスイスです。アルプス山脈に囲まれたユングフラウヨッホという有名な観光地ですが、『アルプスの少女ハイジ』のような世界が広がるスイスに私はいました。先ほど関先生からご紹介があったように、京都大学に在籍していたのですが、学部生の時に1年間、ソルボンヌ（パリ大学）の文明講座を取っておりまして、それから大学院に進み、3年半ほどスイスのジュネーヴにいました。

大学時代に何をしていたかといいますと、ジョルジュ・サンド（写真②）という作家について勉強していました。ジョルジュ・サンドは、1804～1876年まで、72歳まで生きた女性作家です。なぜこの人に興味を持ったかというと、私はピアノを習っていたのですが、ショパンが大好きでした。ジョルジュ・サンドは「ショパンの愛人」という言われ方をしますが、大好きなショパンが数年間連れ添った女性がどんな人なんだろう、と興味を持って作品を読み始めたのがきっかけです。

この2つは（写真③）ドラクロワという19世紀の画家が描いた絵で、最初は1枚の絵だったそうですが、誰かによって分断されて2枚の絵となりました。そして、ショパンのほうはパリのルーヴル美術館に、サンドのほうはデンマークの美術館にと、二人は引き離されてしまいました。この絵はソルボンヌの文明講座の授業を取っていた学部4年生の時に、文学の先生が講義をするなかで見せてくれた絵でした。この憂いのある姿がとても印象的で、ますます興味を持って、ジョルジュ・サンドの本を読みました。

ジョルジュ・サンドは、「ジョルジュ」という男性の筆名で書いていたのですが、今から200年くらい前に生まれた人です。フランス語を勉強し始めて2年くらいたった時、まだたどたどしくフランス語を読んでいたのですが、何に驚いたかというと、200年前に書かれたものを、普通に読めて

しまうことに気付いたというか、びっくりしたのです。200 年前というと、日本だと江戸時代です。江戸時代に書かれた文章を、皆さん、パッと読んで、パッと理解できますか？　江戸時代の文章は古典なので、我々はすぐに読んで理解できませんが、フランス語は 17 世紀くらいから文章があまり変わっていないんです。語彙の意味などは多少違っても、文法はほとんど同じなので、たった 1 年とか 2 年フランス語を勉強しただけで、200 年前、あるいは 300 年前のものが読めてしまう。それで、「なんだ、日本語よりも簡単じゃないか」と錯覚したんですね。

写真④ヨーロッパの地図

写真⑤国連欧州本部のツアーガイドのスタッフたち（2001 年頃）

なぜ、留学先にジュネーヴを選んだかというと、当時読んでいたジョルジュ・サンドの旅行記が、ショパンと同じくピアニストで作曲家のリストと一緒にスイスを旅する旅行記だったこともあります。偉大なる音楽家と連れ立って、スイスを旅していくのですが、そこがどんなところか想像しました。また、京都大学にいた時に、たまたまジュネーヴ出身の留学生の女の子と非常に仲良くなったので、一度、旅行にも行っていて、その時訪れた町が本当に素敵でした。大学も日本に比べてとても重厚な雰囲気で、「こんなところで勉強したいな」と思い、大学院でスイスのジュネーヴに留学することを決めました。

スイスは、フランスの右隣（東側）にある小さな国で、地図（写真④）からもわかるように、フランスにちょっと突き刺すように接しています。象の鼻のような形の部分が少し突き出ているのですが、その先がジュネーヴです。三方がフランスに接していて、そこに住む人はフランス語を話します。スイスにはスイス語というのはなくて、だいたい 6 割の人がドイツ語を話します。3 割がフランス語、

残りの１割がイタリア語、あと少しだけロマンシュ語が使われる地域があります。こうした４つの公用語がある、ちょっと複雑な土地です。

もちろん大学院で勉強もしていたのですが、「せっかくだから少し働いてみたいな」と思って、国際連合の欧州本部という、もともと国際連盟の本部だったところで国連の歴史や建物を案内するガイドのアルバイトをしていました。写真の真ん中から２番目くらいにいるのが私です（写真⑤）。国連の欧州本部であるジュネーヴ事務局では、開発問題、人権問題、安全保障などについて、日々、国連の様々な国際会議が開かれています。軍縮会議も開かれていたり、また国連難民高等弁務官事務所もすぐ向かいにあったので、今だったらウクライナのことにもなると思いますが、難民問題などについても話し合われていました。ILO（国際労働機関）や WHO（世界保健機関）もジュネーヴに本部があるので、そうした国際機関の会議も行われていました。

一方、永世中立国のスイスで、戦中の終戦工作がどのように行われていたのか記載された外交文書などを探す、通信社のアルバイトもしていました。こうして半分仕事、半分研究のようなことを３年ほど続けました。研究に半ば挫折したというところも多分にあったと思うのですが、社会にも興味があったので、DEA という大学院の課程を終えて帰国し、一旦就職しました。それが 2003 年になります。

白水社一般書編集部時代

フィリップ・フォレストという作家の『さりながら』という不思議なタイトルの本に出会って、これはフランス人の友達から「読むべきだ」と勧められて読んでみたのですね。すごくいい本だったのですが、これは訳せないなと最初は思いました。哲学的だけれども詩的で、日本語にうまくおさまらないのではないかと思ったのです。

その後、『さりながら』の原書の書評を見つけて、それが立教大学で教えている澤田直先生の書評でした。澤田先生は、サルトルなどの哲学を専門にしていらっしゃるのですが、詩の翻訳もされている方で、この澤田先生との出会いで、この本が日本語に訳されることになりました。

『さりながら』は、小林一茶とか夏目漱石とか、あと長崎の原爆の様子を写真に撮った山端庸介という知られざる写真家について書かれた、エッセイのような、小説のような、不思議な本です。澤田先生はこの本で日仏翻訳文学賞も受賞され

写真⑥フィリップ・フォレスト『さりながら』

写真⑦荒木経惟氏の写真展会場にて

て、楽しくうれしい記憶のある本です（写真⑥）。皆さん、よかったらウェブサイトで澤田先生が『さりながら』についてお話しされている YouTube 動画をご覧になってください。

そのフォレストが次に書いたのが、日本の写真家荒木経惟さん（写真⑦）についての本です。私はフランス人作家によってまたもや日本人表現者の素晴らしさ、その魅力を教えられました。

白水社語学書編集部時代

その後 10 年間は語学書編集部に所属し、『ふらんす』（写真⑨）というフランス語とフランス語圏の文化情報を扱う語学雑誌を作ったりしています。

澤田先生と、最近お亡くなりになりましたが、ジャン＝リュック・ナンシーという哲学者のお二人の対談（写真⑧）を『ふらんす』に掲載したこともありました。今は編集長も変わり、内容も随分変わっていますが、何かしら、学ぶところの多い雑誌ではないかなと思います。この雑誌から誕生した本として『フランス語っぽい日々』（写真⑩）もあります。子育て漫画を描くじゃんぽ～る西さんという漫画家と、テレビにもよく出ているフランスのジャーナリストのカリン西村さんという日本在住のご夫婦によるエッセイ漫画です。

写真⑧来日したジャン＝リュック・ナンシーと澤田直氏

そして現在はフランス語の教科書を作っていて、まさに今、ここにいらっしゃる皆さんに寄り添うような仕事をしています。フランス語は難しい点もたくさんありますが、どうやったら皆さんがフランス語を嫌いにならないかなとか、難しいことも好きになったら我慢できるので、まずは好きになってもらうためにどうしたら楽しく勉強できるかな、といったことを考えながら、あるフランス人の漫画家と、日本人の著者の方と一緒に作っています。そのフランス人の漫画家は、日本語はできないので、フランス語でやり取りしながら、「どんなスキットが面白

写真⑨雑誌『ふらんす』2017 月 4 月号、表紙画はレオナール・フジタこと藤田嗣治

写真⑩『フランス語っぽい日々』

写真⑪フランス語教科書『クワ・ドゥ・ヌフ？』の目次。「SNS は何を使っていますか？」など、10 の問いが各課のタイトルに

いかな」とか、「どんなフレーズが言えるようになると楽しいかな」ということを考えながら作っています。今作っている教科書は来年の春に出版されるものです。

また『Quoi de neuf ?』（「最近どう？」の意）という映像付フランス語中級教科書も作っています。取り扱っている話題は、18 ～ 24 歳のフランスの若者がどんなことを考えているのかについてです。恋愛についてどう考えているのか、どこで出会っているのか、SNS は何を使っているのか、など。SNS に関してはあらゆるアプリを使っている人もいれば、TikTok、Instagram ばかりという人もいますね。一つのテーマにつき、5 ～ 6 人ずつインタビューして、皆さんと同世代のフランス人がどんなことを考えて、日々、どんなことを思っているかを扱っています。これも YouTube 動画があるので、機会があったら見てほしいと思います。動画を見ながら、全部わからなくていいので、「あ、今 TikTok って言った」などとまずは部分的に聞き取って背景を理解していくような教科書になります。フランスの若者のお財布事情、彼らは 1 カ月どれくらいの予算で生活しているのかとか、パートナーに求める最も大事なものは何かとか、理想の仕事は何かなど、10 の質問を投げかけて、それについて学習者も一緒に考えていくような教科書です（写真⑪）。

今ご紹介したように、もともとは翻訳書などを作っていたのですが、今はフランス語を使いながら、フランス語を学習する人たちが、どうやったら楽しく長くフランス語に接して、新しい観点を得てもらえるかを、日々考えています。ここまでが私の発表、おしゃべりになります。ご清聴ありがとうご

ざいました。

クロストーク

関（司会） 素晴らしいお話をありがとうございました。鈴木さんとは何回かお仕事をさせていただいていますが、ジョルジュ・サンドを研究されていたとか、ショパンが好きだったという話を初めて聞きました。また、留学しても、鈴木さんほど興味深いアルバイトができる人は少ないと思います。外国人としてフランスに行って、フランス語もうまくないわけですから。私など、語学を活かしたアルバイトが探せなくて、ベビーシッターをやっていたこともあります。それと比べると、国連でアルバイトをされていたというのは学生の皆さんも気になるところかと思います。

皆さんからも質問がたくさんあるかと思いますが、その前に、私からいくつか質問をさせていただきたいと思います。まず初めの質問ですが、フランス語に興味を持ったのは、今日のお話を聞くと、ショパンかなと思うのですが、ここまで突き詰めようと思ったきっかけがあれば教えてください。

鈴木 がっかりされるかもしれませんが、動機は非常に不純で、もともと京都の大学を選んだのは、大好きなアメリカの映画俳優がいて、その人に同行している通訳、おそらく戸田奈津子さんだったと思いますが、それを見て、「いいな、語学ができたら俳優に会える」と思ったことがきっかけです。最初は、英語が好きだったので英語を勉強しようと思っていました。日本を訪れた映画俳優たちは、東京では仕事をしなければならないけれど、彼らがプライベートで好んで訪れる京都なら、アテンドできるのではないかと思いまして。あとは、ボーイフレンドが関西にある大学を志望していたことがあって、なんとなく京都がいいかなと。日本や京都の歴史をちょっと勉強して京都の街をアテンドしようかなと思って京都に行きました。

京都大学では、フランス語は第二外国語として選んだのですが、初日の授業をした先生がすごく素敵だったのです。多賀茂先生とおっしゃって、退官されてしまったのですが、その先生がとても素敵で、他の先生も、皆さん個性的でした。作家の山田稔先生もいらっしゃいました。亡くなったプルースト研究者の吉田城先生もいらっしゃって、大学に白の麻のスーツで来るような方でした。パリや美術の話をされるのですが、とてもスマートで、初めて知る世界でした。

どうやらフランス語の先生たちは素敵でおもしろいぞと思って、フランス語の勉強を始めた感じです。それ以外の勉強はあまりしていなかったですね。ラクロス部や合奏団に入っていて、クラブ活動ばかりやっていました。ほかにできることがなくて、唯一残ったのが、フランス語だったという感じです。本当に落ちこぼれで始めたフランス語、フランス文学科の日々でした。

関（司会） ありがとうございます。「京都いいかも」というだけで、なかなか京都大学には入れないと思いますが、そこが鈴木さんのすごいところです。通訳者に憧れて京都を目指したということですね。

鈴木 好きな俳優がお忍びで来ていたら会えるかも、というミーハーな感じですね。

関（司会）　それでフランス文学科に入ったら素敵な先生がいたという。私も立教大学に入った時に、小倉和子先生という素敵な先生や、哲学者の宇野邦一先生という本当に風格のある方で、フランスがそのまま教室に入ってきたというような印象の先生がいらっしゃいました。１年生の歓迎会の時に、宇野先生がアカペラでイブ・モンタンの「枯葉」を歌い始めて、その声量とフランス語に魅了されて。何かやはりちょっと、仏文の先生は、他の学科の先生と違っていたのですね。

鈴木　私の場合、他の学科の先生を知らなかったというのが本当のところですが、出会った先生方が皆さん紳士的でした。その当時は、女性の先生がほとんどいなくて男性の先生ばかりだったのですが。あと、大学の目の前に関西日仏学館（現アンスティチュ・フランセ関西）があり、そこが本当に小さなフランスのようで。フランス人がたくさんいてフランス語が飛び交っていて、語学学校でもあるのですが、フランス料理のレストランもあって、そのお店で藤田嗣治の絵が見られるのです。その空間があまりに素敵だったので、１年生の時にアルバイトもしていました。フランスやフランス語への漠然とした憧れがあり、何かわからないけれど、ちょっと素敵な、面白いものがその先にあるのではないか、と思わせてくれるような雰囲気を感じていたのだと思います。

関（司会）　おそらくここにいる多くの方が、フランスに対する憧れがあるのではないかと思います。

鈴木　食べ物がおいしいというのも最大の魅力です。

関（司会）　そうしたものすべて、ということですね。とくに京大の近くにある関西日仏学館、今のアンスティチュ・フランセ関西には、もしお近くに行くチャンスがあれば、寄ってみていただければと思います。また藤田嗣治との縁はそこからということですね。

鈴木　そうですね。藤田嗣治（レオナール・フジタ）の絵は２年間、『ふらんす』の表紙に使わせてもらいました（写真⑨）。わたしは愛知県出身ですが、入学試験の日、母も付き添ってくれたんですね。大学の前の関西日仏学館にあったカフェ「ル・フジタ」（現在、閉店）とまさに藤田の名前のついたカフェがあって、試験が終わったら母とそこで待ち合わせをしてお茶をしました。店内にはすごく大きな絵があって、「ノルマンディーの春」という作品で、今もアンスティチュに飾られていると思いますが、当時の館長が、その絵を見せるためにそのカフェを開いたということでした。

関（司会）　素敵な逸話ですね。京都のアンスティチュの雰囲気は本当に素晴らしいので、行ってみていただければと思います。

　では次の質問です。これから留学する皆さんも多いと思いますが、留学してみて、何かこれをやっておいたほうがよかったなと、後悔したことはありますか？

鈴木　たくさんあります。最初に留学したのは、学部３年生の時です。フランスのモンペリエと、グルノーブルに１カ月ずつ、サマースクールに行ったんですね。モンペリエに行った時は本当に何も

当日の会場の雰囲気

わからず、フランス語で何も言えませんでした。文法は、多少は大学で勉強していったので筆記テストはできるのですが、聞き取りが一切できなかったんです。それで、先生にお願いしてクラスのレベルを下げてもらいました。最初は、下の方のクラスに行くのは嫌だなと思ったのですが、泣きたくなるほど（実際に泣いたのですが）、フランス語が聞き取れなくて。しかも私のほかに、日本人が一人もいなかった。周りにこんなにたくさん人がいるのに、ここで、私が「痛い」とか「つらい」と言っても誰にも伝わらないんだなと思ったら、本当に悲しくなりました。しかもモンペリエは南の土地で陽気で、さらにはヴァカンスシーズンなので周囲の人は皆、すごく楽しそうにしているなかで、疎外感を覚えました。

クラスのレベルを下げてもらってから、もう少しフランス語の聞き取りの練習をしておけばよかったと思いました。読むこと、書くことも大事ですが、初歩的なことについてもっと耳を慣らしておけばよかったなというのが反省点です。

あとは日本について、人口や土地の広さなど、数字をもっと学んでおくべきだったということも反省点です。外国に行くと「君の国はどのくらいの広さ？」とか、「どこからどこまでは何キロ？」などと、よく聞かれるんです。ヨーロッパの人は、隣国の人口などもよく知っていて、比較することに慣れています。違う国の人同士が出会うと、話のネタはまずそういうところからになると思います。留学するまでは外国人と話すこと自体があまりなかったので、自分の国についての基本的な情報が本当になくて、数字は大事だなと思いました。

関（司会） なるほど。数字を聞き取れるようにしておくのも大事ですね。フランス語で数字を聞き取るのは非常に難しいと言われますので。また海外に行けば、日本について基礎知識を聞かれるので、それを頭に入れておくべきだと。日本を背負って行ったわけではないけれど、「君はどこから来たの？じゃあ日本はどういう国なの？面積はどのくらいなの？人口はどれくらいなの？」ということをよく聞かれたということですね。

鈴木 それまでは、そうしたことを聞かれ慣れていなかった。他国の人が自分の国にどういう関心を持つか、自分の生まれた地域でもいいですが、土地や文化について、客観的に知って相手に伝えるという訓練が全くできていませんでした。語学以前の準備が足りていなかったなと思います。

関（司会） 先ほどリスニングができなかったという話がありましたが、今は YouTube でフランス語のヒアリングができるコンテンツが増えてきたので、今の学生の皆さんは、恵まれていると思います。また、私たちの世代よりも、コミュニケーションに関して能力が高いと思います。その部分には自信を持っていただいていいのではないでしょうか。あとは留学に行く前に、日本についての基本情報をきちんと持っていけるようにしておくということですね。

鈴木 海外では自慢話が大事です。例えばサッカーが好きだったら、「自分の国のサッカーをちょっと語れるよ」「君の国のこんな選手を知っているよ」とか、音楽好きなら、何か楽器が弾けることでもいいのですが、人を「わっ！」と言わせるような特技があるといいと思います。日本人は謙虚なので、自慢話が苦手だと思うのですが、「これを自慢してやろう」というネタをいくつか持っていくと、現地の人に喜ばれます。

関（司会） 日本だとどうしても控えめになってしまいますが、海外に行ったら、周りに喜んでもらうために披露する、という意識が大事なのですね。

鈴木 「こんなにおいしいものがあるんだけれど、作り方教えてあげるよ」みたいな。

関（司会） 自分でプレゼンテーションしていくことが重要なのですね。
　留学には行きたいけれど、お金がかかるから行けない、という人もいます。具体的には考えていないけれど「留学、うらやましいな」と思っている人もいると思います。やはり留学は行ったほうがいいですか？　究極の質問かもしれませんが。

鈴木 私は行ってよかったと思っています。留学に行っていなかったら今の自分はありません。今はワーキングホリデーもあります。私の時代にはそういうものはなかったのですが、留学するために、いろいろな方法が増えてきている気がします。旅行でもいいと思います。何もわからないとか、何もできないとか、自分の無力さを感じられる土地に身を置いて、サバイバルできるようになることは、人間的に鍛えられます。

社会に出ると、勝手のわからないことばかりだと思うんですね。例えば結婚して他人と暮らすということもそうですが、本当に勝手のわからないことばかりがこの先たくさん控えています。そうしたことを乗り越えていくサバイバル能力というか、タフネスを身に付けられるのが留学なのかなと思います。仕事で途上国に行って、開発に取り組むなどすると、さらにもっと鍛えられるかもしれないとは思います。

関（司会） 目から鱗です。国連でアルバイトの経験ができたから留学してよかった、などという答えかと思ったらそうではないのですね。自分の無力さを知るために、留学がいいという。確かにその通りだなと思いました。日本だと、友達もいるし、あれもできる、これもできるで、そんなに無力感を感じませんよね。

鈴木 そうですね。というか、「できないことがあるのが当たり前」と思ったほうがラクに生きられるのではないでしょうか。一人でできることはたかが知れていると思うので、小さな世界で得意になっているよりは、自分の無力さを認めて、「すごいな」と思う人にたくさん出会うことのほうが豊かなことなのではないかなと思います。

関（司会） ありがとうございます。あるがままの自分をきちんと受け入れるということは、なかなか日本ではできませんが、それが海外では試すことができるということですね。

鈴木 そうですね、海外では言葉ができないと、ほとんど子ども扱いですので。

関（司会） 赤ちゃんみたいに扱われることもありますからね。

鈴木 もう成人しているのに、こんなに子ども扱いされるのか、と悔しい思いもするものです。よく言われることですが、例えばお店に行ったときに、買い物をしたいのに軽くあしらわれてしまうときには、本当に悲しくなると思います。現地の言葉で、少し喧嘩ができると、うれしいものです。なめられたなと思ったときに、ちゃんと言葉で言い返すことができるといいですよね。

関（司会） 喧嘩に強くなるというのは、どのくらい語学力が伸びたのか、ひとつの秤になるということですね。

鈴木 大学の先輩で、すごく聡明で大学の先生になった人がいますが、その人は、「罵倒リスト」を作っていました。ばかにされたり、罵られたりしたときに言い返すために使う言葉のリストです。日本ではそうしたものが必要ないくらい、優しくて温かい人ばかりなので、私たち日本人は喧嘩が弱いという面もあると思います。でも海外では、強くないと、やられてしまいます。海外の生活は、自分を守る力を鍛える機会にもなるかなと思います。

関（司会）「罵倒リスト」はないに越したことはないですが、それが必要な状況もときにあるということですよね。私もフランスに留学していた時には、いくつか言い返す言葉を覚えましたね。嫌な思いをしたことがあります。今度、その相手に会ったら、言ってやろうという言葉を用意して、毎日30回、40回と練習していました。見知らぬ人でしたが、きっと近所だから、いつか会うだろうと思って。すると日本へ帰る5日くらい前になって、その人に会うことができました。そしてそれをちゃんと伝えることができて、爽快な気持ちになり、フランスを嫌いにならないで日本に帰ってこられたという経験があります。ですから今のお話は、私の胸にぐさっと刺さりました。

「罵倒リスト」というのも刺激的な話ですが、私たちの物差しではなく、鈴木さんの物差しで、一番刺激的だったことはなんですか？

鈴木　最初にびっくりしたのは、日本も年々増えているのかもしれないですが、人種による棲み分けがはっきりしていたことです。こういう仕事は、こういう国の出身の人がやっているというような、目に見えて肌の色で仕事が決められていることに、最初は大きな衝撃を受けました。

フランスもそうでしたが、スイスでも同じです。ヨーロッパの中でも、出身地が西か東で、扱われ方に違いが出てきます。日本人は、黄色い顔をしたヨーロッパ人みたいな言われ方をするので、アジア人の中では比較的大事に扱われますが、それは、お金を落とすいいお客さんということだと思います。

世界はこんなに不平等で、いろいろな層に分けられているのだ、とショックを受けました。最初は、日本にはそうした差別はないと思っていたのですが、それは知らないだけで、多かれ少なかれ、日本にだって差別意識はあります。

同じクラスにアジアの子が結構いたのですが、「Fête nationale」（国の記念日）について話しましょう、という授業があったんですね。国の祝日は、建国記念日であることが多いと思います。アメリカなら独立記念日の7月4日、フランスなら革命記念日の7月14日が一番大事な日です。では、「日本は？」と考えたとき、それがないんです。どこの大使館も、自国のナショナルホリデーには、いろいろな人を招いて祝います。フランス大使館なら7月14日に広尾にある大使館にいろいろな人を招いて大きなお祭りをします。でも日本にはそれがないので、海外の日本大使館は、天皇誕生日を祝うらしいです。それが一番ニュートラルというか、日本にとって一番大事な日ということになっているらしいです。その話をしていたときに、インドネシアや韓国の子がいて、「私たちのナショナルホリデーは8月15日（韓国）と17日（インドネシア）だ」と言われ、自分の無知に気付きました。8月15日は、私たち日本人にとっては終戦記念日であり敗戦記念日ですが、彼らにとって8月15日は、日本による植民地政策が終わったことによる独立記念日であることを、それまで思い至りませんでした。日本にも暗い歴史がたくさんあるし、自分の中にも差別や無知があることに、留学して気付くことができたのは、よかったと思います。

関（司会）　ありがとうございます。フランスにも差別の問題や負の歴史があり、その一方で、「フランコフォニー」といって、例えば旧植民地の国々でフランス語が話されていて、そこで連帯が生まれていることもある。現地に行ってみると、現実が見えてくる瞬間があります。思い描くのと、実際に

行くのとでは、全く違います。日本国内で何も知らずに生きてきた自分をそこで受け入れざるを得ないことがあるのは、留学ならではだと思いました。ここで話せる範囲で、留学先での失敗談もお願いできますか？

鈴木　失敗した経験は、山のようにあります。私はうっかり者なので、最初にパリに行った時、現金をあまり持ち込めなくてトラベラーズチェックというのがあったのですが、そのトラベラーズチェックにも持ち込める制限額がありました。１年ほどの留学費用の基本になる数十万円かをトラベラーズチェックで持って行ったんですね。カードも使えるので、全額ではなく。

フランスに着いてすぐに、パリのガイド本で何か調べようとジュンク堂に行きました。そこに行ったあとに、口座を開きたいと思って銀行に行ったんです。すぐに口座は開けなかったのですが、銀行で並んでいた時に、ふと考えたら、トラベラーズチェックやお財布、パスポートも何もかも持っていないことに気付きました。到着して１日目か２日目だったのですが、「ああ、私の留学生活も終わった」と思って。どこに落としたのかはすぐにはわからなかったのですが、もしかしたらジュンク堂かなと思って戻ってみました。「このくらいの大きさのケースに、いろいろと入れていたのですが、見ませんでしたか？」と聞いたら、「え？」と言われて。ジュンク堂を立ち去ってから 30 分後くらいだったのですが、自分が見ていた本棚のところを確かめてみると、それがそのまま置いてありました。その時は戻ってきたのでよかったのですが、そうして置き忘れてしまった物は、たくさんあります。

あと、TGV に乗ったあとに扉が閉まって、ふっと見たら、その扉の向こう側に自分のカバンが落ちていたこともありました。乗ったのはグルノーブルという駅だったと思うのですが、グルノーブルからリヨンまで、１時間は停まらないのです。どうしようかなと思ったのですが、途端にフランス語が出て、「誰か助けてください、私のカバンがあそこにあります」と言ったら、同じ車両に乗っていた人が緊急ボタンを押してくれたため、発車しないで、車掌さんがカバンを拾って届けてくれました。車掌さんが着くまでの間にも、誰かが持っていってしまうのではないかと思ってハラハラしましたが、そうしたことは、他の人の何倍も経験していると思います。

関（司会）　TGV といえば、日本で言えば新幹線ですから、新幹線を止めるというレベルですので結構大事ですよね。でも、カバンが戻ってよかったですよね。

鈴木　その時に言葉がしゃべれてよかったと思いました。「私のカバンがそこにある」と言うだけなので、大した言葉ではありませんが。

関（司会）　留学のお話も、まだまだお聞きしたいところですが、学生の皆さんは、鈴木さんはフランス語を活かして、出版社で編集者として活躍されていて、「わぁ、すごいな」と思っているかと。憧れの職業ですよね。フランス留学からそこに至ったお話をお聞かせいただけますか？

鈴木　そうですね。とりあえず、DEA という日本でいう修士課程が終わり、博士論文を書こうと思いましたが、別にすぐに書かなくても、数年後でもいいわけです。その時、私はもう 29 歳でした。

クロストークの様子

先ほども通信社でアルバイトをした話をしましたが、国際赤十字やスイスの外務省やスイス銀行など、いろいろなところの公文書、アーカイブを漁って、どういう終戦工作がされていたかを調べるアルバイトをしていたんです。なぜそれが可能だったかというと、たまたまですが、戦時中のスイスの外務大臣がフランス語圏の人で、しかも日本のスイス大使もフランス語圏の人で。もともとフランス語は外交言語としてかなり使われていたのですが、国際赤十字も英語とフランス語が公用語で、一部の文書を除いて、ほとんどのものがフランス語で書かれていたんですね。しかし、歴史家はあまりそこに触れていませんでした。しかも、スイスにいる人やヨーロッパにいる人は、日本にあまり興味がないわけです。彼らの関心はナチスドイツにあるので、ナチスドイツとの関係は探っているのですが、同じ枢軸国だった日本のことは、あまり探っていませんでした。それで、通信社の記者の人が、スイスに存在するフランス語による資料は手つかずで面白いのではないかと考えて、たまたまスイスにいた私に「アルバイトをしてみない？」と声がかかったのです。

そのときその記者の方から「もし就職をしたいと思うなら、30 歳を越えると難しい。日本の社会は待ってくれない」と言われ、「これが最後のチャンスだ」と思い、一度どこかに就職しようと思いました。もし嫌になって辞めても、ジュネーヴなり京大なりに戻って、また勉強もできるだろうと。京大の博士課程に在籍していたので、戻ってまた勉強はできる状態でした。

そこでとりあえず日本に帰って就職活動をしてみようと思ったのです。すると大学の先生が「白水社が何年かぶりに募集出しているみたいだよ」と教えてくれて。受けた出版社はここだけです。ほかはあまり考えていなかったのですが、全く畑違いのエルメスというブランドも募集していたので、書類は送りました。素敵なブランドですが、あまりに高級なので自分にとっては身近でもなんでもなく、興味もあまりなかったのですが、銀座のエルメスのビルは、レンゾ・ピアノという建築家の設計によるもので、すごく素敵です。またミーハーな話になりますが、毎日あのビルで働けたらとても気持ちがいいのではないかと思って、たまたま「フランス語と英語と日本語ができる人」と募集があったので応募したのですが、書類選考で見事に落ちました。

関（司会） 白水社とご縁があったということですね。さらに、根掘り葉掘りお聞きしたいところなのですが、質疑応答の時間がなくなってしまいそうです。申し訳ありませんが、学生の皆さんからの質疑応答に移りたいと思います。

質疑応答

質問者①　講義を、ありがとうございました。今まで本を読んだり、いろいろなフランス人と会話したりしてきたと思うのですが、一番いけている、しゃれているフランス語のことわざというか、言い回しはありますか。

鈴木　パッと浮かばないのですが、フランス人の著名人と会ったりインタビューしたりする機会も多かったのですが、一番印象的だったのは、映画監督のゴダールの２番目の奥さんで、アンヌ・ヴィアゼムスキーという作家で、彼女の言葉の使い方は印象的でした。ゴダールは、この前 91 歳で亡くなりました。アンヌ・ヴィアゼムスキーは、『中国女』など彼の映画に出ていて、しかも、彼女のおじいさんはノーベル賞作家のフランソワ・モーリアックです。女優から、彼女も作家になるのですが、彼女の自伝的な作品『少女』を刊行することになり、その刊行記念で来日したとき、３～４日くらいアテンドをして、ずっと一緒に過ごしました。あまり社交的な人ではなかったので、観光もしたくないと言っていて、取材以外はひたすら散歩をしたり話をしたり、一緒に映画を見たりしていました。それこそ彼女が出た映画を東京日仏学院で上映していたので、それを見ていました。

まったく飾らない率直な人で、ゴダールのちょっと難しい、「ジガ・ヴェルトフ集団」名義の政治的な映画が何本かあるのですが、それを彼女が「面白くない」と言って。少しいたずらっぽく言っていたその率直さにもすごく感動しました。あと、『時計じかけのオレンジ』という映画の話が多かったのですが、それを「J'ai été terrifiée」って言っていたかな。とにかく本当に怖くて、英語でいうと「terrified」ですよね。驚愕した、戦慄が走ったということですが、まさにトラウマになったのだ、と。とにかく言葉が率直で、少女のように短く簡単な言葉を使う人でした。これまで出会えて一番幸せを感じた人です。

質問者②　フランス生活をされた中で、最もカルチャーショックを受けたこと、日本との文化の違いで一番びっくりしたことはなんですか？

鈴木　留学していた当時は、毎日びっくりしていたと思うのですが、だんだんしぶとくなってきて、少々のことではあまりびっくりしなくなってきます。最初にびっくりしたことは、一時、寮に住んでいて、同じフロアにアフリカのギニアから来た学生がいました。その人の部屋で、料理を作ったんです。日本だったら、食事どきに誰かを訪ねることはあまりないですよね。その時間を、あえて避けると思うんです。「今、ごはんを食べているかな？」と思ったら、なるべく食べ終わった時間に行く。でも夕食どきの７時くらいに、友達がコンコンと訪ねてきて、夕食を二人分しか用意していなかったので、訪ねてきた友人に「今、ごはん作っているから」と伝えたら帰ってくれるかなと思ったら、帰ってくれないのですね。「多分、これは一緒に食べようとしているんだな」と思いました。その時にギニアの友人に、「夕食どきに訪ねてくるなんて、友達でも失礼なのではないのかな？」と聞いたのです。食事どきで準備していると言えば、「ああ、ごめん、じゃあまたあとで」と普通ならなるのではないかと。同じ寮の中にいるのだから、いったん自分の部屋に帰って、またあとで来ればいいですよね。

そうしたらそのギニアの友人は、「ミドリ、今度ごはんを作るときは煮込み料理にして」と言いました。つまり、煮込み料理なら分け合えるから。アフリカの人たちは分け合う文化があるので「僕たちは煮込み料理を作る」と言うのです。「分け合えないものを作った君が悪い」と言われました。「ああ、なるほど」と思いました。そうやってこの人たちは、「これはあなたのもの」としないで、なんとなく「みんなのもの」があって、それを分け合って暮らしていることを知り、少し考え方が変わりました。もし友達に対していつでもウエルカムでいたいなら、食事は数のないもの、あるいはひとり６個とか７個とか、小さくたくさんのものにするべきと知って、ショックでもあり、学びでもありました。

関（司会） いいお話ですね。煮込みなら何人いても分け合えますね。

鈴木 ちょっとずつ我慢してでも分け合えるという知恵ですね。

関（司会） なるほど。皆さん、今度から煮込み料理を用意して、フランスの寮で過ごしてください。

鈴木 それでギニアの友達に教えてもらった料理があります。鶏肉とピーナッツオイルとピーナッツバターとトマトで作る料理で、とてもおいしかったです。留学中はよく作っていました。

関（司会） 思い出の料理ですね。驚いたことといえば、私もフランスにいた時に友達から「来月の家賃の支払いができないのでお金を貸してくれ」と言われたことがありました。７、８万円でしたが、友達に貸してくれとは日本ではあまり言わないですよね。でも「それがないと支払いができない。来月返せるから」と言われて。すごく悩んだときにイタリア人の友達に相談したのです。そうしたら、「イタリアだったら貸すよ。お金がある人が貸すのは、普通でしょ」と言われました。でも返ってこないかもしれないですよね。その子は「なぜ返ってこないからって、貸さないの？」と。イタリアの彼女が住んでいた地域だと、「お金があるんだから渡す、戻ってこなくてもしょうがない」という形で貸すということでした。皆さんにそうしてくださいといっているのではなく、価値観というのは大きく違うのだなと思いました。その話を聞いたあと、私はお金を貸すことを決めて、そのお金は、ちゃんと戻ってきたのです。

鈴木 私の場合、貸したお金は戻ってこなかったので、自分で働いてその分を取り戻しました。でも、お金は天下の回りものなので……。その時お金を貸した友人は、国に残った家族に仕送りをしないといけないような国の人だったのです。留学する時に、親族みんなが留学費用のためにお金を渡すんです。旧植民地から来ていた人でした。奨学金も滅多に出ないし、旅費を出してくれるような豊かな人もいないので、どうするかというと、親戚中からお金を集めるわけです。でもそれは無償ではない。つまり投資です。親戚の中から誰かひとりがヨーロッパに行くことで、働いて、為替の差益をのちのち得ようという。みんなそれで待っているわけです。

私は親に泣きつくこともできないわけではないし、奨学金ももらっていたので、「世界平和のため」ではないですが、そのときは甘くて「貸せない」と言えなくて、奨学金の３分の１くらいを貸しまし

た。貸したうちの３分の１は返ってきて、あとは結局返ってこなかったですね。返さなくてはならないという感じもなく、返せる時に返せばいいし、返せないなら、返しようがないという文化なのかもしれません。

質問者③　ジョルジュ・サンドについて研究されていたとおっしゃっていたかと思いますが、京都大学の大学院では、どういう研究をされていたのですか？

鈴木　大学院でも引き続きジョルジュ・サンドを研究していたのですが、彼女のすごく長い自伝などを研究していました。自伝といっても、49 歳か 50 歳くらいで書きはじめているので、ちょっと早いのではないかなと思うのですが、1000 ページ以上あります。しかも、先祖の話を延々と書いていて、自分についての話がなかなか出てこないのです。つまり自分が何者かということは、自分ではなくお父さんお母さん、あるいはおじいちゃんおばあちゃん、さらにもっと遡ったところから話さないとならないということで、前置きが長く、なかなか本人が生まれない。

大学院の時期は、フェミニズムについても、いろいろと考えていました。例えば、フランス語で「私は日本人です」と言おうと思ったら「Je suis japonaise.」です。「Je suis japonais.」ではなくて。フランス語で「私」と語るときには、そこに「性」を語らないとならない。中性的には、しゃべれないのです。そういう言語を用いながら、ジョルジュ・サンドは、「ジョルジュ」という男性の名前を使って最初は男性形で書いていたのですが、その自伝は、はじめて全編女性として書いたものでした。ですからずっと、ジョルジュ・サンドのフィクション以外の自伝的作品を扱っていました。旅行記などによっても、どうやって彼女が女性の「je」（私）を獲得していくのか、その揺らぎをずっと追っていたのです。女性は「私」といいながら、本当に自己を語ることはできるのか、という少し小難しいことを考えていました。

関（司会）　自伝の中に、心の揺らぎが見えてくるわけですね。

鈴木　旅行記でも、男性形で書かれてある部分と、女性形で書かれてある部分とがあります。基本的に自分は神学生（男性）という設定で、フィクションのような私小説のような形で旅行記を書いています。でも途中で、女性形で離婚のことを書いている。彼女が生まれたのは 1804 年で、ナポレオンの第一帝政の始まる時で、ナポレオン法典によって離婚が許されなくなりました。女性は財産を持てず、結婚したら全部旦那さんの財産になってしまうんですね。ジョルジュ・サンドは若くして結婚をするのですが、そうしたわけで、離婚したくてもできなくて。それでもなんとか自立を目指して、新聞などで記事や小説を書いて、子どもを育てていました。200 年前からそんなことをしていた人です。

旅行記のなかに別居の裁判のことを書いている部分もあり、そこは女性として書かないとおかしくなってしまうので、そこは女性として書いているのです。どういう思いで、「je」（私）を男性形で書いたり、女性形で書いたりしているのかなというのを追体験したいと思っていました。私も自分自身の生活のなかで、ジェンダーについて引っかかるところ、何かしっくりこないというか、居心地の悪

さを抱えていたので、そうした自分の姿を彼女に投影していたのではないかと、今になって思います。

関（司会） ありがとうございます。では最後の質問になります。

質問者④ 数々の外国でのアルバイトを経験して日本に帰ってこられたということですが、なぜそのまま、フランスとかスイスで就職せずに日本に戻ってこられたのでしょうか。

鈴木 国連でアルバイトをしたという話をしましたが、国連の欧州本部はスイスのジュネーヴにありますが、国連内だけは治外法権で、別の滞在許可証が必要で、働き続けたいのであればその滞在許可証ももらうことができました。でも、それは重要な仕事というわけではなく、ガイドのアルバイトでした。そのまま働き続けることはできましたが、日本に帰れなくなることが怖かったんです。

日本は、就職する年齢に関して融通が利きませんが、通信社でアルバイトをしていた時の上司に「今（30 歳になる前に）日本に帰らないと、就職できないよ」と言われ、日本の社会に戻れないかもしれないという焦りが非常に大きかったです。真面目に小中高と進み、大学に進学してきましたから、「就職する」という選択肢を捨てる勇気がありませんでした。多分これ以上海外にいたら、日本の社会には戻れないというのもあるし、日本の「常識」に我慢できなくなるだろうなというのもありました。例えば上下関係もそうだし、いろいろな決まりごととかを受け入れられなくなるだろうと思いました。その時々、場面に応じて服装を使い分けなければ相手に失礼にあたるとか、そうしたことをあまり意味がないと思いはじめていた自分がいました。日本式の「常識」にもう一度順応するためには、今戻らなければならないと痛感したのが 29 歳の時でした。

関（司会） お酒が入ったらもっと話が聞けるのにというような感じになってきました。私自身、フランスに留学して帰ってくる時、いろいろ迷いがあったなと思い出しました。日本から離れ、日本社会とフランス社会との差に戸惑いながらも、フランスかぶれになっていたところもありましたね。今のお話、胸に刺さりました。もっともっとお話をお聞きしたいところなのですが、時間となりましたので、本日の講演会はこれで閉会とさせていただきたいと思います。

皆さんのフランス語を頑張りたいという気持ちを、研究室でも全面的にバックアップしたいと思っています。本講演会開催にあたりご尽力いただきました関係各所の皆様、研究室の先生方をはじめ、メディアセンターや全学共通教育事務室の皆さまにも御礼申し上げます。何より、コロナ禍の中、ミックス型での講演会実施を引き受けていただき、立教大学までお越しいただいた鈴木さんに、心から御礼申し上げます。

全学共通科目言語 B 連続企画

世界を知ろう！～スペイン語講演会～

スペインは今

日時：2022 年 7 月 1 日（金）17 時 30 分～ 19 時 00 分
開催方法：Zoom によるオンラインと対面のミックス開催

講師：**土肥野 秀尚**氏
略歴：慶應義塾大学文学部人文社会学科西洋史学専攻卒業。マドリード自治大学大学院修士課程近世史修了。慶應義塾大学大学院文学研究科史学専攻西洋史学分野修士課程修了。慶應義塾大学大学院文学研究科史学専攻西洋史学分野博士課程在籍中。バスク大学大学院近世史博士課程在籍中。立教大学元兼任講師。

司会：松本 旬子（スペイン語教育研究室主任／外国語教育研究センター）

はじめに～スペイン留学への道

土肥野 秀尚氏

土肥野　皆さんこんにちは。僕は今、スペインの大学院で、スペインの歴史を研究しています。昨年は立教大学で 1 年次生の必修科目の授業を担当していたので、今日いらっしゃっている方の中には、知り合いの学生もいるかもしれませんね。現在はスペイン語の教員をやめ、新型コロナウイルスの感染拡大で延期になっていたスペイン留学をしています。２月から３カ月ほどスペインに滞在して、長期留学をするための準備をしてきて、今は学生ビザを申請するために一時帰国中です。この一時帰国の時間を使って、スペインの現在がわかるような現在進行形の留学体験談をしてくれないかということで、今日ここで話をすることになりました。

講演会に来てくださった方々は、留学が決まっていて、この秋から留学に行く予定の方、まだ留学の予定はないが、大学在学中に一度は行きたいと思っている方、そして、スペイン語を学び始めて、スペイン語圏に興味を持ち始めた方……そのどこかに当てはまるのではないかと思います。今日はそういった方々向けに、始まったばかりの僕の留学体験談を話しながら、リアルなスペインの現在をお伝えできればと思います。

この前までスペイン語教員だったのでついまだその立場から考えてしまうのですが、現在は語学の授業内で学生に対して、「語学研修や海外留学に行ってこい」と勧めにくくなっていて、学生だけではなく、語学教員の方にとっても非常につらい時期だと思います。この体験談を通して学生たちのスペイン語学習への意欲向上に少しでも協力できればと考えています。

昨年度の「世界を知ろう！スペイン語講演会」も僕が担当し、若手研究者の立場で、スペイン語を学ぶにあたって大切だと思ったことや、学生生活を過ごすうえで大切だったことをお話ししました。

その際にもお話ししたのですが、どのように僕がスペイン語に関わるようになったか簡単にご紹介させていただきます。きっかけは、大学１年次生の時に第二外国語としてスペイン語を選択したことでした。僕はもともと静かな性格で、当時はスペイン語やスペイン語圏にそこまで興味がなかったのですが、スペイン文学が専門の先生による面白いスペイン語の授業に出会って、スペイン語の学習に興味を持ち始めました。さらに大学２年次生の夏休みを使ってスペインのサラマンカの語学学校に３週間通い、その後、３年次生になる直前の春休みにはクエンカというところに行って、また３週間語学学校でスペイン語を勉強しました。大学３年次生くらいから、なんとなくスペイン語を話せるかなという感覚を持てるようになり、会話するのに困らなくなってきたので、一人でスペインのあちこちに行ってみたり、スペイン語の世界を広げるために南米のペルーとパラグアイに行ったりしていました。スペインによく行った学生生活でしたが、学部生の頃は長期留学はできず、１カ月くらいの期間の旅を何度も繰り返すだけでした。スペインは地域によって多様性があり、スペインの中をめぐっていると、まるで違う国に行っているような感覚を味わえます。だから何度も繰り返しスペインに行ってしまったのではないかなと思います。

初めて長期留学したのが、スペイン語力がある程度ついて何がしたいかが明確になってきた大学院生の時です。2018 年９月から１年間、マドリード自治大学へ歴史を学びに行きました。ここまで旅をしてスペイン全体を見ていたのですが、歴史をやるなら最終的にバスク地方が面白そうかなと思い、この春から人生２回目の留学をバスクで始めました。

写真①スペインの地図

前回の講演会では学生時代の経験を交えて、以下の点について話しました。

①スペイン語をどのように勉強し、スペイン語を４年間続けたことで言語観がどのように変わっていったか

②異文化の学び方と旅の技術について

③どのように僕の研究地域であるバスク地方に辿り着いたか

振り返ってみると、言語学習と旅についての内容が多い講演だったかなと思います。前回の講演会にも興味を持ってくださった方は、講演録がありますから手に取って読んでみてください。

スペインのコロナの状況とバスクでの日常

今回は今年２月に始めた留学体験を中心に話してほしいと依頼されたのですが、今回の留学先はスペインらしいスペインではなく……つまりステレオタイプのスペインのイメージであるアンダルシアとかあの辺りではなく、僕の留学先のバスク大学があるちょっと変わったバスク地方という辺境のス

ペインが舞台になります。ただ、スペインには何度も行っていますし、マドリードにも１年間留学していましたから、スペインについて広く質問していただいて構いません。また滞在中には学会で、ガリシアとかカンタブリアのあるイベリア半島北部やマドリードなど、スペインの他の地域も訪ね、コロナの状況はどの地域でもそこまで変わりないかなと感じました。

以前マドリードに１年間留学したので、今回スペインに行ったとき、ふと留学中によく訪れていたバルやレストランの人たちは元気にしているだろうかと思って、昔住んでいたあたりを懐かしく散歩しました。ほとんど何も変わっておらず、事前に連絡しないでふらっと行ったのですが、何人かには久々に会うことができて、いつものように元気そうに働いていました。毎週金曜日にパエリアが安く食べられるレストランがあって、留学中いつもそこで食べていました。そのレストランを訪ねたときには、以前から働いていた人がいて、「金曜日のパエリアまだやっているの？」と聞いたら「まだやっているよ」と返ってきて、コロナ前と変わっていないんだな、と少し安心しました。

また、マドリードに住んでいたときの友達にも会いました。その人はスペインの大学で英語を教えていたのですが、ずいぶん前から対面でも授業ができるようになったということでした。友達とコンサートにも行きましたが、会場に入るときに検温されることもなく、普通にイベントができる状態になっていました。そもそもスペインに入国する際に、空港で検温や隔離なども何もなく入れたので、スペインはだいぶん元の状況に戻ってきているかなという印象です。

ここからはバスクでの日常を中心にお伝えします。コロナの状況については、バスクの事例でもスペインの他の地域に当てはめて考えていただいても大丈夫かと思います。

すでにスペイン語の授業で聞いてご存知の方も多いと思いますが、スペインでは、ほとんど全ての国と同様に、地方による言語的多様性があります。スペインだと有名なのが、カタルーニャ語、ガリシア語、バスク語、の３つです。このバスク語という言語だけは、ラテン語系統ではなく、スペイン語やポルトガル語、フランス語、イタリア語などといった言語と家族関係にない、系統不明の言語です。バスクは、スペインとフランスの両方にまたがる地域なので、スペイン側ではスペイン語とバスク語が、フランス側では、フランス語とバスク語の２言語が話されていると思っていただければいいのですが、バスクに住んでいる全員がバスク語を話すわけではありません。

2012年のデータでちょっと古いのですが、フランスを含めたバスク全体の人口約300万人のうち、バスク語話者は３割前後と見積もられています。また、町や世代によってもバスク語話者の割合はかなり異なります。日々、人と出会うたびにこの人とどんな言語で話せばいいのか、という問いを持ちながら暮らすことになるので、バスクにいると、日本にいるときよりも言語に対して間違いなく敏感になっていきます。

それでは前置きが長くなってしまいましたが、こんなバスクについて、今日は２部構成で話をしようと思います。まず前半部では、住みはじめた町や村の人たちと出会って人間関係を築き、留学の基盤の準備をどのようにしていくかについて話します。皆さんのほとんどは都市での留学になると思うので、小さな町、あるいは村に住みはじめた僕とは留学のタイプが同じというわけではないと思いますが、留学先で友達を作るうえで参考になる話はあると思います。またスペインの日常がわかる写真

や動画を使って現在のリアルなスペインとお伝えします。

後半部では、何に絞って話をしようか結構悩んだのですが、留学の副産物として生まれた「ベルチョ」というバスク語で行う即興歌について話すことにしました。全く予期せぬ出来事が起こるのが留学の楽しみで、そういうものが留学経験を豊かにしてくれると思いますし、そういう遊びを通して異文化を学ぶことができるのではないかと僕は考えています。まさか留学して留学先の大学の授業だけ受けて帰国するなんて、そんなつまらないことはしないですよね。留学中にこんなことができて、こんな異文化についての学びがあるのかということを示すバスク留学の事例のとして、「ベルチョ」について話すことに決めました。バスク語が何度か出てきますが、アルファベットは英語と変わりませんし、発音はほとんどスペイン語と同じで読めないということはないと思うので、バスク語がわからなくても楽しさが伝わるように心がけて話します。それに自分から探さないとなかなか聞こえてくる言語ではないので、「どんな言語なんだろう」「音やメロディはどんな感じなんだろう」というような気持ちで聞いてくれたら嬉しいです。それと後半部の「ベルチョ」の場面を楽しむために必要なポイントは、前半部のバスク文化とかその辺りの説明で伏線を張るような構成にしています。ですから前半部で出てくるいろいろなバスク文化にも注目して聞いてください。

第１部　バスクの村人との出会いと留学の基盤作り

住む場所を決め村人に受け入れられるまで

１回目の留学先はマドリードだったので、次は小さな町や村に住んでみたいという思いがありました。僕の研究テーマは、バスク地方の大部分に食糧暴動が広まった 1760 年ごろのバスク社会です。ですからバスク地方のいろいろな町にある文書館に行く必要があり、研究地域であるバスク地方の主要都市サン・セバスティアンというところに住んで、そこを拠点に研究したほうがいいのかなとも思っていました。

いったん研究を始めてみると、バスクの重要な文書館があるオニャティという人口１万 1000 人くらいの小さな町に長い間通わなければならないことがわかりました。しかし、サン・セバスティアンからオニャティへの行き方を調べてみると、交通の便が非常に悪く、毎朝通うのに２時間近くかかってしまいます。これは時間的にも経済的にも現実的ではないので、オニャティに住むことにしました。

バスク地方はイベリア半島北部に位置していて、フランス国境に隣接しています。オニャティはスペインのバスク地方を構成する３つの県、左上にあるビスカヤ県、右上にあるギプスコア県、下にあるアラバ県の３県から構成されています。オニャティは、ギプスコア県の南に位置しています。

写真②バスク地方におけるオニャティの位置

オニャティに行くにあたり、バスク研究をしている知り合いに、「オニャティに住むことになり

写真③村の風景

写真④屋号

そうだ」と言うと、「じゃあ、オニャティに住む人類学の若い研究者がいるから、その人に会ってみたらどうか」と、紹介してくれました。そして、その研究者の方に町や周辺を案内してもらいました。その人は、かつてオニャティのバルで働いていたことや、町や村に行ってパンの配達の仕事をしたこともありました。また、周辺にある農家に残っているさまざまな家具や仕事道具などの文化的な遺産を研究していたので、大部分の住民のことをよく知っていました。さらに驚いたことに、この人が「ベルチョラリ」と呼ばれるバスク語の即興歌人で、子どもたちにベルチョを教えていたのです。この研究者との出会いがオニャティでの生活の基盤づくりの助けになったと感じています。

オニャティの町の周りには 16 の村があるのですが、そのうちのオラバリエタという村に連れていってもらい、農村の研究をしているという理由から、村社会にとても興味があったので、最初はそこに住むことに決めました。オラバリエタは、オニャティの町から歩いて 25 分ほどのところにあります（写真③）。家を出たらすぐに農家があり、羊の群れがいて、目の前には礼拝堂があります。礼拝堂には壁があり、ペロタというスカッシュを素手でやるようなスポーツができます。たまに若者たちが遊びにくるので、ボールの音が聞こえると家から下に降りて一緒に遊ぶこともあります。

バスクに行くとすぐに気付くことですが、バスクの農家には屋号、家の名前があります。バスク人同士は屋号で呼び合うことが多いので、名前や苗字を覚えるだけでは足りないことがあります。例えば隣人のヨセバという人は、ヨセバではなく、彼の屋号であるウルセ（ウルセライの略）と呼ばれています。そういうことを理解していないと、「誰のことを言っているのだろう」と、村の人の話についていけなくなってしまいます。

どの村の入り口にも家の名前のリストがあり（写真④）、オニャティには全体で 360 くらいの農家があるそうです。まずは住んでいる村の農家の名前から覚え始めようと思いました。農家の名前を教えてもらったり、洗濯場やかつて装蹄所だった場所を教えてもらったり、村の歴史の話を聞いたり、村中を散策したりするうちに少しずつ村のことがわかってきました。

オニャティは中心である町と、周りに広がる 16 の村あるいは地区から構成されていて、それぞれ非常に強いアイデンティティーをもっています。16 の村の他にも、市場とかオニャティ周辺で有名なバルなども、村人たちの会話を聞いていると話題にのぼることが多く、そういうことがわからないと地元トークに参加できない、つまり、村の生活には入りにくいということなので、気になった場所

写真⑤オニャティ周辺の散策

写真⑥ソシエダー

はメモして時間のあるときに行ってみると、徐々に地元トークについていけるようになります。

毎週日曜日にハイキングや山登りに出かけるグループがあるという情報を小耳にはさんだので、お願いして参加させてもらいました。やはり、その土地のことを知るには歩くのが一番ですよね。ギプスコア県にあるそれぞれの町では、子どもたちが気軽に参加できる散歩コースを作って、県全体の子どもたちを招待し合っているそうです。この散歩コースを考えてくれたミケル（写真⑤一番右）の案内で、オニャティ周辺を回りました。バスクで人と話していると、バスクが世界の中心という話し方をすることが多く、バスクで有名なものはみんな当然知っているだろう、という感じで話しかけてきます。半分冗談のようですが、半分本当です。人名、地名、農家の名前、村の名前など、固有名詞があまりにも多すぎて、頭が爆発しそうになりながら生活していたのですが、こうしてハイキングなどで歩きながら話をしていると、いつの間にか覚えているものです。

村にやってきて、最初の夜に連れていってもらったのが、このソシエダーと呼ばれる会員制の施設です（写真⑥）。これはこの町特有のものではなく、重要なバスク文化なのです。村にはバルがあまりないので、ソシエダーが村の中心になることが多いです。ソシエダーの会員になると、通常よりも安くお酒を飲むことができ、食材を持っていけば、自由にキッチンを使って、家族や友人と食事会ができます。週末は昼食前の 12 時半ごろにみんなで集まって……昼食が非常に遅くて 3 時くらいに食べるのですが……70 歳を越えたおじいさんが山でキノコを採ってきてくれて、それを食べたり、タラの顎肉やヤギのステーキなどを食べたり、農家で作られたチョリソーやチーズなどを、ワインを飲みながら食べることが多いようです。

初めてソシエダーに行ったときには、すでに日本人がやってくることを村人たちが噂で知っていて、楽しみに待っていてくれました。すぐに質問攻めにあい、村社会特有のことですが、最初は「この外国人は信頼できる住民なのか」とか「村人と付き合っていく気があるのか」などを試されていたと感じたのですが、1、2週間くらいたって、どうにか村人の試験を突破できたようです。

こういうところに行くと、地理や方言の知識が非常に役に立ち、ばかにできないなと思いました。村人の何人かは、ほぼ毎日夜 10 ～ 12 時ごろまで、ソシエダーでお酒を飲みながら話をしているのですが、若者があまりいなくて少しさびしそうだなと思いました。せっかく村に来たので、村人と関わりたいという思いがあって、なるべく毎日参加しようと心がけました。ソシエダーに毎日通ってい

ると、いろいろな村人が日替わりで来るので、そこで知り合いが少しずつ増えていきました。

ソシエダーでは、村のくせの強いバスク語が聞けたり、村やバスクについていろいろ質問ができたりしました。ことわざも教えてもらい、村のことについて知るうえで、最適な場所だと思いました。さらに村人と打ち解けて知り合いができやすくなります。村人は村のことを本当に誇りに思っていて、先ほどもアイデンティティーが強いと言ったのですが、「この村の水が地球で一番だ」と毎日のように言い聞かせられました。ジントニックを飲まされるのですが、そのときに入れる氷がこの村の水を使っているから、「世界一のジントニックなんだ」と毎日延々と語られます。

このソシエダーでも、やはり耳学問が非常に面白くて、狩りの話や闘牛産業の話など、日本や都市にいては、なかなか聞くことができない面白い話がいっぱい出てきます。毎日村の人たちが何をしているのかをそこで聞いて、彼らがどういう生活をしているのかが少しずつわかってきました。面白そうな予定があれば、「連れていってください」とお願いしました。例えばウサギを殺して、毛皮を剥ぎ取り、冷凍保存するまでの過程を教えてもらうこともありました。「日本の大都市出身の若者は、こういうことに興味があるのか」ということがわかってくると、村人は喜んで農作業や狩りのことを教えてくれ、それで駆り出されて、農作業を手伝わされることもあります。

僕が研究しているのは、人口の約 75 パーセントが田舎の世界に住んでいた近世のスペインですから、ブドウ栽培やチョリソー作り、チーズ作りなど、現代の都会人ではわからないことは留学中に経験しておかなくてはと思って、ソシエダーに通っています。そうしないと、「そんなことも知らないで、バスク農村史を研究しているのか」と、絶対に農家のおじいさんたちに笑われてしまいますよね。

このように、村のソシエダーを「第 2 の大学」と呼んで、毎晩 10 時に村の生活に根ざした知識を学びに通っています。おかげで僕のバスク語は、最初は共通の標準バスク語だったのですが、それが、昔よく行っていた町の方言に変わり、 1 カ月この町で暮らすと少しずつこの地域の方言を取り入れられるようになってきました。方言を取り入れてみると村人たちはすぐに気付いて、「こいつ、俺たちの方言使っている」と喜んでくれました。「もっと方言を勉強したいのですが、何か本を知りませんか」と聞いてみると、その翌日にオニャティのバスク語の方言に関する本を届けに来てくれて、すごく親切な村人と出会うことができたと思っています。

村に住み始めて 1 週間たった時、週末にカーニバルがあるという話を聞いたので行ってみました。コロナで 2 年近く祭りがなくて、ひさしぶりの大規模な祭りというので、みんな楽しみにしていました。動画の様子からおわかりになると思いますが、全くコロナを感じさせない雰囲気となっています。カーニバルではカラフルな衣装を着て、熊の格好をした人やチョコレート売りが出てきます。最初はみんなマスクをつけていましたが、ヒートアップしてくると、最後には誰もつけていないような状態になりました。

僕は念のためにマスクをずっとつけていましたが、ソシエダーの人たちは、「そんなものはとって、村のきれいな空気を吸いなさい」と言います。マスクの繊維を絶えず吸い込んでいるほうが、体によくない、と言われました。そう言われても怖くてマスクをつけていたのですが、ついに村で唯一マスクをつけている人間になってしまい、浮いてしまいました。ここでマスクをつけているのは君だけだからと言われ、余っているマスクを多くの方からプレゼントされたので、1000 枚近くも家にたまっ

てしまいました。「毎日マスクをつけるなら、もったいないから布のマスクにしなさい」と怒られることもあります。マスクをつけるのはバスや電車に乗るときだけで日常的にはつけません。

写真⑦ベルチョエスコラがある建物

●人間関係を作る鍵となった「ベルチョ」と「コアドリージャ」

僕がオニャティで人間関係を作る上で第２の鍵になったのは、ベルチョエスコラというバスク語即興歌の学校です。このカラフルな可愛い建物で（写真⑦）、アコーディオンやバンドやベルチョなど、日本でいうサークル活動、文化活動が行われています。文化人類学の研究者でベルチョラリでもある人を紹介してもらったと先ほど言ったと思いますが、その方のお姉さんも、子どものベルチョの学校の先生をしていました。それを知って、たまたま聞いて暗記していたベルチョをいくつか歌ってみると、「興味あるなら学校に見学にこない？」と誘われ、行ってみたのがきっかけで学校に通うことになりました。このベルチョの活動については、後半部で詳しくお話しします。

このベルチョの学校を通して知り合えた文化人類学の研究者のお姉さんから、あるとき連絡がきて、その方の恋人が毎週コアドリージャという同世代の友達グループで飲みにいっているから、「よかったら来てみたら？」と言われました。コアドリージャのメンバーはみんな受け入れてくれると言っているよ、ということで仲間に入れてもらうことにしました。こうして知り合ったコアドリージャが、第３の鍵です。

コアドリージャは、バスク社会の縮図のようなものだと捉えています。これまで４つの町でコアドリージャに入れてもらったことがあり、今回は５回目になります。コアドリージャと言ってもいろいろありますが、20 人近くいる大規模なコアドリージャになると、１日参加しただけでも一気にその数の知り合いができます。例えば彼らに、「どんな仕事をしているの？」と聞けば、それだけで町の人たちがどんな生活をしているのか、だいたいのところがわかってきます。コアドリージャが集まるのは週末で、祭りやイベントや食事会があるときですが、毎週木曜日には「ピンチョポテ」というイベントがあり、１杯お酒を頼むとおつまみがついてくるハッピーデイなので、それをみんな楽しみにしています。

コアドリージャごとに特徴があるのも非常に面白くて、僕を受け入れてくれたコアドリージャの中には、「ボガ」という名前のバルを経営している方がいるため、メンバーははしご酒をするときの拠点をここにするわけです。いつもこのバルで始まり、ここで終わらなくてはならない。毎週習慣化されているので、待ち合わせのためにわざわざ連絡することもなく、夜７時にこのバルに行けばみんな

がいることを知っています。というわけで、「ボガ」に何度も行くようになり、常連の人もわかってきました。その常連の中に、チャコリというバスクの白ワインの生産者がいて、バルで話しているうちに、「よかったら今週末、うちのワイナリーを見にこないか」と誘ってもらえたこともありました。

こうしていろいろな地元の人と知り合えることはいいことなのですが、もちろんコロナにかかる危険性も高まります。ぶどう畑とワイナリーを見せてもらえるということで行ってみたのですが、その人は数日前にコロナにかかってしまったということでした。でも、無症状なら隔離なしで外に出られる状況にまでなっていたので、そんな状況でも約束のワイナリーツアーはためらいなく決行されました。

帰国延期で参加できた村の祭り

最後は村の祭りです。コロナのために2年ぶりの開催で、4月29日〜5月1日の3日間開催されました。もともと4月20日に一時期帰国の予定だったので、その頃には村にいるとはできないと思っていました。村人は、せっかく2年ぶりに村の祭りが開催できるのに僕がいられないのかと、がっかりしていました。しかし帰国の前日4月19日にPCR検査をしに行ったら、なんと症状はないのに陽性という結果が出てしまいました。その結果、飛行機には乗れず村の祭りには参加できることになりました。無症状なのに陽性ということで、僕は村人が僕を引き留めるために医者に電話をして、結果を陽性に変えてしまったのではないかと思いました。逆に村人は、僕が村を好きになりすぎて、「残りたいからわざとコロナにかかったんだ」と言っていました。この事件についていろいろな陰謀説が浮上しましたが、とにかく村人たちは喜んでくれました。

急きょ、村の祭りの日までいられることになると、「じゃあ、手伝って」と、準備委員会に飛び入り参加することになりました。村の準備委員会の会議に参加し、祭りのプログラムの配布や抽選券の販売を行い、祭りの当日には、「チョスナ」という屋台が出るのですが、そこで飲み物の販売を手伝いました。抽選券は、木曜日の「ピンチョポテ」とか週末にコアドリージャではしご酒をするときをうまく利用して売っていきました。抽選券の販売というちょっとしたお手伝いをしたことで、町の人とも結構知り合えたなと思います。

村の祭りの1日目は、午後に子ども用のゲームがあり、夜は15〜25歳くらいの若者中心のコンサートがあり、2日目はソシエダーを使って村の商品の試食会と「ベルチョ昼食会」が行われました。「ベルチョ昼食会」は、昼食を食べながらベルチョを聞くという会です。3日目は子どもたちによるバスクのダンス、その他にはペロタ大会、カードゲーム大会も行われました。

屋台のシフトに入ったのは、1日目の夜中の10時から2時半と、3日目の午後です。夜中のシフトは特に大変で、日本人で唯一マスクをしている僕が珍しいのか、酔っ払った若者がやたら僕らの店に列を作って、飲み物を注文しにきます。なかには大勢で来て、一気に8人分の飲み物をバスク語で注文してくることもあり、お金の計算が本当に大変でしたが、なんとかその夜中を乗り切りました。村の祭りの手伝いをしたことで、めったにソシエダーに来ることがない人たちにも会うことができました。

祭りで仕事をしたご褒美ではないですが、300年以上歴史がある鍛冶場が家にある人と知り合い

になり、「歴史をやっているなら見せてあげる」ということで、その翌日に古い鍛冶場を見せてもらえることになりました。これは（写真⑧）空気を送って火力を強めるふいごですが、大工と、革を使うのに特化していた靴職人が作ったそうです。バスクの研究をしているとやたら靴職人が出てきて、なぜ人口 2000 ～ 3000 人程度の小さな町でそんな多く靴職人がいるのかなと思っていたら、やはり革を使ういろんなものに靴職人が関わっていたからですね。バスクは鉄産業で有名ですが、鉄を作る際に革製のふいごが必要だったから、同じ革を使う靴職人がこんなにいるのだと思います。暴動のリーダーにもなっているのですが、そうした背景がよくわかってきました。

写真⑧ふいご

その家の人に、「なんで靴職人がふいごづくりに関わっていたことを知っているの？」と聞いたら、文書館に行って、その家に関する史料が残っていないかどうか調べたからだそうです。こうした住民と歴史との関わりを見ると、町の歴史を保存している文書館がちゃんとその町にあることが、住民の歴史への興味や意識を育てているのではないかなと思います。住民と歴史の距離が近いのは、こういった環境のおかげなのではないかなと、歴史研究者としてとても嬉しくなりました。

ここまで、ソシエダーとベルチョの学校とコアドリージャ、村の祭りの準備委員会など、よそ者でなくなるべく町や村の一員として現地の人に受け入れてもらう鍵となるような場と現地での日常についてお伝えしました。留学にはいろいろな過ごし方があると思いますが、なるべく現地の人と多く時間を過ごすことをおすすめします。いったん、これで区切りますが、質問などありますか？

質問者①　村の人にもらったマスクはどうしたのですか？

土肥野：もらったマスクはオニャティの村の家に置いてあります。お土産でほしい方にはお配りしますよ（笑）

質問者②　「オラバリエタ」に何か意味はありますか？

土肥野：「オラ」が鍛冶場とかそういう意味です。「バリ」というのが新しいという意味です。「エタ」が場所です。だから、「オラバリエタ」で新しい鍛冶場がある場所という意味です。

質問者③　それでは「アリエタ」はどういう意味ですか？

「アリ」が石という意味です。「エタ」が場所なので、石が取れた場所。採掘所とかそういう可能性もあります。バスクの地名は面白いです。家に名前がついているので、家族が相続するというわけではありません。必ずその農家に所有者が住んでいるわけではないのです。その農家を貸し出して、借家に住んでいる人もその名前を名乗ります。必ずしも住んでいる人と、その家の名前が一致しているわけではなく、どんどんずれていくことがあります。

第２部　ベルチョによってバスク文化理解を深める

ベルチョとの出会い

留学先では、大学の授業以外でもいろいろなところで異文化を学べます。そうしたバスク文化の事例として、第２部ではベルチョについてお話しします。

まずベルチョについて説明する前に、ステレオタイプな思い込みを持たずにどんなものかを聞いてもらいたいと思います。「ベルチョ大会」で初の女性優勝者になったマイアレン・ルハンビオという方が、12 月に行われたベルチョの大会で歌ったベルチョの動画を見てもらおうと思います。内容がわからなくても、どんな緊張感で歌われているのか、観客はどういうふうに聞いているのかなど雰囲気全体を楽しんでください。

大会では司会者がテーマとメロディを指定します。今回のお題は「明かりがつくまで全部うまくいっていた」という難しいもので、メロディは自由で３つ歌うよう指定されました。ちなみにベルチョラリが想像力を膨らませて自由にストーリーを作れるように、お題は曖昧なものになっています。お題が言いわたされたあと、ストーリーを考える時間が少し与えられ、その間に実況の人がマイアレンの紹介をします。ベルチョは基本的にユーモア系か社会批判系になるのですが、彼女はジェンダーに対する社会のステレオタイプなイメージへの批判をテーマに歌いました。

バスク語がわからないと評価できませんが、これは実況の人が涙が出てしまったと言っているほどレベルの高いベルチョです。ベルチョが一定の拍ごとに韻を踏んでいることは、バスク語がわからなくても音を聞いていればわかると思います。最後のベルチョも、「ウステン、ウステン、ウステン」と韻を踏んでいました。

今聞いてもらったのは大会用で長めのベルチョです。日常的に聞くことができるベルチョは主に２種類です。「ソルチコ・アンディア」というタイプでは 10 音節 8 音節のセットが４回繰り返されます。それぞれ最後のところで脚韻を踏まなければいけません。10 音節 8 音節で韻を踏み、最後の 10 音節 8 音節のところで韻を踏む感じですね。もう一つのタイプが「ソルチコ・チキア」というタイプで、7 音節６音節のセットで脚韻を踏みながら、４回繰り返されるものです。皆さん、スペイン語の授業の最初に、音節の切り方を習いましたよね。それが実際に生きた形でベルチョで使われています。また、ベルチョの分類には、「バパテコ・ベルチョア」という即興で歌われるものと、「ベルチョ・ハリア」という書かれたベルチョの２種類があります。

説明だけ聞いてもわからないと思うので、ここからは日本語訳をつけて短めのベルチョの例を見

ながら説明します。そもそも僕がどのようにベルチョに出会ったかというと、ベルチョの存在は、さまざまなバスクのイベントですぐに聞けるのですでに知っていました。僕の誕生日の時に知り合いのバスク人がベルチョでお祝いのメッセージを歌ってくれたことがあって、それにベルチョで答えてみようかなというのが興味の始まりでした。コロナ禍で外出しない時期を利用して、ベルチョを作っては友達に送ったりしていて、留学前から興味は持ち始めていました。

写真⑨イバエタ村でのベルチョ

本格的に始めるきっかけになったのが、３月１日にサン・セバスティアンの近くにあるイバエタという村で行われた祭りです。その頃、バスクの公務員がバスク語を話せないという問題をめぐって裁判が起きていました。バスク語を知らなくてもバスクで公務員として働いてもいいという判決を裁判官が出してしまったので、バスク語擁護者が怒って、バスク語熱が高まっていました。そうした言語に関する議論がバスクでは日常的に起きています。

そんな時に、「外国人がバスク語でベルチョをやったら勇気づけられるから、頼むよ」と言われ、じゃあしょうがないな、とベルチョを村の祭りでやることになりました。最初は恥ずかしさもあり、そこまで深くベルチョについて知っていたわけではないので、真面目なつまらないものを作ってばかりいました。もちろん即興でできるはずもないので、頑張って準備をしました。

２つ歌い、最初に歌ったのは、「今、僕は村の祭りで、断りきれずに大勢の人の前にいる。ここに上がるかどうか昨日はためらっていた。そしてうまくベルチョができただろうか」という感じのベルチョになります。皆さんに聞いてもらいたいのは、僕が歌った直後に、日本人がベルチョを歌ったことをネタにして、プロのベルチョラリの方が歌ってくれたベルチョです。プロの即興のレベルがこちらです。

ガステルメンディのベルチョ（脚韻は“AIAK”）

⑩ Eguerdi on! Martxoak bata.	こんにちは！今日は３月１日
⑧ Denak ez dira al**aiak**.	全部が明るいわけではないけど。
⑩ Lagun bat hona ekarri digu	僕たちに日本人を連れてきてくれた。
⑧ Japonaiko bid**aiak**.	日本からの飛行機が。
⑩ Hidek bi bertso bota dizkigu,	ヒデがベルチョを２つ歌ってくれて
⑧ Aldatu dira gar**aiak**.	時代が変わった。
⑩ Mundu guztian dira famatu	世界中で有名になった。

⑧ Aingeru Guardako **jaiak**.　　この村の祭りが。

「aiak」という難しい韻を踏んでいます。

「全部が明るいわけではない」というのは、この辺りからロシアによるウクライナ侵攻が始まったときで、そうした外交情勢に言及していると思います。日本人をテーマにしつつ、うまく村の祭りを盛り上げるようなストーリーになっていました。日本人についてのあと、村の祭りに触れ、時事ネタを入れながら、面白いネタに移ってベルチョが続いていきました。

ユーモアあふれる面白いベルチョがいくつかありまして、一番印象的だったのは、「お菓子を買って」と駄々をこねる子どもに、しょうがないからドーナツの穴の部分だけ買ってあげた、というベルチョです。バスク語だけではなく、面白い話の仕方や、創造力（クリエーション）や想像力（イマジネーション）など、ベルチョから学べることは多そうだなと、そのときにふと思ったわけです。何もなくても、口だけ、メロディだけでできてしまうシンプルさの中に、複雑さがあるところがいいなと思いました。こうして実際に自分でベルチョをやってみてから、以前は気にしていなかった細かい部分も見えてくるようになりました。

次はもっとうまいベルチョができるようになりたいと思い、彼らのベルチョを聞いて、どんなパターンで韻を踏んでいるか、語順をどこまで変えられるのか、メロディの種類や話しの作り方を地道に学びました。それを覚えて繰り返し歌う毎日が始まりました。毎朝村から文書館がある町まで 30 分くらい歩くのですが、その道のりでベルチョを口ずさんでいく日々が始まったわけです。

バスクは狭い世界なので、ちょっとしたことでもニュースになってしまいます。村で日本人がベルチョを歌っただけなのですが、かなりの大ごとになってしまいました。まずラジオで、「今日の何時に日本人がベルチョを歌うらしいから、みんな集合」と放送が入り、それを聞いて、バスクに在住の日本人が来てくれました。バスク語をやっている日本人だから、絶対にあの人の生徒だということで、僕のバスク語の先生の友人まで見にくるという大騒ぎになりました。

新聞にも取材され、バスクのテレビにも呼ばれて、「なんでバスク語をやっているの？」とか「なんでさらにはベルチョまでやっているの？」などと尋ねられました。テレビと人々の距離が近いのもバスク社会の特徴で、僕の友達も度々テレビに出ています。テレビに呼ばれたからには雰囲気的に、またベルチョを歌わなければならなくなり、今回はこんなベルチョを作ってみました。前回とは違うメロディを使って、さらに長めの「ソルチコ・アンディア」のほうでやってみました。ストーリーにもオチがある感じにしました。

テレビで歌ったベルチョ（脚韻は“TAN”）

⑩ Pandemia ondo aprobetxatu　　外出禁止を上手く利用して
⑧ ta hasi nintzan bertso**tan**.　　ベルチョを始めてみた。
⑩ Euskaraz gogoz ikastearren　　バスク語を楽しく学ぶには
⑧ perfektu dala pentse**tan**.　　完璧な方法だと思って。
⑩ Nire lagunei bertso bat bota　　友達にベルチョを送ったときには
⑧ eta guztiok txantxe**tan**.　　皆冗談で笑っていた。

⑩ Baina zer da hau, iritsi naiz gaur　　でも、なんじゃこりゃ。
⑧ abestera telebis**tan**.　　今日テレビで歌うことになるなんて。

このような感じで韻を踏みます。いろいろな工夫があり、例えば「perfektu dala pentsetan」のところです。「pentsetan」は、英語で「thinking」にあたる単語で、標準バスク語では「pentsetan」ではなく「pentsatzen」です。でもそれでは韻が踏めないので、バスクにある多様な方言を総動員して言い方を変えます。すると韻が踏めたり、音節を調節できたりするので、うまくベルチョが組み立てられるというのが、ベルチョの面白さです。

他にも４月には約 10 日間、夜中も休むことなくバスク中をバトンを回して走る「コリカ」というイベントがあります。バスク人のアイデンティーの強化やバスク語学校の資金集めなど、バスク語促進の意味があるイベントです。そのときにもまたテレビに呼ばれて、ベルチョを歌うことになりました。「コリカ」のためには「もうすぐこの町にコリカが来るぞ。子どもも若者も、お年寄りもみんな集まれ！仕事仲間やクラスメイトも連れて走ろう。僕はバスク語擁護のために、この細やかなベルチョを作ってきた」というような内容のベルチョを作りました。

こんな感じで半強制的にベルチョの世界に入り込み、同時に知り合い研究者のお姉さんがベルチョの先生をやっているということもあったので、子どものベルチョの学校、大人のベルチョの学校の両方に通い始めました。子どものベルチョにも通ったのは、どうしたらベルチョラリがそんな上手に即興で歌えるようになるのか？というプロセスが気になったからです。

大人のベルチョの学校では、毎週火曜日に１時間ほど練習があります。まずは「アグラ」―これは挨拶という意味のバスク語なのですが―挨拶をします。各自ベルチョを歌いますが、これには近況報告のような意味があります。今週はこうだった、仕事が大変だったとか、僕の場合なら例えば「テレビにベルチョを歌いに行かないといけなかったけれど、そのベルチョはどうだった」というのをベルチョで歌うわけです。そのあと、カードを使ってベルチョを作ったり、プロが歌ったベルチョを聞き取って、繰り返し歌ったり、大会形式でお題を出し合ってベルチョを歌ったりします。それからペアで交互に歌うベルチョもあります。韻やストーリーがペアによって限定されてしまうのでこれも難しいですが、お互いからかい合ったりできるので、より面白いベルチョが生まれやすいです。

最後はまた「アグラ」（挨拶）で締めるのですが、例えば来週用事があって来られないなど来週の予定をベルチョで伝えたりします。全体的に練習はこんな感じです。

写真⑩ベルチョを練習するための教材

３月８日は国際女性デーでデモがあったので、この日の練習では全員がデモと

関係したベルチョを歌っていくということになりました。２人目のベルチョは、「おばあちゃんが出してくれるおやつはこんなんじゃダメだ。抗議しよう！」という内容で、おやつに「チョリソ　イハモン」（チョリソーと生ハム）を要求しています。スペイン語をやっている人は気づいたかもしれませんが「チョリソ　イ　ハモン」というのはスペイン語になっていますね。ベルチョはバスク語で行うのですが、排他的なものではなく、スペインのバスク地方では、スペイン語とバスク語の両方が使われていますから、その両方を使ってベルチョに多様性を与えています。これで韻を踏める可能性が広がります。

こうしてベルチョの学校を通して、ベルチョの作り方のコツを学んでいきました。まず、最後の連、起承転結の結にあたるところがオチの部分で、一番言いたいこと、一番インパクトのあること、面白いことを言わないといけないので、そこを最初に作ります。最後の部分が先にできるとどういう韻を踏まないといけないかが決定されるので、その韻と同じ単語を探して、頭の中でストーリーを作っていきます。このやり方でやったらユーモアのある面白いベルチョができるようになっていきました。

実際、ベルチョラリのベルチョを聞いていると、最初のほうはゆっくりと話を組み立てながら歌っていくのですが、最後はインパクトが残るように勢いよく歌っていて、最後に何を言うかは最初に決められているのだなということが、よく伝わってきます。

とにかく練習あるのみなので、毎日何か起きるたびに、それをネタにベルチョを作ってみることにしました。「一日一善」というか、「１日１ベルチョ」です。ベルチョ日記みたいな感じですね。夜にソシエダーに行くと、「今日はこんなベルチョを作ったよ」と村人に聞いてもらうわけです。いくつか例を紹介します。

基本的に毎週火曜日にあるベルチョの学校ですが、イレギュラーで木曜日に振り替えになった週がありました。その木曜日に行ってみると、誰も来ていなくて、僕はひとりで学校の前で待っていました。そのときに生まれたベルチョです。木曜日といえば何がありましたか？前半部で話しましたが、はい、「ピンチョポテ」ですね。というわけでこういうベルチョを作って、友達に「なんで学校に来なかったんだ」と文句を言いました。最後は繰り返すときもあります。

１日１ベルチョ①「今日ベルチョの学校があったのに……」

⑦ Bertso eskolarako	今週のベルチョのクラス
⑥ gaur geratu ga**ra**.	今日に振り替えなのに。
⑦ Baina ez dago inor,	でも誰もいない。
⑥ non dago ardu**ra**.	無責任だな。
⑦ Horregatik banoa	だから寂しく
⑥ ni triste etxe**ra**.	家に帰るか。
⑦ Ziur nago joan direla	絶対皆行ってしまったよ。
⑥ gaur pintxopote**ra**.	今日ピンチョポテに。

前半部で登場したコアドリージャのメンバーの一人が経営しているバルで飲んでいるときの出来事

も歌いました。そのバルはオニャティでビールの消費量が一番多いことで有名なのですが、ビールが切れるとビール樽を床にゴロゴロと転がして交換します。そのゴロゴロという音を聞いて急に日本が懐かしくなったというベルチョです。震災があったので、あまり日本ではこういうテーマについて話すのははばかられるのですが、バスク人にとってはお気に入りのベルチョでした。このベルチョで「だんだんユーモアわかってきたな」と言ってくれたのです。

1日1ベルチョ②「バスクでも地震が（？）」

⑦ Koadrilla batekin	コアドリージャと一緒に
⑥ Boga tabern**ara**.	Boga というバルへ。
⑦ Zerbezia bueltaka	ビールの樽がゴロゴロ転がり
⑥ eta lurrika**ra**.	地震が起きる。
⑦ Derepentian sartu xat	なんだか急に
⑥ Herrimina h**ara**.	懐かしくなった。
⑦ Japonian holakoak	日本ではそんなことが
⑥ pasatuak g**ara**.	よく起きるんだよ。

最後は日本への帰国直前で PCR 検査をしたら、無症状で陽性になってしまった時のベルチョです。

1日1ベルチョ③「PCR をしたら陽性に」

⑦ PCRa egin	PCR 検査をしたら
⑥ eta ze sorpr**esa**.	なんとびっくり！
⑦ Emaitza positibo	陽性になって
⑥ ta egin dut k**exa**.	検査結果を嘆いた。
⑦ Bidaia konponezeak	帰国の航空券を取り直すのは
⑥ eman dit per**eza**.	面倒くさかった。
⑦ Ta dana ahazteko	全部忘れるために
⑥ edangot zerb**eza**.	ビールを飲むか。

「esa」「exa」「eza」で、韻を踏んでいます。全く同じではなくても、音にはグループがあって、s でも x でも z でも韻を踏めます。

ベルチョを楽しくやっていると、現地の人たちがベルチョの歴史など、いろいろな話をしてくれるようになりました。バスク人は重要な歴史的出来事などの記録をベルチョによって残したといわれています。例えば、18 世紀の小麦価格の高騰や、1755 年にあったリスボン地震の知らせなどもベルチョで残っています。あとは、隣り合う町同士の対立もベルチョに残されています。山がちょうど 2 つの町の真ん中にあると、どっちの町の山だ、と言い合って、わざわざ反対側に行って小便をするようなこともやっていました。19 世紀のカルリエスタ戦争や伝染病、あとは婚約者を裏切ってしまった後悔のベルチョなど、いろいろなものが残されています。

文字を書けずに生活していた民衆史を研究するうえでは、史料に残らない口承文化についても考えなければならないと思いますが、バスクではベルチョは研究に使える貴重な史料となります。

書かれた古いベルチョを集めて、現代風にリズムをつけて録音して CD を出すから参加してくれないか、というお誘いを受けたときは、なんて素敵なプロジェクトなのだろうと思いました。こういうプロジェクトがあれば、歴史に興味を持つ人が増えるかもしれませんね。バスクでは歴史に遊びの要素を加えて、多くの人を歴史に近づける面白い取り組みをやっているなと感心しました。歴史を研究していると、アカデミックな世界から抜け出るのが難しいので、ベルチョに出会って若者と歴史をつなげるためのヒントをもらった気がしました。

また、うまいベルチョが作れるのは小さい頃から練習を積んできた特定の人たちだけなのですが、ベルチョはバスク人にとってとても重要なものなのです。例えば葬式の時にベルチョラリに頼んで別れの言葉を書いてもらうこともあります。歌の歌詞や、イベントの時の大切なメッセージも、ほとんどベルチョラリが書いています。バスクの至るところに、このベルチョが潜んでいると言っても過言ではないと思います。

●「ベルチョ昼食会」について

最後に、この村で過ごした２カ月間の最後のイベント、村の祭りの最後にあった「ベルチョ昼食会」の話をして、講演会は終わりにしようと思います。「ベルチョ昼食会」があると聞いて嫌な予感がしました。するとやはり、村人に「ベルチョを歌ってくれ」と言われ、しかも今回は「5個歌ってくれ」と無理を言われました。でも僕は祭りの初日の夜中に屋台のシフトが入っていて、ほぼ睡眠できない状態で２日目の昼食会でベルチョはきついなと思ったので、交渉して３つ歌うという話に落ち着きました。

写真⑪オラバリエタ村で行われたベルチョ昼食会

この村の祭りを事例にして、「ベルチョ昼食会」について説明します。

まずベルチョラリが村に到着します。今回はベルチョラリが３人来ました。そして昼食の時間になるまで、外でワインなどを飲みながら話して時間を過ごします。ベルチョラリのネットワークはすごくて、どんな町や村にも、絶対にベルチョラリがいるんですね。

その村にいるベルチョラリがインフォーマント（情報提供者）になり、昼食会で歌う外からやってきたベルチョラリに、最近村ではどんなことが起きたのか、という情報（ネタ）を提供します。それによって外から来たベルチョラリが、その村に合ったベルチョを歌えるようになるわけです。昼食の時間が結構長くて２時間くらいかかりますが、前菜、魚・肉、デザートを食べ、食後酒を飲んだ後、

ベルチョの催しがスタートします。

まずはベルチョラリがベルチョで挨拶します。「今日は昼食会に招待してくれてありがとう」とか「この村は本当に最高だ。昼食は美味しかった」というようなことを歌いました。その次に、誕生日の人がいたので「誕生日おめでとう。そこにいるお兄さん、ちゃんとプレゼント買ってあげなよね」というようなベルチョを歌いました。そのあと、他の村にいる人たちについてのベルチョが続き、ちょっとずつ「日本人もベルチョやるだろ？」という匂いを出していって、最終的にベルチョでバトンをわたされます。

このベルチョラリの柔軟さを見ていると、いかに自分が言語に不自由なのかを痛感しました。そして、ついに僕が歌う番がきました。長めのベルチョを３つ、それまで一度も歌ったことのないメロディで挑戦しました。

最後の単語は、韻からどの単語が来るか推測でわかることが多いので、みんな一緒に歌ってくれます。

ベルチョ①（脚韻は“ELA”）

⑩ Jai gabeko bi urte izan da	祭りのない２年は
⑧ negu gogor ta goib**ela**.	厳しくて悲しい冬のようだった。
⑩ Baina guztiok musukoa kendu	でも皆マスクをはずして
⑧ ta heldu xaku jai itz**ela**.	素敵な祭りがやってきた。
⑩ Entzun dot atzo gaupasa egin	昨日の夜は一晩中寝ないで
⑧ ta ondo pasa eb**ela**.	楽しく過ごしたみたいだ。
⑩ Ta orain batzuk bixamonakin	今この中には二日酔いで
⑧ gabiltza zombi bez**ela**.	ゾンビみたいな人が紛れ込んでいる。

ベルチョ②（脚韻は“INA”）

⑩ Eztakit zein den honen errudun	どっちが本当の原因かわからない。
⑧ Covida ala txakol**ina**.	コロナか、チャコリ（白ワイン）か。
⑩ Dana dela ez zait itzuliko	どうしたって帰ってこない。
⑧ galdutako hegazk**ina**.	逃してしまった飛行機は。
⑩ Baina bardin xat nik dudalako	でも、そんなことはどうでもいい。
⑧ hemen geratzeko m**ina**.	僕はここに残りたいから。
⑩ Hau izango da nire bizitzan	この経験はきっと僕の人生で
⑧ garai bat ahaztez**ina**.	忘れられない思い出になるだろう。

ベルチョ③（脚韻は“TAN/KAN”）

⑩ Olabartako jaiak hasita	オラバリエタ村の祭りが始まると
⑧ jai asko datoz segi**tan**.	すぐにたくさんの祭りがやってくる。
⑩ Egunez ondo atseden hartu	日中はしっかり休息をとって、

⑧ ta jaixetara ilun**kan**.　　日が暮れる頃にお祭りへ。
⑩ Egunsentia ikusi eta　　日の出が見えたら
⑧ etxera goaz lau han**kan**.　　皆フラフラで家に帰る。
⑩ Ongi etorri ta ongi joan,　　ようこそ！そして気をつけて帰って！
⑧ ondo pasa Olabar**tan**.　　楽しく過ごして！オラバリエタ村で。

そのあと僕をネタに、プロのベルチョラリが続けてバルチョを歌っていきます。

セバスティアン・リシャソのベルチョ　（脚韻は“DE/GE/BE”）
⑩ Behin da berriro esanez gero　　何度も言ったときには
⑧ sinis dezaten mese**de**　　信じてよ。
⑩ Japoniar honek badauka　　この日本人は
⑧ makina bat abilda**de**　　すごい能力を持っているんだ。
⑩ Ez du esaten bera izango da　　まさか彼のことなんじゃないか
⑧ hemen gauego erre**ge**　　ここの夜の王様というのは。
⑩ Eguna ere pasatzen baitu　　日中も過ごしているから
⑧ begiak zabaldu ga**be**.　　目を開けずに。

これは日本人の目が細いことをバカにしたベルチョで、みんなが大爆笑しました。そのあとは、日本に帰る予定だったけれどコロナになって帰れなくなったことをネタにされて、「なりたくてわざとコロナにかかったんだろ、本当のことを言え」とベルチョで言われました。そのあとも、「バスク語と嘘を本当によく知っているなあ。コロナにかかったなんて真っ赤な嘘だ。村人に恋をして残りたくなったんだろう」などと、いろいろなからかいのベルチョが続いていきます。さらに日本人をテーマにベルチョが続いていくのですが、今度はマスクのことでからかわれてしまいました。たまにマスクを顎に下げていると、マスクつけていることを忘れて新たにマスクをつけてしまうこともあり、マスク２つで完全防備しておきながら、コロナにかかっているじゃないかと、それもネタにされました。

日本人ネタが出ると毎回一緒に登場するのが「チノ」（中国人）です。先ほど、スライドでも「チノ」というあだ名の人を紹介しましたが、その人のことです。「日本人がベルチョやったんだから、チノもベルチョいけんだろ」みたいな感じで、「日本人が３つやっているなら、チノは５つやってみろ」などとからかわれていました。そうして村人全員でベルチョを展開していき、盛り上がりをみせます。

そのあとだんだん落ち着いていき、ベルチョラリが「次も別のところでベルチョタ食会があるから、もう帰りたいな」というような雰囲気を出して、お開きにします。その後アコーディオンの演奏と、ダンスに移っていきます。これが村の「ベルチョ昼食会」です。こんな感じで村で大仕事をしたあと、僕は日本に一時帰国中です。

異文化学習の事例として、ベルチョについて長々とお話ししてしまいました。一見難しそうに思えることもやってみるといいことがたくさんあります。村人の中に入って文化を一緒に楽しむのは外国人にとっては難しいことですが、このようなことが本当の異文化理解ではないかなと思っています。

留学中にもっと知りたいと思うテーマが持てたら、大学での学問が本当の意味で生きてくるのではないかなと思います。

　それとコロナについては絶対に避けられません。「避けられないものは気にしてもしょうがない」とは僕は言うつもりはありませんが、伝えたいことは村の人たちやベルチョに代弁してもらいました。今年留学に行く人はぜひ楽しんでください。今日はバスク留学での体験について話しましたが、これからの皆さんの学業のモチベーションに少しでもつながればと思います。以上をもって講演を終わりたいと思います。ありがとうございました。

全学共通科目言語 B 連続企画

世界を知ろう！～中国語講演会～

私の留学時代

日時：2022 年 12 月 10 日（土）14 時 00 分～ 15 時 30 分
開催方法：Zoom によるオンライン開催

発表者：**南雲 大悟**　（外国語教育研究センター教育講師）
石橋 栄美氏　（独立行政法人 エネルギー・金属鉱物資源機構）
本学法学部 2005 年卒業　留学先：復旦大学、対外経貿大学、北京語言大学
政岡 和佳氏　（横浜市鶴見図書館）
本学文学部 2020 年卒業　留学先：国立台湾師範大学、
実習先：香港聖公會明華神學院
若月 来夢氏　（中国人民大学国際文化交流学院修士課程 2 年次）
本学現代心理学部 2021 年卒業　留学先：山西大学、中国人民大学

司会：森平 崇文（中国語教育研究室主任／外国語教育研究センター教授）

森平（司会）　こんにちは。立教大学全学共通カリキュラム運営センター主催「世界を知ろう！～中国語講演会～」に参加していただき、誠にありがとうございます。

この「世界を知ろう！」の講演会は、英語以外の 5 つの言語で継続学習を促すことを目的として毎年開催しております。この 2 年間は「華流エンタメは面白い」というテーマで学生の皆さんにプレゼンしていただいたのですけれども、今年は「私の留学時代」というタイトルで開催いたしました。なぜこのような講演会を開催したのかということは、もう皆さんおわかりだと思うのですけれども、2020 年から 3 年間、立教大学では中国語圏への留学は全てストップしております。東アジア地域は特に往来が厳しく、いまだにその現状は変わっていません。立教生の皆さんの中で、中国語圏に留学したことがあるという方は、今の 4 年次生を除けばほぼいらっしゃらない、オンライン留学のみということになります。留学というのは、もちろん中国語の学習において非常に大きな効果があることは確かです。けれども、単に語学の勉強のためだけではなく、留学を通じて大きな出会いがあったり発見があったり、人間的にも成長する非常にいい機会だと考えております。

今日、発表をお願いする 4 人の方々は、おそらく共通して、留学を通じて人生が変わった方々だと思います。私も 3 年間、中国語圏に留学していましたけれども、留学を通じて本当に人生が大きく変わりました。ですので、在学生の皆さんにはぜひ在学中に、卒業後でも構わないのですけれども、長期にわたって留学していただければと。中国語圏以外でもどこでも、海外に長期にわたって滞在し、語学を勉強するということは、単に語学の勉強以上に大きな実りがあると思っております。今回は留学の楽しさについて 4 人の方にお話ししていただくことで、皆さんに「自分も留学してみよう」と思っていただければ、この会を開催した目的は達成されると思っております。

まずは立教大学外国語教育研究センター教育講師の南雲大悟先生からお話ししていただきます。

留学先：中国人民大学

南雲 大悟（外国語教育研究センター教育講師）

南雲 大悟氏

南雲　南雲大悟と申します。立教大学で中国語を教え始めて、もうだいぶ経つのですが、現在は教育講師という職をさせていただいております。20 年以上前の留学の話をするので、それが皆さんの留学への興味を引くのかというのは不安ですけれども、「こんな時代があったんだ」「この人は、中国語を教えるうえでこういう経験が参考になったのかな」と気になったら、ご質問等いただければと思います。

今回は「私の留学時代」ということで発表させていただきます。画像に写っておりますのが、若き日の青年、南雲でございます。留学は大学院時代、2000 年 9 月から 2001 年 8 月まで北京に滞在いたしました。学部生の方は、まだ生まれていなかったでしょうか。2000 年から 2001 年にかけて、私は 26 歳から 27 歳でした。

大学院入学後、中国政府奨学金留学生という制度があると知り、ぜひ利用したいと準備を進め、2000 年の頭から出願・選考を経て、無事に採用していただき、その年の 9 月から渡航、留学することになりました。1 年後に帰国をし、その後、中国語を教える仕事に就きたいという考えがぼんやりとあったのですが、キャリアを積んだおかげもあって、2 年後の 2003 年 9 月から中国語を教える仕事に就くことができ、現在もその仕事を続けさせていただいています。

画面に表示されているのは中国政府奨学金留学生の出願書のコピーです。留学生の種類は「普通進修生」という一種の聴講生のようなもので、1 年間の留学を希望しました。留学先での専攻分野は、大学院でやっていた「中国メディア研究」。風刺漫画について研究していたので、そちらを学べる大学を選びたいということで、希望先は中国人民大学。中国人民大学の中でも、メディアについて研究できる新聞学院というところがあり、そちらの先生と事前に連絡を取り、受け入れの内諾書、つまり「この学生を受け入れるぞ」という一種の承諾の書類も出願時には提出しました。第 2・3 希望は、書いてはいるのですが、内諾書はありませんでしたので、ほぼ人民大学単願のような形。さらに「自費で併願するか」には「奨学金だけ受けます」ということで、強気の姿勢もうかがえるかなと思います。その結果、晴れて中国人民大学に、マスコミやメディアの研究で著名な新聞学院に決定したということです。

中国におけるメディア研究のトップクラスである中国人民大学新聞学院では、広告学がご専門の倪寧 (Ni,Ning) 先生に指導学生として受け入れていただきました。実は、漫画を研究している先生もいらしたのですが、ちょうど私の留学時期だけ、アメリカに在外研究に行くということになってしまい、やむを得ず倪先生が受け入れるという形になりました。そんなこともあり、倪先生に「今回は受け入れていただき本当にありがとうございます」とお礼を言いにいったところ、倪先生からこのような言葉をいただきました。

「你可以不上课。(授業に出なくていいよ、君は)」

えっ、と一瞬固まりしました。ただ、好きな授業だけ出て、それ以外はいろんなことができる、自由な時間が増えていいかなと切り替えて、いよいよ私の人民大学における留学生活がスタートするわけでございます。

よし、自由な時間が増えたし、まずは中国語の授業をたくさんとるぞ！と思っていたところ、なんと私は語学研修の学生ではないため、中国語の受講を週 2 コマまでと制限されてしまいます。正直がっかりしたのですが、ここも切り替え、HSK と文法に関する講義を取り、自分が中国語を教えるときに役立ちそうな授業を履修しようと考えました。中国語の先生になりたいという目標がありましたので、ネイティブの先生の教え方などを参考にして、自分も勉強しつつ、教え方や課題の出し方にも興味を持って学びました。その時受講したのが、外国人の誤用分析に関する講義でした。わからない箇所はその場で先生に尋ねることができる、文法好きにはたまらない授業でした。この時の講義が、今の私の授業や著書にも影響していると感じることがあります。こちらにいらっしゃる方の中にも、中国語の先生を目指すという人もいると思いますが、今まで習った先生の中から自分のやり方を検討しながら、ハイブリッド型で目標を目指していただければと思います。

授業以外にも、日本語学科の学生と、お互いの母語を教え合う言語交換、相互学習を週 2 回設けました。寮だけでなく、街に繰り出しコミュニケーションをとることは非常に楽しかったです。そのうちの一人は今日本の企業でバリバリ働いています。私は 27 歳くらいの留学生だったので、学部生とは年が離れていることもあり、どちらかというと社会人留学生のグループとお茶を飲みに行ったりしました。40 代、50 代の方、日本の方や韓国の方と一緒に学外での交流もありました。

それから、研究や学生との交流と兼ねてですが、漫画……といっても皆さんが読むようなコミックのような漫画ではなく、政治の風刺漫画の研究でしたけれども、今の若い人がどのような漫画の勉強をしているのかを知るために人民大学の中にある漫画サークルとも交流しました。そこでは、みんなで評論して自由に書きあってということなので、編集者の指導を仰ぐレベルではなかったのですが、サークルの方々は日本の漫画をよく知っていました。僕は、どちらかというと風刺漫画の研究ばかりしていたので、日本の新しい漫画は大学生のほうがよく知っているなあと感じることもありました。また、大学院での漫画研究に向け、精力的に動いておりました。特に当時 70 ～ 80 代になるご高齢の漫画家丁聰（Ding,Cong）さん（1916 - 2009）と華君武（Hua, Junwu）さん（1915 - 2010）にインタビューできたことはよい経験になりました。話の内容はもちろん、1 時間半の取材も通訳が入ってしまうと半分の時間になってしまいますが、自分で中国語を使ってまるまる取材できる、この充実感は本当に感慨深かったです。また、若者向けの漫画を発行する出版社なども訪問しました。中国の漫画を研究する珍しいやつ、ということで一度も断られることなく、複数社を回ることができました。

人民大学は日本の国会図書館にあたる中国国家図書館に非常に近かったため足繁く通い、1949 年建国以前の新聞や雑誌、漫画研究の理論書などをたくさん調べて、たくさん資料をコピーして、人生で一番図書館にいた 1 年になったかなと、今は感じます。

留学を機にこのようなことを進めてきたわけですが、日本では特に興味を持たなかった分野や面白いものにも目が向くようになりました。一つは C-POP、チャイニーズポップスです。テレビのチャ

ンネル［V］というアジアの音楽専門チャンネルに完全にハマりました。そこから「中国語の歌詞も勉強になる」など、いいように理解し、C-POP の CD や映像も見られる VCD などを買いあさります。帰国時の荷物は CD が 1000 枚以上に達することになってしまいました。また、C-POP のコンサートにも行き、ライブ感を楽しんだこともよい思い出です。日本のファンとしてステージに上がったこともあります。

続いてグルメです。学生ですのでそれほど高級なものは食べられませんでしたが、街で食べられるごくごく一般的な中国料理にもその都度感動していました。この時、とにかく野菜がおいしく感じられ、人生で初めて野菜を積極的に摂り、嫌いだったセロリが 26 歳で好きになりました。留学生同士の情報交換で「あのお店はおいしい」という情報を聞くと、みんなで食べに行きました。たとえば、人民大学から 30 分ほどバスに乗ったところにあるドイツのルフトハンザ資本のケンピンスキー飯店（凱賓斯基飯店）というホテルでは 20 時を過ぎると本場の名人が作るスイーツが半額になると聞いてみんなでこぞって食べに行ったりしました。甘いものや高級なものは日本ではなかなか食べられなかったのですが、そういうものに興味を持って毎週末ケンピンまで行くとか、国費留学生なのにこんなことをしていていいのかと思うこともしていました。

勉強・研究以外のお話をさせていただくと、旅行ですね。それでももっといろいろなところに行けばよかったなと思いますけれども、研究も兼ねて上海に行ったり、天津、大連、瀋陽など近場を電車の旅という形で安く行ったりもしました。これから発表される他の方々の中にも、中国国内や留学先だけでなく、長期滞在を利用して見聞を広げるという意味でいろいろなところを巡ったという人もいるかもしれません。

最後にこの数字「220 → 140」、これは体重（斤）です。110kgから最小 70kgまで痩せました。ダイエットを意識した部分もありますが、自然にもう痩せるわ痩せるわ、摂取カロリーを超える歩く量。人生で一番歩いたかもしれません。なお、帰国後には順調に体重を 100kg台にまた戻してしまいました。

私の視点で留学生活の一端をご紹介してきました。中国語を学びたい、中国語を教える職に就くうえで経験したい、そんなことを実現に導いてくれた北京留学は、本当に人生最高の思い出になっております。学びの形はいろいろで、語学・研究はもちろん、体験・交流を通しての気付き、発見も魅力の一つです。勉学のほか、C-POP のキングである周杰倫（Jay,Chou）を知ったり、セロリの魅力にも出会いました。まだまだ話せないディープな話題もあるのですが、今回はこのあたりで。ぜひ皆さんも留学にチャレンジして、新たな自分の可能性を広げてみてください。

森平（司会） ありがとうございました。皆さんから質問があると思いますが、その前に私からお伺いします。南雲先生は 2000 年以前に中国に行ったことはあるのでしょうか。それから、2000 年当時、中国に行き、特に北京で驚いたことやカルチャーショックを感じたことはありますでしょうか。ぜひ、当時の中国をご紹介いただければと思います。

南雲 時代のことは歴史の話になってしまうため省いていたので、補わせていただければと思います。私自身、この留学の前に一度、短期研修のような形で 3 週間ほど北京の語言学院（当時）に行った

ことがあります。飛行機に乗ったのも、その語言学院に行った時が初めてでした。ほかにもシンガポールなどいろいろなところに行ったことはあるのですが、長期での滞在は 2000 年からの留学が初めてでした。

2000 年といいますと、21 世紀に切り替わる 2001 年 1 月 1 日に、どんな感じになるのかな、盛り上がるのかなと思っていたのですが、それほどの盛り上がりはありませんでした。記憶に残っているのが、2001 年の最初に、江沢民前主席のスピーチが 7 分間、全チャンネルで映っているというのがありました。国全体でこのような形で祝うのだなと驚きました。

あと、ちょうど北京オリンピック開催の発表が 2001 年 7 月にありまして、その盛り上がりですね。モスクワの映像を見てみんなで感動しているという。そのあと、再放送、再々放送と、何度もその番組が繰り広げられました。メディアの研究をしていたので、ついつい報道の仕方に興味を持って見てしまったのですけれども。国レベルでそういった扱いをする、興味を持つ、宣伝するところを、こういう形でやるというのを。……あまりプロパガンダ的な話になってしまうと学生が興味を失ってしまうかもしれないのですけれど、そういうことに着目して勉強していたので、実際のメディアを見て触れて、体感できたというのはよかったと思います。そのほかにも寮のトラブルなども多々ありますが、それは面白いけれどここでは控えておこうと思います。

森平（司会） ありがとうございました。質問が来ていますので、お答えいただければと思います。

南雲 「広東ポップが漢詩のようだ」という質問です。これは雰囲気が漢詩のようだということか、それとも韻を踏んでいくということか、どちらでしょうか。

質問者 韻は踏んでいないと思うのですが、日本で習う漢詩の教科書のような、二文字・二文字・三文字で読むような……。

南雲 中国語のリズムというか、作詞の際にそういうことを考えていると思います。漢文のスタイルを知っている人は詳しいと思いますが、現代中国語で捉える人は全然気付かないと思います。日本人ではなく中国の人が聞くとリズムがいいというのは確かにあると思います。歌詞を作るときには必ず文字数やテンポは考慮されていると思うので。歌いやすさや、中国の方が聞いて心地いいとか、音に乗せやすいという配慮はあると思います。広東ポップと当時のチャイニーズポップスの違いは断言できなくて申し訳ないですが、そういうリズムや歌詞との関係で、非常に面白い指摘だと思いました。

森平（司会） 南雲先生、ありがとうございました。では続きまして、次は法学部の卒業生でいらっしゃいます、石橋さんにお話をしていただきます。石橋さん、よろしくお願いいたします。

留学先：復旦大学、対外経貿大学、北京語言大学

石橋 栄美（独立行政法人 エネルギー・金属鉱物資源機構）

石橋 栄美さん

石橋　はじめまして、石橋と申します。私が留学していたのは 2002 年。大学 2 年次生の時に上海の復旦大学に留学しました。今回このような機会をいただき、当時の留学を振り返ってみると、その後の学生生活や長期留学、仕事、プライベートに非常に大きな変化や影響があったと改めて感じました。今日はそんな復旦大学での留学を皆さんにご紹介したいと思います。私が留学していたのも、南雲先生と同じく 20 年前のこととなるので、今の中国とは時代も環境も変わっているところはご了承ください。

まずは自己紹介させてください。私は 2005 年に法学部国際・比較法学科、現在の国際ビジネス法学科を卒業しました。第 2 外国語は中国語でした。ゼミは高原明生先生の中国政治ゼミでした。高原先生は、今は東京大学の大学院にいらっしゃいます。大学 2 年次、20 歳の時に全カリ海外言語文化研修で復旦大学に短期留学しました。そして社会人 4 年目に仕事を辞めて、北京に 1 年間留学しまして、その後、そのまま北京に残り、仕事を 6 年間しました。現在は帰国し、仕事をしながら 2 人の男の子を育てています。

写真①復旦大学正門と宿舎

それでは復旦大学に留学した時のことをお話ししたいと思います。この留学は夏のプログラムで、期間は 2 週間でした。この留学に行こうと思ったきっかけは、大学 1 年次生で中国語を始め、自分の中国語がどのくらいなのか試してみたいと思ったことです。大学生になったら海外旅行に行きたいと思っていましたが、中国大陸に旅行をするのはちょっとハードルが高かったので、立教大学で連れて行ってくれるならそれに乗っかろうという気持ちで参加しました。

復旦大学に限らず、中国の大学はキャンパスがとても広く、自転車があると便利だと思いました。また、ほとんどの大学に毛沢東の銅像があ

ります。寮は２人１部屋で、ベッドが２つ並んでいました。机は１人ずつ背中合わせで用意されていて、ここで宿題をしたりしました。

クラスはレベル別に分かれていて、私が参加した時は４クラスありました。初級・中級２クラス・上級。ちなみに私は上級クラスにいました。クラスメイトは立教生のみのためアットホームな雰囲気でした。授業は朝８時から12時まであり、午後は自由時間です。授業は先生が中国語で行うゆえ、聞き取って理解するだけでかなりのエネルギーを使いました。そのため午前中だけでもヘトヘトなのですけれども、そこは切り替えて、午後は上海のあちこちの街に繰り出しました。午前中に習った単語やフレーズを、午後に聞いたり使ったりできるととても嬉しかったです。授業もとても役立ったのですが、留学して中国語が飛躍的に伸びたのは、授業以外の時間だったかもしれません。生活するため、生きていくためのサバイバル中国語の話をここからしたいと思います。

まずは買い物です。近くのコンビニや商店で、水やパンを買いました。コンビニにはレジがあり金額が表示されるので問題はなかったのですが、おばさんが一人でやっているような商店だと、金額を言われても１回では聞き取れず、何度か聞き返しながら買い物をしました。マクドナルドには行きましたが、注文するまでが大変でした。当時、注文する人たちは１列に並ぶ習慣がなく、次は私の番だと思っていても、横から割り込みされたり、後ろから押されて潰されたりして、注文するまでが大変でした。また、中国語でハンバーガー、ポテト、オレンジジュースが言えなかったため、仕方なく英語で注文しました。ちなみにハンバーガー、ポテト、オレンジジュースは汉堡包、薯条、橙汁です。最も苦戦したのが食事の注文です。当時の写真がなかったので、私のイメージに近いものをインターネットから持ってきました。メニューが全部中国語、漢字のみ。写真があればどんな料理かわかりますが、漢字を見て「これはこんな料理だろう」と想像して注文しました。もちろん注文する料理も中国語で言えないので、店員さんに指差しで「这个、这个（これ、これ）」と注文します。運ばれてきた料理が、想像していた料理と全然違う！ ということもしょっちゅうあり、スリル満点な食事の注文でした。

突然ですが、「揚州炒飯」はどんな料理か想像できますか？ 最後の２文字に「炒飯」とあるので、チャーハンですね。肉や野菜、魚介類など、さまざまな具が入っている五目チャーハン、全国どこにでもある定番メニューです。では次、「番茄炒蛋」「西红柿炒鸡蛋」はどんな料理か想像できますか？ ある野菜の言い方が２種類あるので２つになっていますが、同じものを指しています。最後の文字を見ますと、卵が入っていそうですよね。トマトの卵炒めです。番茄と西红柿はトマトを指しています。非常に一般的な家庭料理で、中国人が最初に覚える家庭料理ともいわれています。中国に滞在している間、何度も食べた料理です。でも初めて見た時、トマトが炒められてぐちゃぐちゃになっていることがショックというか、衝撃でした。

地下鉄、バス、タクシーなど乗り物での移動にも苦戦しました。地下鉄も当時は１列に並ぶ習慣がありませんでした。降りる人が優先という習慣もなく、乗るのも降りるのも、人をかき分けて必死に乗り降りしていました。現在はきちんと並んでいると思います。中国は、おじいちゃん、おばあちゃん、子どもに優しいです。席をゆずるのは当たり前という感じでした。また、地下鉄やバスの中で携帯電話で電話するのも普通です。声がかなり大きいので、話している内容はそこにいる人全員に聞かれてしまいます。でも、周りの人も気にしていない様子でした。

雨の日にはカッパを着て自転車で移動する人々の姿がありました。初めて見た時は衝撃的で、思わず写真を撮ってしまいました（写真②）。横断歩道を渡るのも最初は難しかったです。歩行者優先ではなく、車の信号が赤でも、右折する車は進んできます。そのため横断歩道では、轢かれないように必ず現地の中国人の後ろにぴったりくっついて一緒に渡るようにしていました。

写真②上海の街の様子

たった2週間の留学でしたが、いろいろな衝撃を受け、中国って面白いな、もっと知りたいなと思いました。中国を知るには、まず中国の政治を勉強しようと思い、中国政治ゼミに入りました。ゼミ旅行では万里の長城に行きました。また留学中、中国語ができず、先ほどお話しした食事、買い物、地下鉄・バス・タクシーなどの移動が大変だったので、中国語をもっと聞き取れるようになりたい、しゃべれるようになりたいと思い、中国語の必修が終わったあと、リスニング強化や作文などの自由科目も履修しました。自由科目は本気で中国語を伸ばす授業なのでかなりきつい授業でしたが、日本にいながら中国語をそれなりに伸ばすことができたと思います。

2週間の留学はとても楽しかったのですが、あまりにも短かったので、本格的に1年間の留学に行きたいと考えていました。また、中国政治ゼミにいたこともあり、留学するなら北京に行こうと決めていました。当時の立教大学は、北京に交換留学先がなく、卒業までに留学することができませんでした。学生時代に留学していたら就職活動の選択肢が広がったと思いますが、私は諦らめず、社会人4年目に仕事を辞め、夢の北京留学を果たしました。

北京に1年間留学してみましたが、期待していたほど中国語が伸びた感じもしないし、もう少し中国にいたいと思い、そのまま北京に残り、日立建機の北京事務所で秘書として働くことになりました。その後は、政府系金融である国際協力銀行（JBIC）の北京事務所の駐在員というポジションで働く機会を得ました。

プライベートでは、北京滞在中に北京立教会に参加しましたが、それまで全くつながりのなかった先輩、後輩、留学生と知り合えて嬉しかったです。やはり立教は観光系に強いのか、ホテル、航空業界、旅行会社などの先輩と知り合えて、現地ならではの仕事の話や裏話なども聞けてとても楽しかったです。先輩のお宅でホームパーティ、バーベキューをしたり、ローカルの中華料理のお店で食事をしたりしました。中国というつながりはなかなか深く、一緒に復旦大学に行った友人たちとは20年たった今でもつながりがあり、先月も会ってランチをしました。12年ぶりに復旦大学に一緒に旅行に行き、留学当時と比較しながらキャンパスを歩いたりもしました。また、先ほどお話しした国際協力銀行で働いていた時、北京の日本大使館で勤務する夫と知り合い、結婚しました。今は2人の子どもがいます。

最後に、現在の仕事について少しお話しします。私が今働いている、エネルギー・金属鉱物資源機構（JOGMEC）は経済産業省管轄の独立行政法人です。私はそこで石油を備蓄する部門の中国側の

窓口をしています。中国人が日本に来た時のお世話をしたり、私が中国に出張することもあります。中国語の書類の翻訳や簡単な通訳など、今でも中国語を使う機会はあります。

最後になりますが、大学 1 年次生で中国語を始めた時、ここまで中国と深く関わることになるとは思ってもいませんでした。復旦大学に行ってなかったら、今の仕事、友人関係、家族は全然違っていたと思います。皆さんはコロナ禍で中国への旅行や留学は難しいとは思いますが、中国語を使う国はたくさんあります。また、社会人になってから中国語圏への出張や駐在のチャンスもあると思います。中国語の発音の勉強は地味でつまらないですが、本当に大事です。ぜひ、中国語の勉強を楽しく続けていただきたいです。応援しています。今日はどうもありがとうございました。

森平（司会） 石橋さん、どうもありがとうございます。お話しくださったとおり、サバイバル中国語というのでしょうか、教科書で学ぶ中国語ではない、生きていくのに必要な中国語を勉強できるというのは、留学に行って初めて気付くといいますか、一番トレーニングできることだと思います。それから、立教の校友会の話をしてくださいました。世代、職業、地域を超えた人たちと出会うという、それも留学ならではの機会ですよね。こういうものがあると本当に世界が広がるなあと思います。
南雲先生も石橋さんもそうですけれども、21 世紀初頭と今の中国が一番違うのは、日本との経済格差だと思うのですよね。私も 2000 年代に留学していて、その頃の中国はとにかく安くて行きやすいというイメージがあったのですけれども、これからお話ししていただく政岡さんや若月さんが留学した時期になりますと、逆に「中国は高い」というようになって、留学するには少し敷居が高くなるのかなと思います。石橋さんは 20 年ほど中国とお付き合いされているわけですが、経済的な日本と中国の差について、20 年間で大きな違いを感じることはありますか？

石橋 食事はだんだん高くはなってきましたし、社会人になるとそれなりにいいレストランに入ったりするので、「こんなにするんだ」というのは感じます。

逆に、バス代はずっと安いままだと思います。北京ではカードを使えば 0.4 元程度で乗れます。

森平（司会） ありがとうございます。石橋さんの発表は以上になります。続きまして、文学部を卒業されています政岡さんに、台湾の留学についてお話ししていただこうと思います。では政岡さん、どうぞよろしくお願いいたします。

留学先：国立台湾師範大学、実習先：香港聖公會明華神學院

政岡 和佳（横浜市鶴見図書館）

政岡 まず簡単に自己紹介をさせてください。私は文学部文学科日本文学専修を 2020 年に卒業し、今は社会人 3 年目です。滞在先は国立台湾師範大学です。先ほどの石橋さんと同じく、全カリ海外言語文化研修に参加しました。加えて 3 年次に、香港聖公会の明華神學院というところに司書課程の図書館実習で参加させていただきました。現在は横浜市の鶴見図書館で司書という専門職として勤務しております。今年「ちむどんどん」という朝ドラがありましたが、その舞台の一つに鶴見が選ば

れていたので、その関連で、区役所と連携した事業で横断幕を作ったりなどの業務もしています。

本日お話しすることは、どうして私が語学研修に参加したかということと、台湾と香港での体験となります。そしてまとめに、学んだことと、もっとやりたかったと思ったことを共有できればと思っています。台湾と香港の魅力を少しでもお伝えできたら嬉しいです。

政岡 和佳さん

2年次に滞在したのが国立台湾師範大学で、語学研修として参加しました。台湾の台北と呼ばれるエリアにある大学でした。文字は、学生の皆さんが最初に習う簡体字ではなく、繁体字と呼ばれる字を使っているところになります。

また、3年次に司書の図書館実習として滞在していたのが、聖公会の明華神學院というところです。香港島北岸に位置するセントラル（中環）という駅が最寄り駅で、その名のとおり香港の街の中心にある大学でした。ビル街に所在する大学です。こちらには1か月程度滞在していて、文字は繁体字を使っているところでした。

まず、そもそもなぜ私が語学研修に行ったか、そしてなぜ短期だったか。単純に、自分の実力を試す機会が欲しかったからです。私は第2外国語がある高校に通っていたので、高校1年次に中国語を第2外国語として履修しており、大学でも同じく中国語を取っていました。ですが、なかなか話す機会がなく、せっかくだから話せるようになりたい、自分の実力はどのくらいなのだろうと気になっていたため参加しました。私には、日本でやりたいことがとてもたくさんありました。例えば、吹奏楽団に所属していたのでサークル活動や、私の夢であった司書になるための司書課程、そしてそれを受験するための公務員試験の勉強、ほかにもアルバイトなど、たくさんありましたので、短期の留学で実力を試してみようと考えました。また家庭の事情でお金がなかったので、長い期間行くということが、どうしても学生の間は難しかったのですね。そのため短期のものを選びました。

ここから台湾での体験について話していきたいと思います。台湾での授業は、先ほどの石橋さんと同じく、テストでレベル別に分かれて、現地の先生に語学を習いました。クラスは立教生だけではなく、熊本や岩手など、日本のいろいろなところから来ている学生もいました。会話に特化した授業だったため、そこでまず私自身の目標であった「自分の言語力がどのくらいか」を試すことができました。また、課外研修では九份に行くことがあり、日常会話程度はすぐに使えるので、滞在中のモチベーション維持にもつながりました。

写真③国立台湾師範大学

授業外の活動では三つのことを得ることができました。

一つ目は、「訪れた地域の文化を知り興味を持つきっかけ」です。というのも、恥ずかしながら私は留学に行く前に何の知識もないまま台湾に行ってしまっ

写真④台湾の街の様子

たのですね。ですが、行ってみるととても素晴らしい国だということがわかりました。例えば、私が使っていた教科書に出てきた「鶏肉とナッツの炒め物」がどんな料理か全くわからなかったのですけれども、実際に行ったことで「こういう料理なんだ！」と理解することができました。このように、日本で学んだことを現地で「こういうことなんだ」と学ぶことができ、とても思い出に残っています。

二つ目は、「現地の学生との交流で会話スキルの習得」です。現地の学生がサポーターになってくれたので、その子たちと授業の後にいろいろなところへ出かけました。そこで教科書的ではない中国語を学ぶことができました。「教科書ではこう言っているけれど、実際にはこう言う」という会話表現がたくさんあり、とても勉強になりました。

最後に、「“外国から来た人”の体験」です。言語が違うと急にやり方がわからなくなってしまうという経験が多々ありました。例えば、切手を買いに行くという機会があったのですね。切手なんて郵便局でパッと買えるはずなのに、全くわからなくなってしまって困ったことがありました。その時は現地の方が助けてくれてなんとか買えたのですが、そういった経験が私の中でとても印象に残っていて、この経験が就職後に非常に生かされました。鶴見図書館には外国につながる方がたくさん来館されて、日本語を話せない方も多いのです。そういった方にどういった対応をすればお互いに気持ちよく利用できるかということを考えるための視点を身に付けることができました。非常に有意義な体験だったと、そういう側面からも実感しました。

私が滞在していた 2017 年当時の日常生活を簡単にお話したいと思います。台湾はバイク社会で、大学の周りもバイクがブンブンと何台も走っていました。私の台湾の友人もバイクに乗って会いに来てくれました。また毎日、夜市という、日本でいうお祭りのようなものが開かれていました。キャラクターを模ったお菓子のようなものもたくさん売っていて、毎日面白く食事ができたのはいい思い出です。エビを釣る釣り堀にも行きました。エビを釣って自分で料理する場所で、全く料理方法もわからないままで行ったのですが、現地の方に助けていただきながらもぐもぐ食べていました。市場では、日本の食材と

写真⑤台湾の美容院にて

はどのような違いがあるのかを見ながら楽しんでいました。台湾の美容室では髪を洗う時に上にのばしてくれると噂で聞いていまして、本当かなと思い、ちょうど髪が長かったので行ってみたら、本当にやってくれました。とても嬉しくて、写真を撮らせてもらいました（写真⑤）。こうした楽しい体験が台湾ではできましたので、語学研修に参加する予定の方は参考にしていただきたいなと思います。

では、香港での体験について説明していきたいと思います。3 年次に香港に図書館実習に行きました。2 年次の語学研修が、もっと中国語圏に行ってみたいという活力になりました。留学経験は、専門職として勤める前の面接で「こういうことをやってきました」と自信を持って言える将来の夢への大きなステップになりました。図書館司書として就職したあとも、経験は生きています。例えば、外国語資料には中国語圏のものもありますので選定をしたり、窓口対応で筆談や口頭でお話ししたりすることもあります。

香港は食が素晴らしいです。香港の方はお休みの日の午前中に家族で点心を食べに行く習慣があるそうで、私も連れて行ってもらい、いろいろ説明をしてもらいました。続いて、香港と船で、短時間で行けるマカオについてお話ししたいと思います。マカオはカジノがありますので、こっそり行ってドキドキしました。マカオ大学ではカジノに関連した経営学を学べるといったことを教えてもらい、驚いたのを覚えています。

留学では自分の語学力を良くも悪くも実感できると思います。そして、現地への興味を持ってさらにいろいろ学べるきっかけになると思います。それから私のように、その後の図書館実習につなげるなど、将来の夢へのステップになる方もたくさんいらっしゃると思います。一方、心残りは、もっと長い間滞在したかったということです。また、日本のこと、外国のことをもっと知っておけば、滞在先での情勢を鑑みつつ、日本ではこういう感じだよと情報共有の幅が広がったと思います。留学を検討されている方は、そういうことを気にされるといいのではないかと思います。発表は以上となります。ありがとうございました。

森平（司会） 政岡さん、ありがとうございました。今回、政岡さん以外の方はみんな中国大陸にある大学への留学体験の話で、唯一香港・台湾へと行かれました。立教大学では現在、政岡さんがおっしゃったとおり、台湾師範大学での短期研修を行っておりますので、ぜひ皆さん参考にしていただければと思います。政岡さんに伺いたいのですけれども、司書になりたいというのは留学前から決めていたことなのでしょうか。

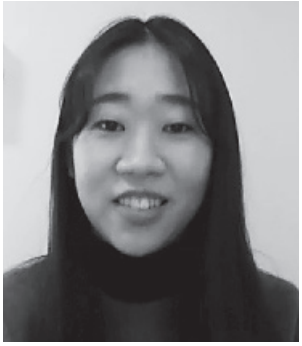
政岡 そうですね。幼少期からずっと夢でした。司書になるにはいろんな人と会話ができないといけないと思い、中国語を始めたという感じですね。

森平（司会） 夢がかなって、今のお仕事をされているということでうらやましいですね。政岡さん、ありがとうございました。

では 4 人目の発表者、若月さんに発表していただこうと思います。若月さんは現代心理学部をご卒業で、現在、中国にオンラインで留学中です。では若月さん、よろしくお願いいたします。

留学先：山西大学、中国人民大学

若月 来夢（中国人民大学国際文化交流学院修士課程 2 年次）



若月 来夢さん

若月　はじめまして、立教大学卒業生の若月来夢と申します。まず自己紹介からさせていただきます。私は立教大学の現代心理学部心理学科を 2019 年 9 月に卒業しました。現在は中国人民大学の国際文化交流学院の修士課程 2 年次生です。コロナ禍の影響でずっと留学ビザが取れず、現在まで 1 年半、オンラインで留学しています。この大学院の留学が初めてではなく、大学在学中に 2 度、中国へ留学に行きました。本日は、その留学のことも含めてお話しできればと思っています。

私は中国への留学は 3 回行っています。1 年次の春休みに国際センターが主催する山西大学への春季言語文化研修で 3 週間、3 年次の秋学期から 1 年間大学間派遣留学制度を利用して中国人民大学に行きました。そして、卒業後の現在は大学院に留学しています。

留学についての話の前に、私の中国語の学習についてお話ししたいと思います。私は大学 1 年次に第 2 外国語として中国語を初めて学習し始めました。そこから、立教大学の中国語の授業や留学を通して、現在まで学習をしてきました。

では留学についてお話ししたいと思います。まず、山西大学春季言語文化研修についてです。この研修に参加しようと思ったきっかけは、大学 1 年次の 1 年間、第 2 外国語として中国語を勉強してきて、中国についてとても興味が出てきたからです。1 年間勉強した中国語を使って、実際に中国に行って見てみたいという気持ちから、研修に参加しました。この 3 週間、平日は主に中国語と中国文化の学習をしました。休日は 2 度あったのですが、そこでは山西省の観光に行きました。

写真⑥山西大学にて中国伝統楽器“二胡”体験

平日の午前中は中国語の授業を受けました。クラス分けテストで初級と中級に分かれ、それぞれライティング、リスニング、スピーキングなど、各分野に分かれて中国人の先生に教わりました。私はこの時は初級のクラスでした。立教生以外にも、日本の他大学や、他の国の学生も一緒に授業を受けました。午後は主に中国の文化の学習で、中国伝統楽器の二胡や、中国画、習字を実際に体験できました。また、中国語以外にも、中国の社会について中国語で学ぶ時間がありました。そこでは中国人の先生が全て中国語で現在の中国についてお話ししてくれたのですが、私の中国語レベルが理解できるほどではなかったため、資料を見ながら一生懸命話を聞きました。

学生交流会では、日本語学科や芸術学科、立教会

……これは山西大学の先生方の中に立教大学に留学したことのある方が何人かいらっしゃって、その方たちが立教会という名前で集まりを作っており、その方たちと交流することもありました。この学生交流会で出会った方々と自由時間に食事に行ったり、キャンパス内を案内していただいたりしました。自由時間である放課後や昼休みは基本的にキャンパスにいたのですが、ちょうどこの３週間の間に、中国の元宵節（元宵节）が重なったので、その日の夜は外に出かけ、中国のお祭りの雰囲気を楽しむことができました。すごく大勢の方が外に出て、食べ物を食べたり、写真を撮ったりしていて、とても思い出に残る一日でした。

週末は、山西省に多く残る歴史的な建物や街の雰囲気を見学に行ったり、博物館で山西省の名産、黒酢の製造過程の見学をしたりしました（写真⑦）。二度目の週末には有名な石窟や、崖にそびえたつ仏教寺院に行きました（写真⑧）。どちらも中まで入って見ることができました。歴史の教科書にも出てくるような有名な場所なので、写真では見たことがあったのですが、実際に行くととても迫力があり、貴重な体験でした。

写真⑦世界文化遺産の一つである“平遥古城”

写真⑧断崖絶壁に建つ「懸空寺」

山西大学での言語文化研修は、日本や日本人に対する中国から見た印象を肌で感じ、また、日本とは違ったマナーや中国独自のサービスなど、日本では体験できないことを体験できた３週間だったと思っています。やはり中国に実際に行って自分の目で見て感じることって大事だったなと思いました。また、中国や日本という国の概念を超えて、個人として交流していくことも大事だなと強く感じました。この３週間を通して、より長期間、中国で生活してみたい、そして今回は山西大学のある山西省だけだったので、中国のさまざまな側面を見てみたい、特に北京に行ってみたいと考えるようになりました。

中国で長期間生活するためには、まず中国語力を向上しなければいけないと思いましたので、主に語学を勉強するために３年次の秋学期から１年間の派遣留学に行きました。北京に行きたかったため、留学先は中国人民大学を希望しました。中国人民大学は「党の大学」と呼ばれるほど、政府とのつながりが強いです。今年の春には、党のトップがキャンパスに見学に来ていました。人文科学系の大学で、コロナ前は留学生の数がかなり多く、1200 人ほどいました。私は留学期間中に HSK6 級は取りたいという目標を立て、中国語力の向上を目指しました。同時に、現代心理学部で認知心理学を専攻していたので、卒業論文のために「感情認知における日中文化差」についての実験を留学期間中に行う計画も立てていました。

写真⑨中華人民大学の象徴的教室棟である“明徳楼”

中国人民大学のキャンパスは日本の大学に比べるとかなり広く、図書館や博物館、体育館など、一つ一つの建物がとても大きくて、特に私は図書館が大好きでした。たくさんの本があるのはもちろんですが、学習スペースもとてもきれいなところがありました。中国の学生は自習する方がとても多いので、席を取ることがかなり大変だった印象です。主に教室がある明徳楼という棟は、広くて大きくて、最初の頃は中に入ると迷ってしまいました。

平日は、午前中に中国語の言語学習の授業があったため、午後の時間に、日中交流イベントに参加したり、自分の実験を進めたりしていました。寮は一人部屋を選びましたが、部屋の中にシャワー室やトイレが付いていました。

週末や国慶節での短期休みを使って内モンゴルや天津、そして山西省に行きました。北京市内の観光も週末を使って行きました。

この留学期間中にコロナウイルス感染症の流行が始まり、派遣留学は途中で中止になってしまいました。立教大学から「派遣留学中止」という指示があった時、私は中国の友人の家がある河北省にいました。帰国の準備をしようと思ったのですが、荷物やパソコンは全て人民大学の寮に置いたままでした。人民大学はもう封鎖されてしまっていたので、結局 3 か月間、中国人の友人の家で過ごさせていただきました。

最終的には寮のスタッフの方から荷物を郵送していただき、ハルピン市から日本へ帰国しました。この 3 か月間、日本語を話せない中国人の家庭で過ごさせてもらったため、中国語はかなり向上しました。また、中国人家庭の中に外国人である私が 3 か月間もの長い期間滞在することになっても、嫌な顔一つせず家族のように接してくれた中国人家庭の温かさを感じることができた期間でした。

コロナ禍で、飛行機がなくなってしまったり、隔離が長く続いたり、また外国人ということで警察署に呼ばれたりなど、それまでの留学期間とは大きく違った生活だったのですが、それもまたいい経験になったと感じています。もちろん、留学が途中で中止になってしまったのは今でも大変残念に感

じているのですが、この期間にしかできないことを経験できました。

この留学を終えて、中国語力は向上し、目標であったHSK6級も合格できました。また、中国人はもちろん、日本人の他の留学生の方とも友人として出会うことができました。ですが、先ほどお話ししたとおり、中途半端になってしまったという思いが残る留学でした。そこから、もう一度中国で生活したい、正規の学生として学びたいという思いが湧き、さらに卒業論文を発展させた研究がしたいという思いもあったため、大学院留学で再び人民大学に行こうと決めました。

ここからオンライン留学です。大学院生としてのこの1年半、私が過ごしてきた生活をお話ししたいと思います。大学院では、国際文化交流学院という、2019年に文学部から分かれて新しくできた学部に進学しました。主に学ぶことは、中国語の第2外国語教育についてです。さまざまな専門の先生方がいらっしゃって、立教大学で認知心理学を学んでいた私は、認知心理学の知見を活かして、第2外国語教育について学ぶことができると考え、この研究科を選びました。現在は、日本人中国語学習者の中国語単語認知について、認知心理学の視点から研究をしています。

私が今まで感じたオンライン留学のメリットとデメリットについてお話ししたいと思います。メリットは、日本でほかのこともしながら大学院の授業を受けられるという点です。また、私以外の留学生はさまざまな国から来ているのですが、幼少期から中国で生活している方だったり、両親のどちらかが中国人だったり、中国語レベルはほぼネイティブレベルの方がほとんどで、その中で私が発言するとなるとレベルの差を感じることがあるのですが、オンラインでは一人ずつ順番に発言の機会が与えられるなど、発言がしやすいという点で、私にとってはメリットがあります。デメリットとしてはやはり、先生や他の学生とのつながりが最低限となってしまうことや、学校の中で行われる行事やイベントに参加できないこと……オンラインでは参加できますが映像を見るだけになってしまうので、現地で参加したかったという思いがあります。

私は現地留学もオンライン留学も体験したのですが、両方ともメリット・デメリットがあります。なので、留学するなら自分で目的を持ち、何がしたいかというのが一番大事だと思います。充実させられるかどうかは自分次第だということを強く感じました。

最後に、今後の進路について。来年の7月に大学院修了予定です。その後は中国語教育や、認知心理学の分野で研究や教育に携わりたいと考えています。ご清聴ありがとうございました。

森平（司会） 若月さん、ありがとうございます。発表を聞いていて、うらやましいなという経験が二つありました。一つは山西省にいたこと。私も中国語と関わって30年近くになりますけれども、恥ずかしながら山西省に行ったことがないのですね。山西省に行ったというだけでも、多くのネタを我々に提供してくださるのではないかと、非常に貴重な体験だと思います。それから二つ目が中国でコロナ禍を体験されているということですね。これも普通の日本人、あるいは中国語をやっている日本人でもなかなか体験できることではないですけれども、ちょうどコロナ禍が始まる頃に中国にいらっしゃって、そこで3か月も友人の家で過ごされたと。こうした経験は、当時はしんどかったと思うのですけれども、今となってはネタの宝庫といいましょうか、いろいろなことが話せる、非常にうらやましい経験だと思います。お伺いしたいのですけれども、そもそも若月さんはなぜ中国語を第2外国語として履修しようと思われたのですか。

若月　中国語を勉強しようと最初に思ったのは、もともと漢字が好きで、漢字を使っている言語ということと、本当に単純な理由で、面白そうだからです。そして森平先生がおっしゃったように、留学してから人生が変わった部分がありました。山西大学に行ってから、もっと生活したい、中国を知りたいという気持ちがどんどん膨らんで、今に至ります。中国語を勉強し始めた頃はまさか自分が中国の大学院に進学するとは思ってもみなかったので、やはり留学を通してさまざまなことに出会うと大きな変化があるというのは本当に感じます。

森平（司会）　ありがとうございます。若月さんの大学在学中の中国語の勉強の型は、まさに我々、立教の中国語教育研究室がモデルケースとして公開したい内容になっていますね。まず大学 1 年次に第 2 外国語として中国語を選び、1 年次の春休みに短期語学研修に参加し、2 ～ 3 年次に長期の派遣留学を利用する。その間、日本にいる間に上級中国語科目や言語情報処理論といった自由科目を履修する。もしよろしければ、1 月にある自由科目説明会でそのまま使わせていただきたいくらい、モデルケースとして素晴らしいです。今、若月さんは修士論文を作成されているということですので、修士論文の完成を我々も楽しみにしております。どうもありがとうございます。

　では、発表してくださいました南雲先生、石橋さん、政岡さん、若月さん、どうもありがとうございます。皆さんに共通しているのは、最初に語学研修で短期滞在されて、それを機にもう一回現地に行かれています。二度、三度とさらに行かれた方も多い。視聴している皆さんもわかると思いますけれども、一回行くと大きく世界が変わる。最初の一歩というのがとても大事なのですね。石橋さんの発表にあったとおり「大学で連れて行ってくれるなら行ってみよう」という軽い気持ちで構わないと思うのです。行ってみてわかること、知ることがたくさんあります。確かに嫌な思いも、しんどいこともあると思うのですけれども、その時は大変かもしれませんが、帰国するとそれは完全にネタになります。中国は、話題提供に事欠かないですね。中国語をやっている人間だからそう思うのかもしれませんが、これほど我々にネタを提供してくれる場所はないのではないかと思います。他の国に行くなら、そんなにないんじゃないかと思うようなアクシデントやエピソードや出会いがあり、それがその後の人生にかけがえのない経験になるのかなと思います。留学はこれからまた再開されると思いますので、ちゅうちょすることもあるかもしれませんが、ぜひ第一歩を踏み出していただきたいです。そうすると新しい世界が見えてくるのかなと思います。

　発表者の皆さん、後輩のために準備していただきまして本当にありがとうございました。最後に、卒業生の皆さんに、これから留学しようという方に向けて一言ずついただければと思います。

石橋　中国語の特に 1 年次の授業は、発音の授業ばかりで面白くないなと、正直思っていたのですけれど、そこで基礎を固めていかないとそのあと、もう教えてもらえない。基礎固めはとても大事です。私は中国語を立教で勉強したのですけれど、留学してから「中国語学科なの？」と言われるくらい、しっかり勉強できるので、どうぞ頑張ってください。応援しています。

政岡　私も最初の勇気がなかなか出なかったのですが、行ってみたら逆に、むしろ通じなくてもノリで何とかなるようなところもあります。最初の一歩を踏み出していただければ、就職にも役に立ちま

すし、経験の幅も広がると思うので、ぜひやってみてください。

若月　私も最初に中国に行った時はほとんどしゃべれず、聞き取れずという状態でした。でも中国に行ったら助けてくれます。頑張って伝えれば伝わるというのは、本当にそう思います。また、中国語は続けていくことが大事だと思います。コロナ禍で向こうに行けないこの期間も日本で勉強を続けていければ、将来絶対に役に立つはずです。また中国に行けるようになった時に中国語で話ができるように、今たくさん準備しておくことも大事だなと思っています。頑張ってください。

森平（司会）　ありがとうございます。では、2022 年度「世界を知ろう！～中国語講演会～　私の留学時代」を終了させていただきます。皆さん、最後までご視聴いただき、ありがとうございました。

全学共通科目言語 B 連続企画
世界を知ろう！　2022 年度 講演会筆録

2023 年 3 月 29 日発行

発行人　井川 充雄
発行所　立教大学 全学共通カリキュラム運営センター
印　刷　ライオン企画株式会社

立教大学
全学共通カリキュラム運営センター